

他にも賛成の貴族多かりき。學者にてメランヒトンの如きは、大にルテルを援助せり。ルテルは、千五百二十一年の四月より翌年三月迄、ザクセン侯のワルトブルグ城中に隠れて、聖書翻譯に従事せり。千五百二十四年には寺院を脱し、其翌年カタリナ、フォン、ボラと婚せり。千五百廿九年シ、バイエル府の議會は、宗教改革運動を防遏せんと議す。新教徒之に抗論す。茲に於て反對者たる新教徒をプロテスタントと稱するに至れり。プロテスタントとは、蓋し抗論者の義なり。かくしてルテルは、千五百四十六年二月十八日アイスレーベンに死せり。ルテルの生涯は、グスターフ、ブイツェル及びモリッツ、モイレル等のルテル傳に詳なり。今は其概要を擧ぐるのみ。

ルテルが宗教改革者として、宗教界に貢献せしは、茲に贅言するを要せず。新教は實にルテルの賜なり。宗教家としてのルテルは、姑く茲に論せず。言語學者として、新南獨逸語の開祖としてのルテルに就き、少しく説く所あらんとす。

ルテルは、中古の教會主義に反抗して、宗教改革を呼號せしに止まらず、聖書を翻譯して獨逸語を統一せり。聖書翻譯は、ワルトブルグ城中に於て之を始め、カッテンベルグに於て終りたり。新約聖書は、千五百二十二年九月に出づ。所謂「九月聖書」セプテムベル（九月）なり。舊約聖書は、千五百三十二年に脱稿し、新舊兩聖書共に、千五百三十四年カッテンベルグに於て、ハンス、ルフトによつて印刷されたり。ルテルの聖書は、羅句譯によらず、各其原本について翻譯したるなり。ルテル一たび聖書を出版せし後、今日迄夥多の翻譯家相次いで出でたり。ヨージェフ、フランツ、フォン、アリオトリ、レアンデル、カール、ファン、エス、ホルヘルム、デエッテ、ヨジアス、ブンゼン等は、新舊約兩書を翻譯し、カール、ワイツゼッゲルは、新約聖書を翻譯したり。後世文献學及び批評學の進歩に伴うて、聖書の一言一句の翻譯は、よく原文の意に合し正確となれり。されど其精髓骨肉に於て、廣く世間一般に宗教心を鼓吹する事に於ては、一としてルテル譯に及ぶものなし。ルテルは、聖書の語を翻譯するに際し、之を神の語とし、自から畏敬の

念を以て、神意を傳へんとして譯し、必ずしも字義の正確のみを事とせざりき。

ルテルの聖書に關して論じたる書にては、フィリップ、マルハイニケの「ルテル譯獨逸聖書の宗教的價值に就いて」及びゲオルグ、ホップの「ルテル譯聖書の價值」等は、就中著名なり。ルテルの著書にて、書簡、祈禱文等後世の模範となる可きもの多し。

ルテルは、翻譯家としてのみならず、散文家として獨特の文藻を有したり。其著名なるものを擧ぐれば、左の如し。

「耶蘇教改善に就いて該教信者たる獨逸貴族に告ぐ」「教會のバビロン幽閉に就いて」「耶蘇教徒の自由に就いて」「説教集」「獨逸各市長及び市會議員に與へて耶蘇教學校設立の急務を論ず」「席上演説」等なり。ルテルが、聖書翻譯に用ひし言語は、ザクセン國文書局の用語(シユブラーヘ、デル、セクシエン、カンツライ)にして、所謂普通語(ゲマイネ、シユブラーヘ)なり。是此語は、南方語の硬と北方語の軟との中庸を得しものにて、南方

人にも、北方人にも等しく解せらるゝが故なり。ルテルが、此語を翻譯に採用せし意も、蓋し聖書の廣く讀まるゝことを希望せしにあり。此語は實に當時紛雜なりし方言を統一して、獨逸國語となれり。新南獨逸語と稱する現今の獨逸語は、則ち此語なり。されど言語は時々變遷するものなれば、現今の獨逸語は、ルテル時代の獨逸語と大に語形を異にするなり。これ特に獨逸語に然るにあらずして、世界各國の言語に徴して見る可き現象なり。

翻譯家、散文家として傑出せしルテルは、又詩才に於て秀てたり。ルテルの教會歌(キルヒェンリド)は、宗教改革時代の抒情詩中他に及ぶものなし。されば、ルテルは、ソルテル、フォン、デル、フォーゲルワイデ以來の抒情詩家と稱せらる。ルテルの詩は、詩形、聲調、巧妙ならずと雖も、風韻自から高雅なるが如し。

ルテルは、羅句詩を獨逸詩に翻譯し、又獨逸古代の詩を改削したり。羅句詩を譯したるものにては、「主よ、我等は、爾を讃す。」「我等は、皆一の神を

信ず、『生の真中に我等は、死に圍まる。』來れ、聖靈よ、神よ』等にして、古詩を
 改作したるものにては、『讚美を受け給へ、エスクリストよ、』基督は、死の細
 目に繫りき』等名高し、聖書の讚美歌を改作せるものにては、『我等の神は、
 堅固の城なり、』『アー、天の神、見玉へや』、『主よ爾の語通り、我等を護らせ玉へ』
 及び降誕祭の歌、高き天より我は來れり』等は、活潑々地の信念を披瀝せ
 るものなり。

パウル、スベラーツス、ニコラウス、デーチウス、フイーリップ、ニコライ等は、
 ルテルに倣ひて讚美歌を作れり。

ルテルは寓意譚(フアーベル)を書きしが、エソツプより譯出せしもの
 多かりき。ルテルに次いで、エラスムス、アルバルスは、『徳と智との書』を著
 はし、書中四十九の寓意譚あり。ブルハルド、ワデイスは、四百餘の物語を書
 き、『エンゾーブス』と名づけたり。此二人は、ルテルの例に倣へるものなるが
 其作りたる寓意譚は、十八世紀の寓意詩人(フアーベル、ディヒテル)の模範と
 する所なり。此時代に寓意譚と動物譚詩との中間に位すべき一種の詩

1. Ulrich von Hutten.
2. Thomas Murner.

あり。此種の詩は、比喩的諷刺的にして、智識上の真理と、道徳的格言との
 双方を含むものなり。其大作と稱せらるゝものは、ゲオルグ、ロルレンハ
 ーゲンの作『フロッシュモイゼレル』なり。ゲオルグは、カッテンベルグに於て、メ
 ランヒトンの門に入り、教を受けし人なり。千六百九年マグデブルグに
 於て、學校長奉職中に死せり。此作は、ホメールの『蛙鼠合戦』、『パトラヒョーミ
 オマヒー』に基くと雖も、其詩の句數は、遙かに多くして、ホメールの三百
 句より多きこと、九千七百句なり。此詩は、ゲーデッケーの著『十六世紀獨逸
 詩人』中に出てたり。

第二章 (1)ウルリヒ、フォン、フッテン (2)トーマス、ムルテル

文藝復興運動の中堅となり、宗教改革の理想を貫かんとして熱心に
 盡力せし人の一に數ふべきは、ウルリヒ、フォン、フッテンなり。フッテンは、千
 四百八十八年四月廿一日ヘッセン州のフルダに近き、シテッセルベルグ
 城に生まる、而して千五百二十三年八月廿九日、チューリッヒ湖上ウフナウ
 島に死す。生涯時流に抗して戦ひ、大に落魄して、失意の極遂に死せるな

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
 ルテルよりオーヒツツ迄、千五百年より千六百二十四年迄。
 第二章 ウルリヒ、フォン、フッテン、トーマス、ムルテル。

り。

フッテンは愛國慨世の士にして、本國の爲めには、劍と筆とを以て大膽に戦ひたる勇者なり。又眞理正義の爲めには、身命を擲つを辭せざりき。フッテンは、羅句詩を書き、又友人クロイツス、ルビアヌスと羅句文の通信をなせり。而して、之を「隠士の書簡」(エヒストレー、オプスクローラム、ピローラム)と名づけたり。後には羅句文を獨逸語に翻譯し、又自から獨逸書を書けり。「專横なる羅馬法王及び破戒の僧侶に對する嗟嘆及び勸告」(「デル、カルストハンス」)の二書は、共に諷刺的のものなり。

フッテンと正反對にして、宗教改革に反抗せし大立者を、トーマス、ムルテルとなす。ムルテルは、シトラースブルグのフランチスカテル派の僧にして、千五百三十六年頃死せり。ムルテルは、諷刺的の才能に長じたる人にして、其著書は、多く冷嘲熱罵を以て充たさる。

『大恐人ルテル』の一書は、偶像破壊及び宗教改革の欠點を指摘したるものなり。『恐人の招致』は、學者の浮誇、僧侶の墮落、侯伯の暗愚、代言人の詭辯及び固執等を非難したるものなり。此書は云ふ迄もなく、セバステア、アンプラントの『恐人の船』(ナルレンシッ)を模倣せしものなれど、其觀察の鋭敏なることは、遂にプラントに優れり。『無賴漢の組合』は、交際社會の腐敗を攻撃せしものにして、『ガウフマッテ』は、當時の社會を嘲りたるものなり。

第三章 (1) ハンス、ザックス。

ハンス、ザックスは千四百九十四年十一月五日、ニルンベルグ市に生まる。父は、裁縫師にして、ハンスが、七才の時羅句學校に入れ、高等の教育を受けしめんとせり。然るにハンスは、學者となるを好まず、十五才の時學校を去り、靴製造人の弟子となれり。されどハンスは、幼少より天賦の詩才を有したり。十七歳の時獨逸國內を巡遊し、大都會には長く留まりて頭領詩社(マイヌテルゼンゲルシヤール)に入り、學才ある職人の仲間入をなせり。五年を経て再びニルンベルグに歸る。千五百十八年温良なる婦人と婚し、幸福なる生活を送りしが、千五百七十六年一月十九日八十二才

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
ルテルよりオーベツツ迄。千五百年から千六百二十四年迄。
第三章 ハンス、ザックス。

にて没せり。最もハンスの師恩に感じたる弟子アダム、ブッシュマンは、ザックスの徳を稱する歌を作れり。此歌によりて、詩人の晩年の状況を知ることが得るなり。

ザックスは、宗教改革の賛同者にして、千五百二十三年にルテルを賞揚したる『カッテンベルクの鷲』(ディ、カッテンベルギッシャー、ナハティガル)と云ふ詩を作り、其他多くの宗教歌を作れり。ハンスは、性來勤勉にして、七十八才の高齡に達する迄、曾て詩作讀書を廢したることなく、古今の諸史を涉獵し、希羅、佛、伊の文學は、翻譯によりて研究したり。勇者物語、フォルクスブーフ、傳説、稗史等は、彼が愛讀の書なりき。かく多く讀みたる歴史其他の事實は、忽ち彼が詩彙に入れり。ヤーコプ、グリムが所謂「彼は一切萬事に就いて歌ひたれども、一も假作せるものなし」と云へるは、蓋し至言なり。或批評家は、ザックスが身分賤しき人なりしを以て、嘲笑的に批評して、ハンス、ザックスは、靴製造人にして、且つ詩人なりと云へど、これ甚だ不當なる嘲罵にして、ザックスは、決して職人風の下賤なる性質を有せず、思想

高尚なりき。中には歌作もあれど、ザックスの作は、總計六千以上あり。

カーランドは、夙にザックスの詩才を賞せしが、後にゲーテは、爲めに一詩を賦して、ザックスの名譽を不朽に傳へたり。

ザックスが他の頭領詩人(マイステルゼンゲル)に、一頭地を抜く所以は、詩材の豊富、詩形の多趣のみならず、又特に深遠なる道念にあり。

此質朴なる工匠は、學者を對手とせずして、却て民衆を眼中に置き、國民に對する最高潔なる徳義の説法者となり、且つ獨逸祖國の熱烈なる好友なりき。此眞摯敦厚の風あると同時に、一面には滑稽諷刺よく人の頤を解かしむるものありて、其諷刺の言中には、深き教訓を含みたり。

ザックスの作りし歌は、マイステルゲザング(頭領詩歌)四千二百七十五首の多きに及べり。千八百七十年ゲーグケ及びティットマンは、協力して、ザックスの詩集を出版したり。

ザックスが書きし説話詩は、其數千七百あり、よく世態人情を寫して、大に詩的價值あり。中にも『聖ペーテルと山羊』『聖ペーテルと傭兵』『懶惰

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
ルテルよりオービッツ迄。千五百年から千六百二十四年迄。

第三章 ハンス、ザックス。

者の極樂」等は滑稽洒落湧くが如く、然も健全なる思想を含める戯談、笑話なり。

ザックスは頗る多方面の才を有し、劇詩家としても著名なり。劇詩の總數は、悲劇、喜劇及び謝肉節劇を合して二百八あり、而して悲劇の材料は、聖書、希臘古文、佛蘭西武士小説、勇者物語等なりき。劇詩として著名なるは、『クリテムネストラ』、『ユーリアンデル』、『アブツリニニゲ』、『デルヘルテ』、『シグフリード』及び『メルジーチ』等なり。されど彼の傑作は、悲劇に非ずして、喜劇及び謝肉節劇なり。喜劇の傑作『ディウングライヘン』、『キンデルエーエ』は、五年の後滑稽談に改作されたり。謝肉節劇にて名高きは『ナルレンシナイデン』なり。エドムンド、ゲツツェは、千八百八十年ハンスの謝肉節劇を出版したり。

十六世紀の後半には、英國に大詩人シェイクスピア出て、劇詩は全盛を極めしが、前編劇詩の條下に述べし如く、英國俳優獨逸に渡來したり。英國及び和蘭より傳はりしは、悲劇、歌劇、滑稽劇（ハンスウルストシユビ

ール）等なりき。ハンスウルストとは、我が國能樂の太郎冠者の如きものにして、和蘭にては、ビッケルヘーリング、佛蘭西にては、マニアン、ボタージュ、英國にては、ジャック、ブッディング、伊太利にては、マカロニーと稱へたり。

英國俳優渡來の影響として、ブラウンシユワイヒ侯ハインリヒ、ユリウスは、其宮中に劇場を設けたり。

此時代に於て、ザックスに次いで著名なる劇詩家を(2)ヤッコブ、アイレルとなす。其作悲劇、喜劇、謝肉節劇及び歌劇を合して七十あり。ディットマンが千八百六十八年に出版せる『十六世紀劇詩』は、ザックス及びアイレル等の劇詩を研究するに重要な書なり。

第四章 ヨハン、フィッシャルト。

ヨハン、フィッシャルトは、千五百五十年マインツに生まる。諸市の大學に遊んで法律を學び、放浪すること多年、シトラーヌブルグに寓居して辯護士となる。後フォルバハに於て裁判官となり、千五百九十年在職中に死せり。

1. Johann Fischart.

2. Jakob Ayrer.

フィッシャルトは、語學の才に長じ、文筆は頗る奇矯なり、諷刺的に時代を嘲り、社會を罵り、以て當時の暗愚と腐敗とを改善せんことを努めたり。フィッシャルトの傑作は、佛蘭西のラベレーの作「ガルガンテユア」を改作せし諷刺的小説「ゲシヒッククリッテルング」なり。千五百七十五年の版にして、當時の悪習慣を指撻して、打撃を加へたるものなり。其最も非難を加へしは、貴族の高慢暴飲、賭博、訟訴、華美の衣裳、學者の尊大等に向つてなりき。

其他諷刺詩として名高きは、千五百七十年に出でたる「夜鶉」「ナハトラーベ」にして、セシエート派に加入せしヤーコップ、ラーベを攻撃せしものなり。又「ペールフューセル、ゼクテン、オーデル、クッテン、シュトライト」、「フィールヒルニゲス、エズイーテルヒュートライン」及び滑稽詩「フレイハッツ」も名あり。散文にては「デル、ピーテンコルプ、デス、ハイリゲン、レーミシエン、イムメンシュワルムス、ウンド、ザイテル、ヒムメルスツエルレン」、「アルレル、ブラクテイツク、グロースムッテル、ブルタルク」に倣ひたる「エーヘツフトヒュヒラ

イン、「アンマースンク、ツィ、クリストリッヒェル、キンデルツフト」、「エルンストリッヒェト、エルマースンク、アン、デイ、リーベン、ドイッチェン」等有名なり。されどフィッシャルトの一代の傑作は、説話詩「チューリヒ市の幸福なる船」(イダス、グリュックハフテ、シッフ、フォン、チューリヒ)なり。此詩は寓意を含むものにして、チューリヒ市と、シュトラースブルグとが親密なる交通をなし、互に利益を圖り、需要供給の便を得しことを、少しく極端なる例を擧げて、所謂詩的に述べたるものなり。されば詩の題號となれる「幸福なる船」も、實在的に非ずして、空想的のものなり。獨逸の二市チューリヒとシュトラースブルグとは相距ること甚だ遠く、僅に數日間の里程あり。然るに此詩にては、曉にチューリヒ市を發したる船、夕暮にシュトラースブルグに著したりとあり。又其船の速力の早きことを示さんとて、滑稽的の例證をなせり。即ちチューリヒにて焚きし粟粥は、釜に入れたる儘未だ冷へざる内に、シュトラースブルグに持ち行くことを得しと、此法外なる比喻は、當時の人民の最も面白く感じたるものなりき。ハインリヒ、グルツは、「フィッシャルトの

全詩集』を出版したり。

第五章 其他文藝上の作品

此時期の終頃に一叙事詩出てたり、詩の眞價よりは、寧ろ作者の爲めに著名なり、これ(イ)トイエルダグク「物語なり、皇帝マキシミアン一世が書き始め、秘書官メルヒオル、プフィンチングが、其後を繼ぎて大成したり。詩の梗概は、皇帝が、マリア、フォン、ブルグンドに懸想して、遂に其願を遂げし迄の戀愛談なり、皇帝は、詩にては、實名を擧げず、變名してトイエルダグクと云へり、トイエルダグクとは、其意義蓋し冒險を好むの意也、マキシミアン帝は、青年の頃より冒險的空想を抱きしと云ふ、又皇后の名も、マリアに非ずして、エーレンライヒ(名譽に富める意)と云へり、而してルームライヒ(名譽に富める意)の王女なり、トイエルダグクは、旅中三狭路を過ぎ、三人の敵に出會ひ、敵はエーレンライヒを奪はんとして、却て殺さる、三人の敵の名も、亦皆比喩的なり、『青年の無謀』(フイェールカ、ティツヒ)『不幸』(ウンフアロー)『政治上の敵』(ナイデルハルド)等之なり、此詩は千五

百十八年多くの木版圖を添へ、高價なる革紙に印刷されたり、グーデツケの著『十六世紀獨逸詩人』中に掲載せり。

十四十五世紀に於て隆盛なりし俗語は、十六世紀に於ても、其餘勢を保てり、前編俗語を述ぶるに當りて、十六世紀の俗語をも併せて詳述せし故茲に之を畧す、宗教改革時代に於て、特に豊富なる文藻は散文なり、吾人は、此種の散文を稱して小説(ロマーン)と云ふ、ロマーンは、獨逸固有のものに非ずして、佛蘭西より傳はりたるものなり、而してもととは散文にあらずして韻文なりき、十六世紀に『アマデイス』と稱する冒險的、空想的の佛蘭西ロマーンが獨逸に傳來したり、爾後アマデイスの如き中古の佛蘭西騎士の冒險談及び一般に空想的冒險的の物語をロマーンと稱するに至れり。

此時代には、ロマーンに類するフォルクスブーフ出てたり、ジムロックは、夥多のフォルクスブーフを集め、グスターフ、シュリープは、拔萃して出版したり。

(ロ)「ライレンブーン」は、シルグ市民の暗愚を嘲りたるものにして、通俗的にして且つ滑稽的のものなり。後年増補され且つ其名を變へて、更に出版されたり。次いで「フォルクスブーフ」中最も有名なる二書は、(ハ)「ファウスト」及び(ニ)「エカグ、ユーデ」あり。

『「ファウスト」』とは、魔術家「ファウスト」の傳記にして、不可思議なる物語なり。ファウストは、シェラーベンのクニットリンゲンに生まる、カッテンベルグ及びインゴルシュタットに於て、神學、醫學、天文學及び魔法を學び、其蘊奥を極め、後進者「ファムルス、ワグネル」を教授したり。ファウストは、天地萬有の理を極めんとて、あらゆる學問を學び、然かも尙満足せず、最後に魔法を及び、宇宙を自由自在に左右せんと企てたり。されば獨り書齋にあつて靜座讀書するを以て足れりとせず、種々の事業を爲さんとして失敗せり。例へば或時新に巨萬の富を得んとして、遂にこれが爲に伯父の蓄財を蕩盡せしことありたり。悪魔と二十四年間同盟の約を結びしが、終に非命の最後を遂ぐるに至れり。

此奇怪なる物語は、後世の文豪に、好箇の材料を供したり。クリンケル、マイレル、ミルレル、グラッペ、レナウ、レッシング等は此物語を改作したり。又ゲーテの著名なる劇詩「ファウスト」は、實に此物語に基因せるものなり。『「ファウストザグ」』の最古の刊行は、千五百八十七年なりとす。『「エカグ、ユーデ」』は、十六世紀の中葉以後歐洲の各市に傳はりし物語なり。『「ファウストザグ」』は、怪力信仰の誤れることを、一の魔術家の傳記として、直覺的に叙述せるものにして、『「エカグ、ユーデ」』は、之に反し無信仰を非難したるものなり。『「エカグ、ユーデ」』によりて、後世ニコラウス、レナウは二詩を作り、ユリウス、モーゼンは、叙事詩「アハスフェール」を書き、其他「ダニエル、シューバルト、ローベルト、ハーメルリング、ベルンハルド、ギーゼク、ヨゼフ、ゼーベル」等も、此物語を基として詩を作り、最近詩人マクス、ハウスホーフエルは、千八百九十四年劇詩を書けり。

十六世紀には、滑稽談(ホ)「シユエンケ」と名づく可き一種の文學現はれた。その中著名なるものは、フランチスカテルの僧ヨハンテス、パウリの

第四編

新南國邊境時代の文學(宗教改革より現代迄)
ルテルよりモーゼヒツ迄。千五百年から千六百二十四年迄。
第五章 其他文學上の作品。

著「罵言と嚴正」(シムプフ、ウンド、エルンスト)。エルザス市役所の書記ケオルグ、ホックラムの著「ロルワーゲンピッツヒライン」(非ルヘルム、ヤルヒホーフの著)「エンドウナムート」等なり。ゲーデケは千八百七十九年「十六世紀の滑稽談」と題する著書をなし、當時の滑稽談の拔華したるものを載せたり。フリードリヒ、デキンドは千五百四十九年「グロビアヌス」の名を付して、羅句文の滑稽談を出版したり。此書は當時の悪習慣を滑稽的に攻撃したるものなり。

最後に記すべきは、歴史的の書にして、エーヤデウス、チーデーの著(「ヘルゲティス、セー、クロニーク」)なり。此書はシルレルが劇詩「非ルヘルム、テ」を書くに際して豊富なる材料となれり。

オーピッツよりクロップシュトック迄。

千六百二十四年より千七百四十

八年迄。

第一章 提要(附)言語學會の設立。

ルテル一たび宗教改革を唱へてより、新舊兩教徒の激甚なる争は、火と劍とにより、夥多無辜の民の生命を奪ひたる後鎮定したり。されど千六百十八年ペーメン人が反旗を翻してより、獨逸國が最も慘憺を極めたる三十年戦争起り、都府零落し、土地荒廢し、商工業振はず、文學技藝衰へ、帝國の統一は破壊され、國民の愛國、獨立の精神は蕩然として地を拂ふに至れり。而して又ハプスブルグ家は、西班牙、埃太利を兼有して、權威強大國民を抑壓せしかば、國民は自國を忘れて、援助を隣邦佛蘭西に求め、獨逸は外國に隸屬するの姿となれり。かくの如くなれば、十七世紀の獨逸國勢は大に沈淪し、最も神聖なるべき、學校は、惡風感染の場所とな

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)

オーピッツよりクロップシュトック迄。千六百二十四年より千七百四十八年迄。第一章 提要(附)言語學會の設立。

り、學術の衰頹、社會の紛亂は、殆んど回復す可からざる有様となれり。

此混亂時代に際しても、國家の前途を憂慮し、治世濟民の策を講ぜんとする學者なきに非ず、フィリップ、ヤコブ、シュペーテル、アウグスト、ヘルマン、フランケ、ヤコブ、ベーム、ブーフ、エンドルフの如き、又博學なる哲學者ゴットフリート、キルヘルム、ライプニッツ、自然法の大家クリスティアン、トマジウス及びライプニッツの哲學説を祖述せしクリスティアン、ヨルフ等は、此時期に出て、獨逸國の爲めに盡したる功甚だ大なりとす。

佛王ルードヴィヒ十四世の朝は、佛國全盛の時代にして、文藝美術の隆盛絶頂に達したり。獨逸は、佛蘭西の優美なる文化の影響を受け、獨逸國民は、學術技藝等凡て自國のものを棄て、佛蘭西を模倣するに至り、獨逸人の精神教化に向つて著大なる變動を來せり。單純なる獨逸風は、漸次消滅して、華美なる佛蘭西の風習之に代はり、従つて剛健端正なる獨逸語は、日々勢を失ひ、圓滑流麗なる佛蘭西語盛に流行し、帝王侯伯の宮にては、佛蘭西語にあらざれば用ゐず、其他の貴族も、之に倣ひて佛蘭西

語を學び、獨逸語を排斥したり。勢斯くの如くなれば、官廳の官吏も、亦佛蘭西の風習を慕ひ、努めて佛蘭西語を話すに至れり。

佛蘭西の文學及び言語は、一瀉千里の勢を以て、獨逸に侵入し來り、獨逸は將に言語の獨立を失ひて、佛蘭西に隸屬せんとするの有様となれり。之を默過する時は、獨逸は國語の獨立を失ふのみならず、國體の尊嚴をも汚がさるゝなり。茲に於て愛國自立の精神を有する二三の侯伯と學者の多數とは、滔々たる時流に反抗して、獨逸國語の勢力を挽回し、獨逸國の體面を維持せんとして、熱心に奔走せり。此國粹保存主義の團結として、社會に現はれ、以て今日に於ける獨逸語の巍然たる獨立を見るに至りしは、一に言語學會設立の舉にあること疑ふ可からず。我國に於ても、言語學の研究日を遂うて隆盛となりしと雖も、爾後益斯道の開發されんこと切望に堪へざるなり。

言語學會の設立されしこと多しと雖も、今は其著名なるものを擧げん。

一、フルフトブリンゲンデゲゼルシャフト、一名椰子樹組合(千六百十七年文學上著名の市ワイマールに設立さる)此會設立の首唱者は、ルードヴィヒ侯なり而して最初の會合はケーテン市に開かれ、後にワイマール、最後にハルレに開かれ、千六百八十年に閉會したり。此會員の章は、椰子樹に萬物利用の文字を刻したるものなり、依つて椰子樹組合の名起りたるなり。會員は侯伯を始とし、皆植物界の名を以て雅號となすに至り、後にオービッツ、グリフウス等の詩人及び其他の著名なる人々此組合に加入したり。バルトールドは、千八百四十八年此言語學會の歴史を著はしたり。

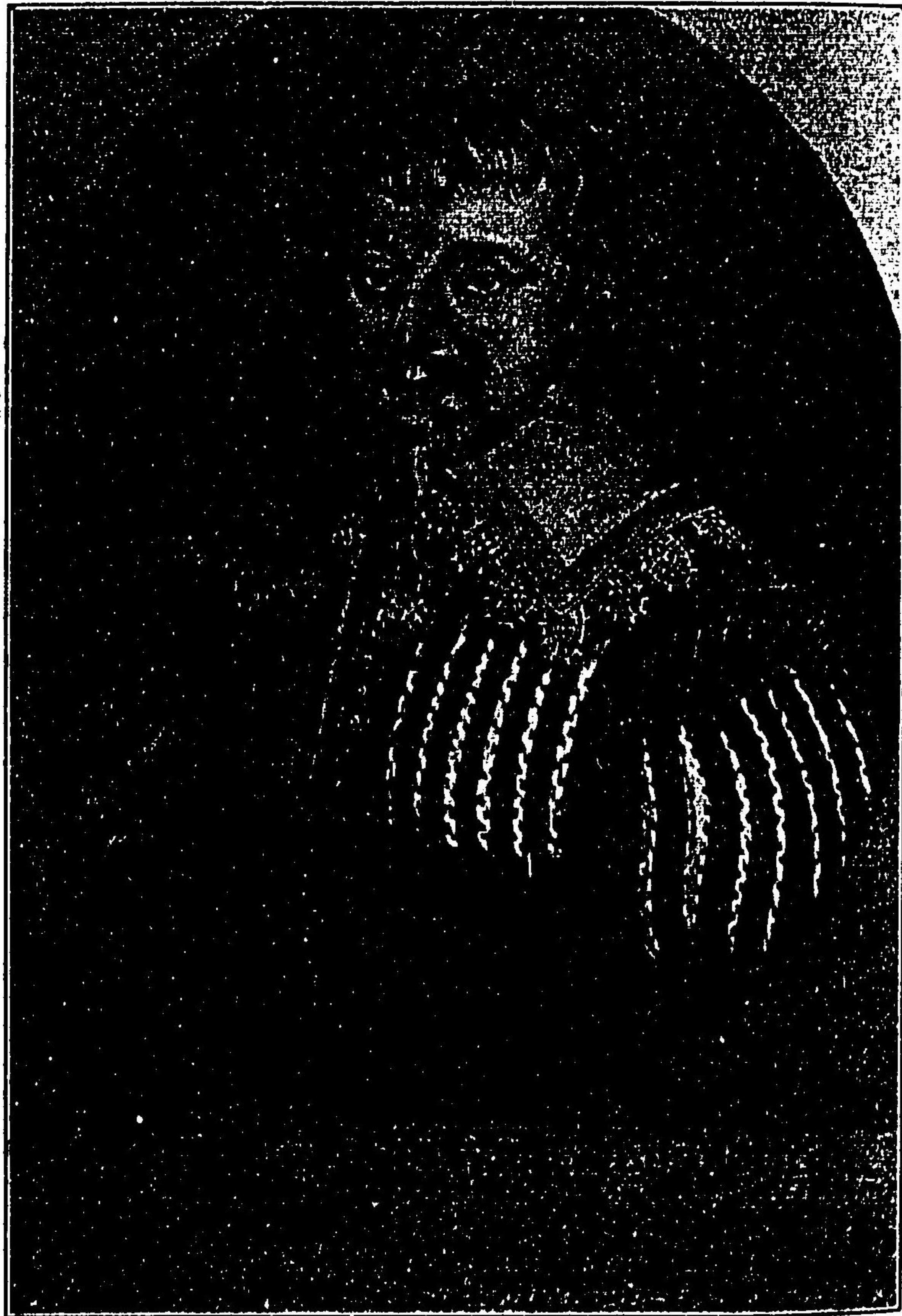
二、ドイツチゲジント、ゲノッセンシャフト、千六百四十三年ハムブルグ市に設立さる。此會の設立者は、フリッブ、フォン、ツェーゼンなり、誠實なる國粹保存家にして、且つ國語の獨立を計らんとして、熱心に盡力せし人なり。されどツェーゼンは、純粹の獨逸語を用ゐんとし、根本的に從來の言語を改良せんとして餘りに極端に走り、外國傳來の慣用語までも改めし

かば、當時の物笑となれり。

三、ペグニッツシエーフェル、一名ゲクレインテブルームンオルデン(千六百四十四年ニルンベルグに設立さる)此會の設立者は始めニルンベルグ市の學校教師にて、後他市の牧師となりしヨハン、クライ及ニルンベルグ市會議員フリッブ、ハルスデルフェルなり。ヨハン、クライは、多くの歌劇及び教會歌を作りたり。又ハルスデルフェルは、一種の『交際社會字書』(ラウエンチムメルゲシユプレヒシヒール)と『六時間獨逸韻律獨習手引』の二書を著はして、名聲を博せり。二書の中『韻律手引』は作詩に便なるものにして、詩歌に於ける用語を記したるものなり。例へば『風』と云へば、通俗の語なれど、詩にては、『雲の追手』又は『花の仇』と稱し、『春』と云はずして『花の父』と云ひ、『葡萄酒』と云はずして『詩人の液』と云ひ、其他『草原』の形容語は、季節に應じて種々あり、『氷結べる』風吹き荒ぶ、『若葉生ひ立つ』花咲き亂れたる、『胡蝶狂へる』吹雪にあれたる等の如し。

四、エルプシユワーチンオルデン、此會はハムブルグ附近の小市の説

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
オービッツよりクロツツシュトック迄(千六百二十四年より
千七百四十八年迄) 第一章 概要(附)言語學會の設立。



マールティン・オービッツ

1. Martin Opitz.

教師ヨハン・リストの設立したるものなり。

此時代の詩人は、多く外國文學を模倣し、希臘、羅甸を始め、佛、伊、和等の文學は、獨逸詩人の好模範となれり。依つて、此時代を文學史上模倣時代と稱す。而して此時代には、シレシア洲より夥多の詩人出てしかば、吾人は「シレシア詩社」の名を以て、當時の詩人を呼ばんとす。されど此詩社中にはザクセン、ハムブルグ、ケーニヒスベルグ等の詩人もあり。詩人の多數がシレシア人なる故に、かくは名づけたるなり。而して詩社に二あり、第一詩社、第二詩社の別茲に於て起る。

第二章 第一シレシア詩社 (1) マールティン・オービッツ

及び其一派

シレシア詩社の長にして、當時の詩傑と稱す可きは、マールティン・オービッツなり。オービッツは、千五百九十七年十二月廿三日を以て、ブントラウに生まる。長じてブントラウ、プレスラウ及びポイテン諸市の大學豫備門に入る。ポイテンにある頃は、二十歳の血氣盛なる青年なりしが「獨逸語



マールティン・オーピッツ

1. Martin Opitz.

教師ヨハン・リストの設立したるものなり。

此時代の詩人は、多く外國文學を模倣し、希臘、羅句を始め、佛、伊、和等の文學は、獨逸詩人の好摸範となれり。依つて、此時代を文學史上模倣時代と稱す。而して此時代には、シレシア洲より夥多の詩人出てしかば、吾人は「シレシア詩社」の名を以て、當時の詩人を呼ばんとす。されど此詩社中には、ザクセン、ハムブルグ、ケーニッヒスベルグ等の詩人もあり。詩人の多數がシレシア人なる故に、かくは名づけたるなり。而して詩社に二あり、第一詩社、第二詩社の別茲に於て起る。

第二章 第一シレシア詩社 (1) マルティン・オーピッツ
及び其一派

シレシア詩社の長にして、當時の詩傑と稱す可きは、マルティン・オーピッツなり。オーピッツは、千五百九十七年十二月廿三日を以て、ブントラツに生まる。長じてブントラツ、プレスラツ及びポイテン諸市の大學豫備門に入る。ポイテンにある頃は、二十歳の血氣盛なる青年なりしが、獨逸語

die Parabel d. d. Spruch

4. Aristarchus.

蔑視に就いて』(イ)アリスタルヒュス一名フェルアハツング、デル、ドイツチ
エン、シネララーへ」と云ふ論文を書けり。此二篇の論文は、當時の人が獨逸
語を蔑視するの非なるを論じたるものにして、愛國の真情を以て充さ
る。而して獨逸語を純粹に保存すべし、されど獨逸詩歌の發達は、文藝復
興の精神を有する外國文學の研鑽にあることを論述したり。フランク
フルト大學にあること數年、間もなく去つて、ハイデルベルグ大學に赴
き、法律及び詩學の研究を續けたり。千六百二十年には、三十年戦争の騷
亂を避けて和蘭に赴きしが、碩學ダニエル、ハインジウスに會し、其高教
を受けたり。和蘭を去り、友人と共に、イェーランドに行けり。此時の作
にて著名なる『戦争の不快を慰むる歌』(ツロストゲディヒト、イン、ホーゲ
ルエルティヒカイテン、デス、クリーゲス)は、十三年間秘して世に示さ
りき。千六百二十二年、ベートルン、ガポール侯に召されて、侯がワイセベ
ルグに新設したる大學豫備門の教師となれり。此校在職中、『心の安樂』
(ラオン、デル、ルーヘーデス、ゲミューツ)を書けり。オービッツは、懷郷の念禁じ難

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
オービッツよりクロツプシュツク迄。(千六百廿四年より千七百四十八
年迄) 第二章 第一シレンシア詩社、マルティン、オービッツ及其一派。

Gelegenheitsgedicht

く千六百三十二年故郷に歸る。千六百二十六年舊教徒なるハンニバル
フォン、ドーナ伯の國政に參與せり、伯の命を受けて巴里に使せし後、千
六百廿八年皇帝フェルディナント二世より貴族に列せられ、ボーベルフェル
ド男爵の位を授けられたり。ドーナ伯の死後オービッツは新教の侯爵に
仕へたり。かくして後もオービッツは屢君主を變へたり、遂に波蘭に行き、
ラヂスラウス王に用ゐられ、宮中の御歌所の歌人となり、千六百三十九
年八月廿日不幸黒死病に罹りて死せり。

オービッツは詩人として創作的の天才は有せざりしも、極めて多方面
なりき。オービッツは詩に就いて一種の見解を有したり、其説によれば、詩
は人を樂ましむるのみならず、教ふべきものなりとされば、富貴なる想
像、深長の情緒よりは、明亮なる理性、嚴正なる法則に重きを置きたり。其
作りし歌は、宗教的及び世間的歌謠、ゲレーゲンハイトゲデヒテ、ゲレー
ゲンハイトゲデヒテとは、折に觸れたる歌にて、祭禮、婚姻、洗禮、及び誕生
の時等歌ふものなり、教訓的敘述的の歌等夥多あり、其他ジーベンビュル

ゲンの風俗を歌ひたる「ツラトハ」及び「エスビウス」山の噴火の様を歌へ
る「エスビウス」あり、作歌中最も名高きは、前に挙げたる「イートランド」に
て作りし「戦争の不快を慰むる歌」なり。

オービッツは、劇詩を書けり、されど創作に非ずして翻譯なり、セチカの
作「トロイの婦女」ツフオクレスの作「アンティゴネ」の譯は就中名高し。

オービッツは伊太利の歌劇なる「ダフネ」及び「ユディット」二曲を譯せり、
これ獨逸に於ける歌劇(オペラ)の始なり、マルティン、シュッツは、歌劇作曲家
の元祖と稱せらる。

かくオービッツは、單に形式的摸倣的の才を有し、創作の才を欠きたる
は、大なる短所なりと雖も、獨逸文壇の爲めに盡したる功は、決して尠少
にあらざるなり。第一、三十年戦争の殺伐なる時代に於て、獨逸語及び獨
逸文學の命脈を維持したること、第二、衰頹の極に達したる獨逸詩歌を
復興したること、第三「獨逸詩歌學書」(「ビュツヒライン、フォン、デル、ドイッ
チエン、ポエチライ」)を著はして、獨逸詩歌の歴史に一革新を爲したること

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教文學より現代迄)
オービッツよりクロツプフシ、トックク迄(千六百廿四年より千七百四十八
年迄) 第二章 第一シレシア時社、マルティン、オービッツ及其一派。 一八五

と等は、其功實に多とすべきものあり。

オービッツは、詩歌學書に述べて曰く、獨逸語は綴に長短の區別をなす能はず、然れども綴を音の高低又は強弱により區別することを得るなりと、而して十五、十六世紀以來慣用したる綴の長短を數ふるの法を廢して、今日の如き句脚を新に作り出したり、オービッツは、句脚をツロクウス『高低』^(-U)及びバムプス『低高』^(U-)の二種とせしが、彼の友人アウグスト、ブーフナーは、之にダクテイルス『高低低』^(-W)及びアナベスト『低低高』^(W-)の二種を加へたり、オービッツ以前の詩歌は、對韻(ライムパール)に限れり、然るにオービッツは、對韻の句を排し、佛蘭西詩に倣いて『六脚低高句』アレキサンドリイテル⁽⁻⁾を作れり、爾來劇詩には、専ら此句を用ゐるに至りしが、レンジグ⁽⁻⁾出て『五脚低高句』を主張するに及んで、漸く廢たれたり。されど近世に至り、リツケルト及びフライリグラー⁽⁻⁾トは、勇者譚詩に『アレキサンドリイテル』を用ゐたり、六脚低高句を『アレキサンドリイテル』と名づくるは、十二世紀頃の佛蘭西詩にて、アレキサンデル大帝を歌ひし時、

2. Paul Fleming.

始めて此詩句を用ゐたるを以てなり。

オービッツに次いで有名なるは、(2) バウル、フレミングなり。バウルは、千六百九年十月五日ザクセン國のハルテンシュタインに生まる。されば生まれより云へば、ザクセン人なれど、オービッツ派に入りて、薰陶を受けし故、自らシレシア詩社の一員を以て任じたり。始めミットワイダの小學校に入りしが、後ライプチヒ小學校に轉じたり。ライプチヒに在る頃醫學を修めたりしが、此頃より天稟の詩才は折にふれて發したり。三十年戰爭にて國內紛亂し、フレミングの故國ザクセンも、修羅の巷となりしかば、前途の望空しからんことを憂ひて、大に悲歎せり。屢機を窺ひて難を他國に避けんとせしが、恰も好しシュレスホヒホルスタイン侯フリートリヒが、使節を露西亞及び波斯に送ると聞き、フレミングは、使節の隨行員となり、先づ露都モスカウに至り、後波斯の都イスパハンに旅行せり。此二回の旅行は千六百三十三年より三十九年迄六ヶ年間を要せしが、フレミングは、大に身體の健康を害したり。歸國の後醫學博士の學位を

第四編 新南獨逸語時代の文學(宗教改革より現代迄)
 ナービッツよりクローツフシニトツク迄(千六百廿四年より千七百四十八年迄)。第三章 第一シレシア詩社。マルクティン、オービッツ及其一派。

得、醫術を開業せんとして、レアールに赴く途中ハムムルグ市に於て、千六百四十年四月二日不歸の客となる。時に、年僅かに三十。

フレミングの歌は、其死後に集められたるが、一たび歌集を繙かば、純潔にして高尚、然かも温情充ちたる彼の爲人を想望するを得ん。フレミングは、人生の快樂を歌ふと雖も、其中自から悲哀の調あるは、其蚤世す可きを自然に自覺せしものならん。彼は熱血男子なり、故國に止まつては、本國の紛亂を見て黙する能はず、去つて他國にあるも、故國を慕ふの念禁ずる能はざりき。依つて其歌ふ所は、心中に蟠れる熱情の發現なり。フレミングは世態人情を歌ひ、又宗教歌をも作りたり。宗教歌にては、フレミングが世界巡禮の高き理想を述べたる「イン、アルレン、マイテ、ン、ダーテン」あり。此歌は、耶穌教徒の巡禮歌となり、普通世にある獨逸歌集には、大抵載せらる。

フレミングは、オービッツに倣ひて、伊太利より傳はりし詩形ソネットを愛用したり。近世の詩人は、ソネットには五脚低高句を用ゐれど、フレミングは當時シレシア詩社の風に從ひ、六脚低高句を用ゐたり。

ソネットにて最も著名なるは、「我に與ふ」墓銘の歌「及び」オービッツの死を悲める歌」等なり。フレミングは、又時好に投じて、ゲレーゲンハイトゲディヒテを作りしが、真情を述ぶることは、オービッツの歌よりも、深かく長し。

3. Friedrich von Logau,
A. Auswahl deutscher Gedichte.

(3) フリードリッヒ、フォン、ローガウは、千六百四年リグニッツに生まれ、千六百五十五年に死す。ローガウは、當時第一流の諷詩作家にして、後世に於てもよく及ぶもの無しと云ふ、爛々たる眼光を以て社會を洞察し、而して直ちに諷詩に於て之を嘲罵せり。其作りし諷詩の數は、四千餘句の多きに達せり。歌集には實名を配さず、匿名ザロモ、フォン、ゴラウを用ゐしかば、當時其名世に知られざりき。レッシング、ラムレル等出て、ローガウの諷詩を研究せし後、其名世に高くなりき。ローガウの作にて著名なるものは、クルーケの「獨逸詩歌拔華」(六)「アウスワール、ドイッチェル、ゲディヒテ」中に錄せらる。

第四編 新南獨逸語時代の文學(宗教改革より現代迄)
オービッツよりクロッツシュエトック迄(千六百廿四年より千七百四十八年迄) 第二章 第一シレシア詩社、マルクティン、オービッツ及其一派。 一八九

4. Robert Robertlin.
5. Heinrich Albert.
6. Simon Dach.

さて又ケーニヒスベルグに、オービッツの感化を受けたる詩人の一派起れり。此詩社の人は、詩歌と共に音楽の練習をなしたり。詩社の長は(4)ローベルト、ロベルティンなり。千六百四十八年プロイセンの宮廷裁判所の書記官長たりし時ケーニヒスベルグに於て死したり。此詩社にて著名なるは(5)ハインリヒ、アルベルト及び(6)シモン、ダハなり。アルベルトは、千六百四年ローベンシュタインに生まれ、千六百五十年ケーニヒスベルグに死せり。當時最も世人に愛せられたる作曲家なり。アルベルトの歌にて名高きは、「天と地との神」なり。アルベルトの家は、詩人の集會所となり、詩客小堂に會して閑遊をなし以て樂となせり。シモン、ダハは、詩社中の秀才なりしが、千六百五十九年ケーニヒスベルグ大學にて、詩學の教授たりし時死せり。熱血と真情とを以て充ちたる彼の詩は、又聲調優美、語辭圓滑なりき。其著名なるは、「友情の歌」なり。當時の宗教歌にても、オービッツの餘薫を受け、純潔の語辭、平滑の詩形を用ひ、且つ理智を重んじ、教訓を主としたり。オービッツの一派は、斯く理

7. Friedrich von Spee.
8. Johann Scheffler.

9. Paul Gerhardt.

智教訓を尊びたりしも、パウ、フレミング及びハインリヒ、アルベルト等の宗教歌中には、真情の流露を以て勝りたるものあり。左記詩人の如きは、亦此方面に向て、詩才を發揮せるものなり。(7)フリードリヒ、フォン、シペーは、千五百九十二年に生まれ、ゼンフト教徒なり。性來慈悲深き人にして、苦難に陥れる人を見る時は、其信仰の如何に係はらず、之を救助せんことを努めたり。千六百三十五年熱病に罹りて死す。歌集「ツルツ、ナハティガル」中には、宗教歌及び牧歌あり。主として耶蘇を敬愛するの情を歌へり。

(8) ヨハン、シュツフレル。父母は新教徒なりしも、ヨハンは舊教徒となれり。歌集二あり、「聖き心の樂」「ハイリー、グゼーレンルースト」及び「デル、ヘルビニ、シエー、ワンデルスマン」之なり。前者は耶蘇に對する敬愛の情を述べ、後者は神秘的の思想を傳ふるものなり。

此時代にはルテルに次いで、最も名高き教會歌の作者出でたり。
(9) パウル、ゲルハルト(自ら稱して、パウ、ルース、ゲルハルトと云へり)

は、千六百六年三月十二日、カッテンベルグのグレートフェンハイニヒン市に生まる。父は市長なり。ゲルハルトは、クリンマの高等學校に入りて、勉強し、後カッテンベルグ大學に入れり。三十年戦争の擾亂ありし爲め、ゲルハルトは、四十五歳にして家をなす能はず。伯林に在りて、或家の家庭教師となれり。千六百五十一年、ミッテンワルデに於て牧師となり。千六百五十七年には、伯林のニコライ寺院に召されて、副牧師となる。此時かの有名なる大選帝侯は、新教徒の争を防遏せんとして、新教の牧師に命じて、其教を説くことを止めしめ、且つ其命に服したる證文を出せと要求したり。されどゲルハルトは、教理の自由を拘束さるゝことを好まずして、其命に従はざりしかば、千六百六十六年、牧師の職を免ぜらる。伯林市長及びゲルハルトの徳望を慕ひし信徒は、切に其留任を選帝侯に歎願せしかば、選帝侯も其熱誠に感じて、ゲルハルトを復職せしむ。選帝侯はゲルハルトが證文を出さずとも、其命には服したりと思ひしに、豈圖らん。彼は依然として自説を固守し、權威の爲めに屈服するは、良心に恥づ

る所とて、侯の命に従ふを敢てせざりき。侯はゲルハルトが、頑として動かす可からざるを知り、轉職せしめんとせしが、都合よく一年を経て、メルゼブルグ侯領内のリッペンにて牧師を要せしかば、ゲルハルトは伯林を去れり。かくゲルハルトは、ルテルを尊崇し、新教の教理を固守し、自説を枉ぐるを肯ぜざる人なりき。其作りし宗教歌百三十一あり。何れも堅固なる信念と、高貴なる喜悅とを歌ひ、真率愛すべき俗語の聲調を得たれば、一般民衆の共有物となれり。ゲルハルトの後に、出てし人にて、ヨハン、フランク、ホルヘルム二世、ワイマール侯、其他ヨハン、ヘールマン、マルティン、リンカルト、クリステア、ン、カイマン、ヨハン、リスト、ルイーゼ、ヘンリエツテ、ミヒアエル、シルメル、ヨアヒム、キア、ンデル、ゲオルグ、ノイマルク、サムエル、ロディガスト、ゲルハルト、テルステーゲ等あり。

第三章 第二シレシア詩社

第一シレシア詩社衰へて、第二シレシア詩社起る。第一詩社は、獨逸語が、佛蘭西語の爲めに壓倒されんとするを見て、佛蘭西語を排斥して、獨

第四編

新南獨逸時時代の文學(宗教改革より現代迄)
オーピッツよりクロツツシュトック迄(千六百二十四年より
千七百四十八年迄) 第三章 第二シレシア詩社

逸話の興隆を計りたる人によつて設立されしものにして、此社の詩人は、獨逸語の純粹を保存せんことを努めたり。第一詩社が、語辭の純粹を保存するの一方に偏したるを見、語辭を修養するの必要を感じて起りたるもの、これ第二詩社なりとす。然るに其弊は、詩體浮華纖巧に流れ、加ふるに詩人は、當時宮廷裏の淫猥の風を歌ひて、時好に投せんとせしかば、詩歌の審美的及び道德的の價値大に減じたり。第二詩社詩人も、第一詩社詩人と全しく、詩歌を一の技藝となし、教育あるものゝ心得べき事と考へたり。

此派の詩人にて先づ指を屈す可きは、(1) アンドレアス・グリフィウスなり。グリフィウスは、千六百十六年シレシア州のグロイガウに生まれ、千六百六十四年に死す。グリフィウスは、第一詩社と第二詩社との過渡時代に出でたり。されば抒情詩はオーピッツの流を慕ひ、劇詩はホフマンズワルダウ及びローヘンシュタインの風を學べり。グリフィウスの歌は、孰も沈痛の調を帯べるが、これ其生涯不運なりしを以てなり。グリフィウスの詩

1. Andreas Gryphius.

は、テイトマンの著「十七世紀獨逸詩人中」に詳述さる。

グリフィウスは、抒情詩人としてよりも、劇詩家として長じたり。劇詩の父なりとの評語は、よし當らずとも、劇詩界に於ける彼の功は、偉大なるものなり。此頃は王侯貴人が、悲壯激越の語調を以て語り、又は悽慘なる運命に遭遇する劇を悲劇と名づけたり。さればグリフィウスの悲劇にも、往々にして、對話の不自然、鋪張誇大の弊に陥る所あり。然りと雖も、グリフィウスは、時の統一を嚴重に守り、決して二十四時間を越へざりき。グリフィウスの悲劇の特徴とも稱す可きは、各段が「コール」を以て終ることなり。希臘劇にては、男女、少年、少女が一組となり、輪列をなし、音樂に伴うて歌ひつゝ、舞蹈したり。時として歌はずして、舞蹈することもありき。此一組の人を稱して「コール」と云ふ。英の詩人ドライデンの評語を借らんに、希臘悲劇は、其初め一組の舞蹈者に外ならずと。これ「コール」の最初の意義なり。然るに又希臘劇にては、悲劇の一段終る毎に、之を見て感じたることを歌へり。此歌ふ人をも「コール」と云へり。これ「コール」の第二

第四編

新南獨逸語時代の文學(宗教改革より現代迄)
 オーピッツよりクローツバッハ迄(千六百二十四年より
 千七百四十八年迄) 第三章 第二シレシア詩社

1. Peter Squenz.
n. Horribilicribrifax.

義なり従つて歌ふ人のみならず、其歌をも「コール」と云ふに至れり、これ其第三義なり、グリフィウスは蓋し第三義に倣へり、グリフィウスは悲劇に於て、和蘭の詩人ヨアスト、ファン、デン、フォンデルを模範としたり、其作中名高きは「レオデル、アルメニエル」「バビニアース」「カール、スツアルト」「カタリナ、フォン、ゲオルゲン」及び「カルデニオ、ウント、ツェリンデ」の五曲なり、尙他に十五才の少年の時作りたる劇詩ありしも、今は傳はらず、詩形は「アレキサンドリ、テル」なり、グリフィウスの作は、後世詩人の作に比すれば、到らざる所ありと雖も、此時代に於ては、悲劇として大に賞す可き價值ありとす。

グリフィウスは悲劇よりも、喜劇に長じたり、(イ)「ペーテル、スクエンツ」及び(ロ)「ホリビリック、ブリファックス」三曲の如きは、甚だ有名なり、「ペーテル、スクエンツ」は、其材料十六世紀頃英國より渡來せし俳優により傳はりしものにて、シェイクスピアの「夏の夜の夢」に髣髴たるものなり、「ホリビリック、ブリファックス」は、其題號の奇異なるが如く、三十年戦

2. Christian Hofmann von Hofmannswaldau.
3. Daniel Casper von Lohenstein.

争時代に諸市を徘徊して、尊大を装ふたる奇異の人物を嘲弄したるものなり、喜劇として、最後に擧ぐ可きは、「ディ、グリー、ブテ、ドルン、ローゼ」なり、此詩はシレシア農民の方言を以て書けり、文章語を用ゐずして、農民の俗語を用ゐたれども、文藝上の作品としては大に見る可きものなり、クラップは千八百五十一年、劇詩家アンドレアス、グリフィウスの一書を著せり。

(2) クリステリアン、ホフマン、フォン、ホフマンズワルダウは、千六百十八年ブレスラウに生まれ、千六百七十九年に死す、嘗て一侯爵に従うて、伊太利、佛蘭西に赴き、又ブレスラウ市の市會議員として、皇宮に出入せしことありしかば、其間に宮廷の亂れたる風儀を見習ひ、惡風の感化を受け、華美の風姿をなし、以て婦人に媚びんとせり、多年感染したる淫靡の氣風は、其歌にも現はれたり。

(3) ダニエル、カスベル、フォン、ローヘンシュタインは、千六百三十五年ブリーグ侯國に生れ、ブレスラウ市の議員たる時、千六百八十三年に死す。

第四編 新南蘭逸話時代の文學(宗教改革より現代迄)
ホリビリック、ブリファックス(千六百二十四年より千七百四十八年迄) 第三章 第二シレシア詩社

3. Johann von Besser.

フォン、カーニッツなり。ルードヴィヒは貴族にして教育ある人なり。伊太利文學よりは、佛蘭西文學を好み、就中ボアローの諷刺詩を模範としたり。
(3) ヨハン、フォン、ベッセルは、カーニッツの友人にして、千六百五十五年ク
ールランドのフラウエンブルグに生まれ、千七百二十九年ドレスデン
に死す。ベッセル在世中宮廷詩は、最も隆盛なりき。ベッセルは、伯林に在りて
は、大選帝侯及び普魯西亞の初王フリードリヒ一世に仕へ、ドレスデン
に至りて、アウグスト二世に仕へたり。されば宮中の儀式には、屢々列す
ることを得たり。

ベッセルの後継者としてドレスデンの王宮には、ウルリヒ、フォン、ケーニッ
ヒあり、又アンスバハの王子の師傳ベンヤミン、ノイキルヒ出てたり。ベ
ンヤミンは佛蘭西のカムブレイの大僧正フクロンの文筆を慕ひ、其作
『テレマク』を獨逸韻文に翻譯したり。

(4) クリステイアン、ギンテルは、千六百九十五年四月八日シレシアの
シュトリーガウに生まれ、千七百二十三年三月十五日イエーナに死す。學

4. Christian Günther.

生時代より遊蕩を好み、屢々父の呵責を受けしも行を改めず、爲めに父
子大に不和となれり。ギンテルは、ザクセン國の宮廷詩人たらんと欲せ
しも、素行修らざりしを以て其願を遂げざりき。家を出て、失望の中に日
を送り、諸所を彷徨せしが、此亂雜なる生活は、大に健康を害し、且つ蓄財
なかりしかば貧困に陥り、遂に蚤世したり。かくギンテルは、多年患難辛
苦に世を過せしと雖も、天賦の詩才は銷磨せざりき。作歌は二十餘あり、
皆抒情詩にして、徳義と情慾との衝突を歌へり。千七百十八年に作りし
ハッサロビツの平和を歌へる歌は、殊に名高し。ゲーテの言は簡にして、よ
くギンテルを評し盡くせり。曰はくギンテルは己を制すること能はず、
されば彼の生涯も、彼の詩作も銷磨せりと。

シレシア詩社に反抗したる他の一派ハムブルグに起れり。此派に屬
する詩人は、六十餘名の多きに達すと雖も、茲には傑出したる二詩人を
擧げん。

(5) クリステイアン、エルニッケは、丁抹國の議政官にして、又佛京巴里駐

5. Christian Wornicke.

第四編 新南獨逸語時代の文學(宗教改革より現代迄)
カーニッツよりクローツツェン迄(千六百二十四年より
千七百六十年迄) 第四章 シレシア詩社と對立せる一派。

割の辨理公使なりしが、千七百二十年在勤中に死す。青年の頃は、ロストツク及びキール大學の有名なる詩學教授碩學モルホーフの薫陶を受けたり。一たびシレシア詩社に入りしも、詩社の風意に充たずして去れり。詩社を退いて後は、ニールデルザクセンの二詩人ポステル及びフリーノルドと審美學上の論争を始めたり。此論争をなせし爲め、其名世に聞へ、其作滑稽詩「ハンス、ザックス」も大に有名となれり。此詩に於てエルニッケは、ハンス、ザックスを凡庸詩人の標本なりと云ひ、其後繼者として、ポステルありとて、大にポステルを嘲罵したり。フリーノルドは「デル、テリヒスタ、ブリッテ、マイステル」と云ふ詩を作り、友人ポステルの爲めに、エルニッケを反駁したり。エルニッケは又シレシア詩社のホフマン、スワルダウ及びロートヘンシュタインの思想趣味の庸劣なる事を駁撃したり。

(6) ハインリヒ、ブロッケスは、ハムブルグ市の市會議員となりし人なり。歌集を「神に於ける地上の樂」イルディツシエス、フェルグ、ニューゲン、イン、ゴットと名づく。熱心なる耶蘇教徒にして、英のチャームス、トムソンに私淑し、

トムソンが自然に對して情を述べたる「四季の歌」ゼー、シー、ゾンスを受讀して、之を獨逸語に翻譯したり。トムソンの四季の歌は、有名にして後ハルレル、クロープ、シュトック、クライスト等も之を模倣したり。

第五章 小説及び諷刺物語。

十七、十八世紀に於て小説夥多出でたり、之を種別する時は三種あり、勇者及び戀愛小説、夥多ある中に、其著名なるものは、言語學會の長として有名なるフリッパ、フォン、ツェーゼンの二作「デイ、アドリアティツシエ、ロザムンド」及び「デイ、アフリカニツシエ、ソフォニスベール」あり。又アンゼルム、フォン、チーグレル及びクリッパ、ハウゼンの作「アジアティツシエ、パニーゼー」は、當時愛讀されたる戀愛冒險談にして、亞細亞に於ける戦争の話をも記せり。此時代に於て非常に賞讃を受けしは、ローヘンシュタインの作なる「アルミニウス、ウント、ツスエルダ」なり。貴族の作にては、アントン、ウルリヒ、フォン、ブラウンシュワイヒ、ラルフェンビツテル侯の「アラメナ」及び「オクタビア」は有名なり。

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
 千七百四十八年迄) 第五卷 小説及び諷刺物語

1. Christoph von Grimmelshausen.
I Simplissimus.

冒険小説、これ三十年戦争時代の冒險的生活の状態を寫したるものなり。此種の小説が描き出す主眼となれるものは、幸運兒と不運兒との境遇なり。幸運兒は賤しき身分より起つて、順位と富貴とを得れども、不運兒は、門閥の家に生まれながら、失敗して遂に艱難流離の苦を受くるなり。此種の小説にて有名なるは(1) クリストーフ・ファン・ゲリンメルスハウゼンの(イ)『ジムブリチシムス』なり。此小説は六巻より成れり。三十年戦争の活劇、市民の離散、都市の荒廢等残りなく寫さる。此殺風景なる状態を寫すに、輕快の筆を以てし、時に滑稽を交へ、一讀大に壯快を覺ふ。

小説の仕組は、主人公が、自己の經歷を物語る體となれり。主人公とは、シムスサルト村の百姓の子なり、生れ落ちて我家を出てしことなく、全く世間知らずに育てられたり。さるに田園閑靜の天地は、忽ち戦争の叫聲によつて、其寂寥を破り、倉に貯へし穀物は掠奪され、祖父の代より傳はりし古き住家は、焼き棄てられたり。此恐ろしき慘状を目撃して、田舎

育ちの青年は、恐懼爲す所を知らず、辛くも難を避けて、深林に逃げ入れり。然るに山中一隱者あり、青年は此隱者に就いて教を受けたり。隱者は間もなく死せしかば、青年は再び廣き世間に出て來れり。而して幸にもハーナウの總督の許に身を寄せることを得しが、總督は此青年の朴直なる風姿を見て、ジムブリチシムス(朴直單純の意)の名を與へたり。一見狀貌愚なるが如くして、實は賢き此青年は、尋常の事にては、身を權門に委ぬる能はずと思ひ、表面愚者を裝いて、總督の命ずるが儘に馬鹿げたる藝を演じたり。

此青年の運は、轉一轉してクロアテン人に誘ひ去られ、王家の兵卒となれり。かく諸國を遍歴し、様々の運命に際會して後、ジムブリチシムスは、多くの富と、高き位とを得て、一時榮華の夢を見しが、忽ち財産を失ひ、又罪を得て囹圄の人となる。獄中にありても種々の經驗をなせり。茲に於てジムブリチシムスは、人間の運は、走馬燈の如く、循環究りなきものにして、瞬間の幸福を望み、虚名を貪る事の馬鹿らしきを悟り、再び深山

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
オーヒッツェンヨリクロツプシュトック迄(千六百二十四年より
千七百四十八年迄) 第五章 小説及び諷刺物語

に退隱し、晩年を精神修養に送りたり。これ小説の梗概なり。
 此小説は、武士的抒情詩の四大家として有名なるヲルフラム、フォン、
 エッセンバハの作「バルチファル」と相似たり。二作共に精神と世間、信仰と生
 活との衝突を叙するものなり。兩主人公を比するに、バルチファルは冒險
 を好むと雖も、氣風高尚なり。ジムブリチシムスは余りに正直にして、粗
 野の性を帯ぶるが如し。

又他に有名なる冒險小説の一種あり、所謂ロビンソン物語(ロ) (ロビ
 ソンナードン)なり。ロビンソン物語は英の文豪ダニエル・デフォーの著を
 以て始めとなす。デフォーが此小説を書きしは、千七百十九年にして、其名
 は今日世界一般に知られたる如く、「ロビンソンクルーソー」と題したり。
 其翌年には既に獨逸に翻譯されたり。此冒險談一たび世に出づるや、デ
 フォーの名と共に英國讀書界の呼物となり、非常の好評を博したり。其賣
 高の多き事は、出版者テイラーが、發刊後日ならずして、千磅を得たるに
 よりて、容易に知ることを得るなり。此小説は英本國のみならず、欧州大

陸にても、名聲噴々たりしかば、模倣作者續出するに至れり。獨逸國內の
 みにても、千七百二十年最初の翻譯出て、より、全六十年迄に四十種の
 ロビンソン物語出てたり。其後にも尙三十種ありき。其他欧州各國各市
 には、各一のロビンソン物語あるに至れり。殊にかのルソーは、教育小説
 「エミール」に於て、ロビンソン物語が、教育上價值あることを説けり。

獨逸にてヨアヒム、ハインリヒ、カムペーのロビンソン物語は、千七百
 七十九年に初版を出し、今年迄に百二十二版を重ねたり。十八世紀の冒
 險思想を述べたる漂流談が、二十世紀の今日尙愛讀さるゝを以て見れ
 ば、ロビンソン物語が當時最も讀書界の注目を惹きしこと疑を容れざ
 るなり。此物語を教訓的よりは、寧ろ詩的のものとして書きたるは、十九
 世紀に於てラウクハルド及びクレイプテル二人なり。此時代には物語
 の名を變へてデフォーの作を模倣したる書夥多出てたり。中にも物語の
 記事壯快にして名高きは、(2) ヨハン、ゴットフリート、シュナイベルの著
 「デイインゼル、フェルゼンブルグ」なり。此物語の主人公は、アルベルト、ユリ

ウスと云ふサクセン生れの少年なり。ルード非ヒ、テイクは千八百二十年之に叙論を付して再び出版したり。

冒險小説愛讀されし時に當り、諷刺物語も流行したり。諷刺物語作者にて最も著名なるは、高僧(3) モシエロッシュなり。物語には本名を記さずして、フィランデル、フォン、ジッテワルドと記せり。モシエロッシュは、三十年戦争の擾亂に際して、多くの辛酸を嘗め、當時の社會が腐敗墮落して、徳義地を掃ふの有様となれるを見て、『フィランデル、フォン、ジッテワルドの珍妙實譚』(ウンデルリッハー、ウント、ワールハフテ、ゲシヒテ、フィランデルス、フォン、ジッテワルド)と云ふ諷刺物語を書けり。此物語は夢の躰となり、よく都市の荒廢、住民の離散等の状態を寫せり。佛蘭西、伊太利、西班牙等の外國語及び諺を引用し、羅句の詩句を交へたるは、此物語の特色なり。

モシエロッシュに次いで有名なるは、ヨハン、ラウレムベルグ、ヨアヒム、ラーヘル、バルタザール、ジッピウス、クリステ、アン、ロイテル及びアブラハム、ア、サンタ、クララ等なり。

第六章 萊府學派と瑞西學派との論争。

萊府學派と瑞西學派との論争は、遂に瑞西學派の勝利に歸し、瑞西學派は萊府學派が推奨したる佛蘭西文學を排斥して、英文學の研鑽を始むるに至れり。萊府學派の首領は、ゴットシェッドにして、瑞西學派の牛耳を執りしは、ポードメルなり。依つて此論争をゴットシェッド對ポードメルの争とも云ふ。此論争ありて後、英文學研究益盛となり、クロップシュトック、ハイランド等の文豪は、大にミルトンを崇拜し、レッシング出づるに及んで、劇詩人としては、シェイクスピアを賞賛し、盛にホルテールを非難したり。ゲーテ、シルレル等も亦英の劇詩を模範とし、法則に拘泥せる佛劇を學ばざりき。勢斯の如くして、佛文學は獨逸文壇より放逐され、英文學之に代つて獨逸文運の指導者となれり。獨逸文學に於ける此新傾向は、其端をゴットシェッド對ポードメルの争に發したりと云ふ可し。

(1) ヨハン、クリストフ、ゴッ シェッドは、千七百年二月二日ケーニヒスベルグのユディッテンに生る。府大學の詩學及び哲學の教授として、學

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
モヒツツよりクロップシュトック迄(千六百二十四年より千七百四十八年迄) 第六章 萊府學派と瑞西學派との論争。

殖深く、一代の碩學として尊崇を受けしが、千七百六十六年十二月十二日に没せり。ゴットシェットは冷醒なる智性の人にして、當代文藝批判の主權者を以て自ら任じたりしが、千七百廿九年『文學評論雜誌』(『アイ、フェルニエン、フテイゲン、タードレリンヤン』)を發刊し、當時の文學を批評したり。ゴットシェットの詩文學に關する主義見解は、千七百三十年に初版を出したる『詩學評論』(『フェルズーヘー、アイナル、クリーティ、シエン、デヒトクンスト、フィユール、デイ、ドイッチェン』)に於て、系統的組織を得たり。其論述せる趣意を考ふるに、詩歌は人を教訓するを以て目的とせざる可からず、依つて詩歌に欠く可からざる要件は、詩形の規則正しきこと、及び思想の明亮なることなりと云ふにあり。ゴットシェットは此見解を以て、文學批評の標準となし、當時の詩文を批判し、作品の優劣を定めたり。當時にあつて、ゴットシェットは、大學教授として名望甚だ高かりしかば、世人はゴットシェットの批評を、文藝作品の試金石となし、文士も亦ゴットシェットに賞揚されんことに汲々たりき。かくして久しき間ゴットシェットは、尊重畏敬を受けたる批評家

なりき。

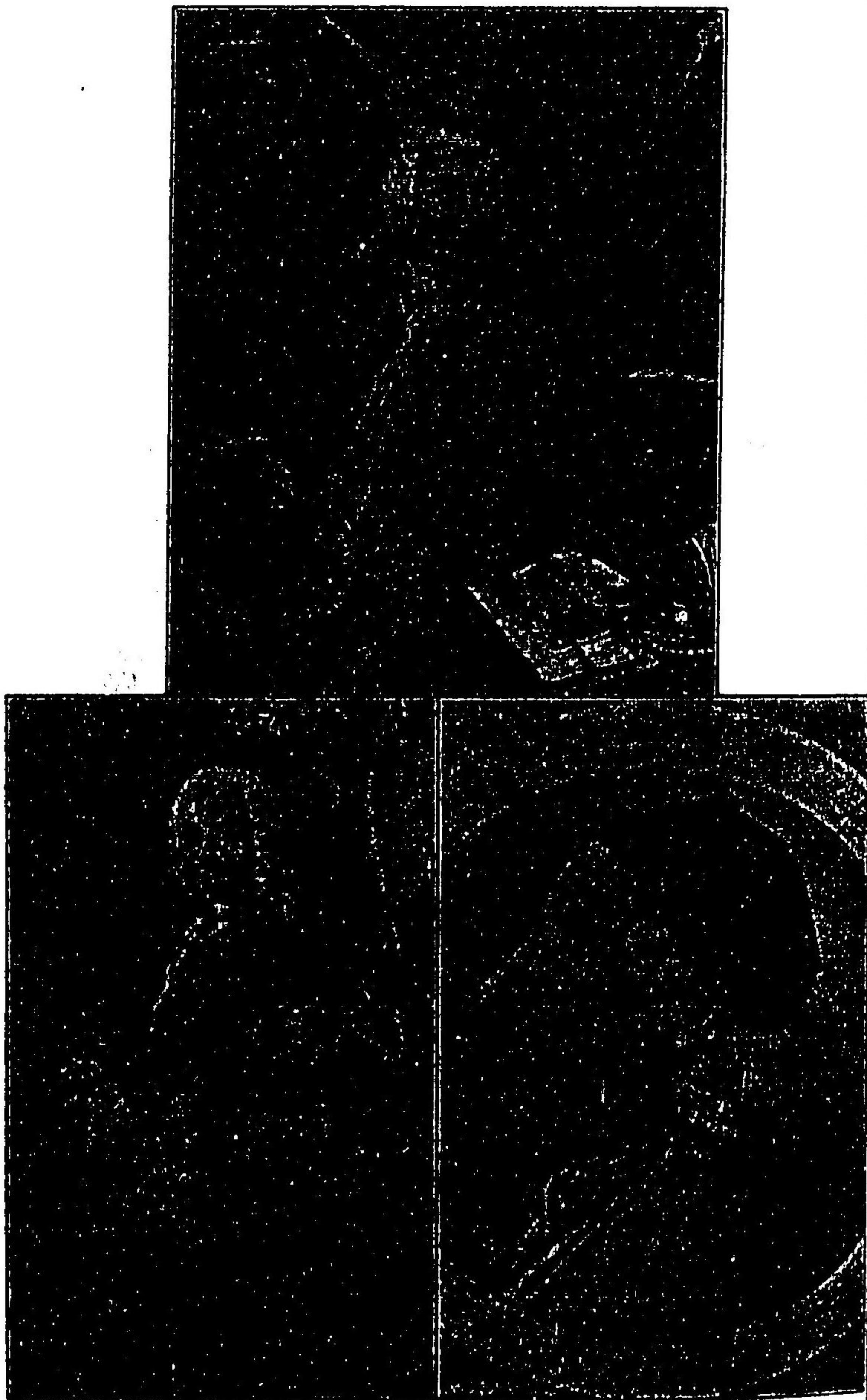
ゴットシェットの學風を慕うて、其門下に來集する者甚だ多く、ツリルレルの如き、シユワーベ及びシユーナイヒの如きは、門下中錚々たる文士なりき。シユワーベはゴットシェットの監督の下に、週刊雜誌(『ベルステイゲンゲン、デス、フェルシクタンデス、ウンド、ホッツェス』)を發刊したり、これ萊府學派の機關雜誌なり。

ゴットシェットは先づ演劇の改良を企て、萊府に於て、女優カローリーテ、ノイベルの卒むたる一座の役者と結托して、漸次劇界の刷新をなし、舞臺の上に自己の意見を勵行せんとしたり。ゴットシェットは改良の第一著手として、在來の蕪雜醜惡なる演劇を舞臺より追ひ除け、特に野卑なる『道化狂言』(『イ、ハンスウルストボツセン』)を斥け、金光物とも稱すべきロ(ハウプト、ウント、シユターツアクチオーヤン)と云へる悲劇を無趣味なりとし、且つ歌劇をも排斥し、之に代ふるに、詩形正しき劇詩を以てせんとせり。

1. Hanswurstpossen.
2. Haupt-und Staatsaktionen.

ゴットシェツドが演劇改良を目的とし、従來の劇を廢して、新演劇を興さんとしたるは、佛蘭西劇の優美なるを見て、之に模倣せんとしたるなり。當時佛蘭西劇にて悲劇は、コルネイユの作『ホラース』、『シンナ』、『ラシンの作』、『アンドロマーク』、『アタリア』、『ポルテールの作』、『ブルツス』、『ザイール』等、又喜劇としては、モリエールの作『ラバール』、『ミサンツロップ』、『レニアーの作』、『ジュール』等は、ゴットシェツドが最も歎賞したるものなり。

ゴットシェツドは、夫人ルイーズと共に、佛劇を翻譯せしが、又佛悲劇を模範として、『臨終のカートリ』(六)、『ステルペンデル、カートリ』の一曲を作れり、而して此自作劇詩を巻頭に掲げて、『古代希臘羅馬の法則によれる獨逸劇』、『ドイツツェー、シュウピート、ナハ、デン、レ、ゲル、ン、デル、アル、ラン、グ、リ、ヒ、ン、ウ、ン、ト、レ、メ、ル、ア、イ、ン、グ、リ、ヒ、テ、ト』と題する劇詩集を編纂したり。ゴットシェツドは又千四百五十年より千七百六十年迄に出でたる著名なる獨逸劇の表を作れり、之を名づけて、『獨逸詩史料』、『キ、ー、テ、イ、ゲ、ル、フ、ォ、ル、ラ、ー、ト、ツ、ー、ル、ゲ、シ、ヒ、テ、ー、デ、ル、ド、イ、ツ、ェ、ン、デ、イ、ヒ、ト、ク、ン、ス、ト』と云へり。此書は獨逸劇



ドツェレトツゴ
ルメドーガ
ルゲンイテイワフ

ゴットシェツドが演劇改良を目的とし、従來の劇を廢して、新演劇を興さんとしたるは、佛蘭西劇の優美なるを見て、之に模倣せんとしたるなり。當時佛蘭西劇にて悲劇は、コルネイユの作『ホラース』、『シンナ』、『ラシーンの作』、『アンドロマーク』、『アタリア』、『ホルテールの作』、『ブルツス』、『ザイール』等、又喜劇としては、モリエールの作『ラバール』、『ミサンツロフ』、『レニアールの作』、『ジュール』等は、ゴットシェツドが最も歎賞したるものなり。

ゴットシェツドは、夫人ルイーゼと共に、佛劇を翻譯せしが、又佛悲劇を模範として、『臨終のカーター』(ハステルペンデル、カーター)の一曲を作れり、而して此自作劇詩を巻頭に掲げて、『古代希臘羅馬の法則によれる獨逸劇』、『ドイツツェー、シャウビューチ、ナハ、デン、レーゲルン、デル、アルテン、グリーヒエン、ウン、ト、レーメル、アインゲリヒテット』と題する劇詩集を編纂したり。ゴットシェツドは又千四百五十年より千七百六十年迄に出でたる著名なる獨逸劇の表を作れり、之を名づけて、『獨逸詩史料』、『チーティゲル、フアルラート、ツール、グシヒテ、デル、ドイツツェン、ディヒトクンスト』と云へり。此書は獨逸劇



ドツェストツゴ

ルメドーロ

ルゲンイテイラフ

2. Johann Jakob Bodmer.
3. Johann Jakob Breitinger.

二. Vernünftige Redekunst.
*. Deutsche Sprachkunst.

史研究者には最も有用なるものなり。

ゴットシェットは熱心に獨逸劇の改良を圖り、劇詩にて淫猥なるものは余りに無意味なるものを除き、晦澁の辭、誇大の言を用ゐることをやめ、用語の簡單明亮を貴び、正字學の鞏固及び言語の正確を主張し、それが爲めに『修辭學』(ニ) (フェルニフティゲ、レーデクンスト) 及び『獨逸言語術』(ホ) (ドイッツェー、シユプラハクンスト) の二書を著せり。此等はゴットシェットが獨逸文壇の爲めに盡したる功として大なるものなれども、余りに理性を貴び、感情を卑み、明亮を主とし、想像を斥けしかば、劇詩は形式を偏重し、内容は明亮に過ぎて無味乾燥となれり。茲に於てゴットシェット反抗の聲は、奇峯雲を吐き、深潭水を湛へたる瑞西の山中に反響せり。論戰はポードメル、プライティンゲルの二人によつて開かれぬ。

(2) ヨハン、ヤーコプ、ポードメルは、千六百九十八年瑞西國チューリヒ附近のグライフゼーに生まる。千七百二十五年以來チューリヒ大學の歴史教授たりしが、千七百八十三年に死す。

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
オーストリアよりクロイツツク迄(千六百二十四年より
千七百四十八年迄) 第六章 萊茵學派と瑞西學派との論争

(B) ヨハン、ヤーコブ、プライティンゲルは、千七百一年同國チューリヒに生る、千七百三十一年此地の大學豫備門の教授となり、千七百七十六年に死せり。

ポードメル、プライティンゲル兩人は、英のリチャード、スティーブルがアディンゲンと謀つて發刊したる評論雜誌「スペクテーター」、「ガーディアン」に倣ひて、千七百二十一年より二十三年迄の間に、一の週刊雜誌「繪畫評論」(C) (ディスクルゼ、デル、マールレン)を出せり。蓋しポードメル等は、詩歌と繪畫とはもと全一物にして、其様を異にするものとし、繪畫は無聲の詩歌にして、詩歌は有聲の繪畫なりと考へたるなり。

瑞西學派の詩歌についての所見は、ゴットシツドと全然相反し、詩歌は想像感情を主として、理性を後にし、詩形よりは内容に重きを置きたり。されば「ザイエル」、「シンナ」の作者等を顧みずして、「失樂園」の詩人を尊重したり。萊府、瑞西兩學派が文學上の意見を相全ふせざるは、各其摸範を異にするによりても、明かに知る事を得るなり。ゴットシツドが週刊雜誌「文學

評論雜誌」を發刊したる時頃より、兩派の所見は、漸次相反するの傾向を呈せしも、未だ一たびも、互に論難を試みず、靜かに其鋒鏘を收めて、各自其研究を進めたり。されど根本的反對の學派が、長く沈黙の裡に終る理あらんや。時は千七百三十二年ポードメルは、平素尊崇せるミルトンの傑作「失樂園」を翻譯して世に公にしたり。然るにゴットシツドは、自家獨特の意見を以て、此翻譯を批評したり。此批評は端なくも、兩學派争論の導火線となれり。論争は忽ち激甚となり、プライティンゲルはゴットシツドの「詩學評論」が、千七百三十七年に第二版を出だせしかば、千七百四十年に、瑞西學派の所説を代表して、「詩學論評」(D) (クリティツシエー、ディヒトクンスト)を著はし。ポードメルは、ミルトン崇拜主義を標榜せる評論「詩歌に於ける不可思議想到に就いて」(E) (フオム、ウンデル、バーレン、イン、デル、ボエジ)を著はしたり。

ゴットシツドは明瞭なる頭腦を有し、事物の理を判断し、明晰なる推論をなすに長じたれども、想像力に乏しく、又感情を無視したる人なり。依

つてミルトンの『失樂園』の如き、深遠崇高の宗教思想を歌へる時は、明苑を欠ぐものとして、極力之を罵詈したるなり。

十八世紀文豪の一人として、有名なるクロップシュトックは、崇拜家によつて、天の福音を傳ふる天使として尊まると雖も、ゴットシェツドは、クロップシュトックを猿猴の如しと嘲けり、又其名を呼んでクロップフシュトックと云へり。蓋しクロップフとは「打」の意にして、シュトックとは「杖」の意なり、依つてクロップシュトックと云ふ可きを、嘲弄の意にてクロップフシュトック「打杖」と呼びたるなり。

文學上に於ける兩派の争は、益甚しく、熱罵冷嘲を交へて、互に論難攻撃せり。此時に當り、情熱燃ゆるが如く、胸中無限の藻思を貯へたる青年詩人等は、ゴットシェツドが、詩歌に於て乾燥無味なる理性を主張するを見て、憚焉たらざりしかば、競うて瑞西學派に歸せり。依つて瑞西學派は、日を追うて隆盛に赴けり。翻つて萊府學派の状況を察するに、ゴットシェツドの威望復昔日の如くならず、加ふるに女優ノイベルも、二十年來の交誼

を棄て、今や全くゴットシェツドと手を分てり。剩さへ門下の青年詩人も、別に詩社を結んで、獨立するに至れり。かくの如くなれば、一時獨逸文壇に獨歩して、文學上の重鎮たりし文豪も、今や孤城落日の有様となれり。レッシングは「最近文學に關する書簡」第十七に於て、鋭き筆鋒を以て、ゴットシェツドを罵倒せり。其言は奇抜にして力あるを以て、諸書に引用さる。後章レッシングの條下に於て録すべきを以て、茲に之を畧せん。レッシングに先つて、當時最も著名なる諷刺家クリステア、ルードホヒ、リスコーあり。リスコーは、英文學に造詣する所深き人にして、千七百一年、カッテンベルグに生まれ、長くザクセンの宰相ブリュール伯に仕へ、千七百六十年に死せり。リスコーの諷刺書中有名なるは、「惘然なる文士の必要」(デイ、フ、ールツレフリップヒカイト、ウンド、ノートエンディツヒカイト、デル、エーレンデン、スクリベンテン)なり。リスコーは、此書に於てゴットシェツドを、惘然なる文士として大に嘲りたるなり。

第七章 南方詩人ハルレル及び北方詩人ハーゲドルン。

第四編 新南國邊境時代の文學(宗教改革より現代迄)
オーベツツよりクローツツ迄(千六百二十四年より千七百四十八年迄) 第六章 萊府學派と瑞西學派との論争。

ポードメル、ブライティンゲル相結んで、盛にゴットシエドと文藝上の議論を闘はせし時に當り、瑞西詩社の外に獨立して、英文學の研究を唱道し、獨逸文壇に新旗幟を樹てんとしたる詩人あり、これ南方詩人(1) アルブレヒト、フォン、ハルレルなり。

ハルレルは、千七百八年十月十六日ベルンに生まる。生理學、天文學及び植物學に精通し、始め懷疑家なりしも、後には熱心なる宗教家となれり。千七百三十七年以來グティンゲンの新設大學に於て、醫學の教授たりしが、千七百七十七年十二月十二日死す。ハルレルは當時にあつて、博覽強記の人なりしなり。

ハルレルが名聲を博せし傑作は、叙事詩「アルプス山の歌」(ドイツ、アルペン)なり。詩體未だ完璧となすに足らずと雖も、アルプス山中の叙景は、よく自然を寫せり。次いで教訓的詩「災殃の起因に就いて」(ユーベル、デン、ウルシ、ブルング、デス、ユーベルス)は、道徳に關する高き理想を歌へるものなり。小品の抒情詩にては、「愛せる妻マリアーテの死を悼める歌」(ツラ

ウエルオーデ、バイム、アブシテルベン、ザイテル、グリープテン、ガッティン、マリアーテ)名高かく、神の徳を讚美せる歌、永久に就いて「ユーベル、ディ、エー、ヒカイト)は、宗教的思想を述ぶるものなり。

ハルレルは、始めシレシア詩社の風を欽慕し、ローヘンシュタインを學びしことありしも、一朝翻然悟る所あつて、徒に浮華纖巧の句を連ねず、内容に重きを置き、詩文を行るに、適勁の筆を揮ふに至れり。ハルレルの教訓詩は、哲學思想を傳ふるものにして、後にシルレルは、之に倣ひて深遠の哲理を歌へり。

ハルレルの名南方に高かりし時に當り、獨逸の北方に、(2) フリードリヒ、フォン、ハーゲドルンありき。ハーゲドルンは、千七百八年四月廿三日ハムブルグに生まれ、千七百五十四年十月廿八日に死す。ハーゲドルンは、ハルレルと全じく、獨逸文學に新思潮を起さんと努めたり、されど英文學を祖述せずして、佛文學を模範としたり。ハルレルの詩は、哲學思想を述べ、之に反して、ハーゲドルンは、措辭の優美、行文の輕快を主としたり。

ハーゲドルンは文辭の優雅を佛詩に學びしと雖も、又羅馬詩人ホラーツに倣ひて、人生の哲理を説き、酒と愛とを歌へる希臘詩人アナクレオンの遺風を傳へて、人生の快樂を歌へり。人生の哲理と人生の快樂とを以て、抒情詩の主腦とするは、蓋しハーゲドルンに生まれり。十八世紀の抒情詩人は、悉く此傾向を有し、ゲーテは此方面に於ても、古今に冠絶せりと稱せらる。

ハーゲドルンの歌にて、著名なるは「喜悅に寄す」「酒」及び「五月」等なり。滑稽物語にては「石輪製造人ヨハン」「ヨハン・デル・ザイフェンジーデル」あり。寓意詩にては、佛蘭西の寓意詩人ラフォンテーンを模範として作りし「牝鶏と金剛石」「ダス・ヒーレン・ウン・ト・デル・デア・マント」あり。

第八章 普魯西亞詩社。

ハーゲドルンに續いて、アナクレオン、ホラーツ及びペトラルカ等の遺薰を渴仰せし抒情詩人あり。此等の詩人が會合せしは、普魯西亞國のハルレなり。依つて詩社を普魯西亞詩社又はハルレ詩社と云ふ。詩社中最

1. Johann Wilhelm Ludwig Gleim.

も名を知られたるは(1) ヨハン・カール・ヘルム・ルード・カヒ・グライムなり。グライムは、千七百十九年四月二日エルムスレーベンに生まる。エルニゲローデの學校に入り、千七百三十八年以來ハルレに於て法律を學び、ポツダムに於て或家の家庭教師となり、千七百四十四年には、カール・ム皇子の秘書官となつて、第二シレシア戦争に従軍し、千七百四十七年ハルベルシュタットの法教師會書記官となりしが、千八百三年二月十八日在職中に死す。

グライムは、千七百五十八年「普魯西グレンナデールの軍歌」に於て、フッドロヒ大王の戦功を歌ひ、大に名聲を揚げたり。ペトラルカを模倣して作りし歌は、別に歌集となれり。寓意詩にては、「女園丁と蜜蜂」「老翁と死」及び「蟋蟀と蟻」等有名にして、談話にては、「牛乳搾取女」及び「榭と苑」等名高し。

グライムの大作と稱すべきは、教訓的宗教的の詩なり。詩の名を「赤書」(ハルラダート、一名ダス・ローテ・ブーフ)と云ふ。此詩は回々教の教書

第四編

新南國逸詩時代の文學(宗教改革より現代迄)
オービツツよりクロツツ(千六百二十四年より
千七百四十八年迄) 第八章 普魯西亞詩社。

*Neue Beiträge
zum Verständnis des
Verstandes und Witzes*

1. Christian Friedrich Gott. Gellert.

「コーラン」の翻譯に基けるものにして、東方賢人の口を借つて、自己の道徳上及び宗教上の意見を述べ、且つ一般人生觀に就いて説けるなり。

グライムは、友愛を重んじ、交誼に厚く、博愛主義の人なりき。クロップンマックがグライムの徳を頌する歌は、よくグライムの爲人を想望せしむ。グライムに次いでクリステアン、エーワルド、フイン、クライスト、ヨハン、ペーテル、ウーツ、カール、ヘルム、ラムレル。ヨハン、ゲオルグ、ヤコービ、アンナ、ルイーゼ、カルシユ等は詩社中の英才なりき。

第九章 萊府詩社。

萊府學派と瑞西學派とが、牛黨李伐の争をなし、瑞西學派が文藝の批判者を以て自任したるゴットシェツドを論破したることは、前章に述べたり。此時に當つてゴットシェツド門下の秀才は、師説の非なるを知り、多く背反して、別に萊府詩社を興し、シュワーベが興したる機關雜誌と關係を断ち、千七百五十四年更に雜誌「ノイエバイツレーゲ、ツーム、フェルグニューゲン、デス、フェルシュタнденデス、ウント、ハツツェス」を發刊したり。發行の

主任はゲルトテルなり。ゲルトテルは、ゲルレルト及びライベテル等の友人にして、後にブラウンシュワイヒ大學の教授となれり。此新刊雜誌は、萊府詩社の機關雜誌にして、詩社の作品は、逐號誌上に掲載されたり。而して投稿は詩社員相集まつて、公平なる審議をなしたる後、取捨選擇したり。かくして此詩社は、ゴットシェツド、ポードメル兩學派の孰れにも屬せず、嚴正中立の態度を取れり。多情多感の青年詩人等は、英のサミュエル、リチャードソン及びエドワード、ヤングの小説を愛讀し、大に其感化を受けたり。

ゲルトテルと共に、機關雜誌に筆を執りし人にて、先づ第一に指を屈す可きは、クリステアン、フェルヒテゴット、ゲルレルトなり。ゲルレルトは、千七百十五年七月四日サクセン國ハイニヒェンに生まる。父は牧師なり、幼時マイセンの侯立學校に入りて教育を受け、後萊府大學に入り、哲學及び神學を専攻したり。嘗て牧師に聘せられしも、ゲルレルトは、自遜其職に當る能はずとなし、遂に赴かざりき。萊府大學にて講義するの許可

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
ノイヒツツェリク、クロップンマック、トック送。(千六百二十四年より
千七百四十八年迄) 第九章 萊府詩社。

を得て、詩學、修辭學及び道德學の講義をなせり、後には、哲學専門の教授となりしが、千七百六十九年に死す。ゲルレルトは、嚴格なる教育を受け、不如意の境遇に育ち、加ふるに、身軀羸弱にして、意の如くならざりしかば、事に處して、臆し易く、且つ常に沈鬱なりしも、其心は清淨潔白にして、神を敬愛し、友情甚だ厚かりしかば、上は王侯より、下庶民に至る迄、皆ゲルレルトを敬愛したり。千七百六十年、ゲルレルトは、一日、フリードリヒ大王に謁せしが、大王はゲルレルトを評して、獨逸學者中最も温厚の士なりと云へり。一農夫あり、嚴冬、ゲルレルトの門を叩き、一車の薪を持ち來り、日常愛讀する寓意詩の作者に呈して、聊か謝意を表すと云へり。是等はゲルレルトが、衆人の敬愛を受けしことの一例に過ぎざるなり。ゲルレルトは、性來情に激し易き人にして、或時リチャードソンの作「バメラ」を讀んで、感に打たれ、數時間、落涙を禁ずる能はざりしと云ふ。其作「瑞典の某伯爵夫人」(イ) (ダス、レーベン、デル、シュエディッセン、グレイフィン、ゲー) は、リチャードソンの筆致に倣ひて書けるなり。これ獨逸に於ける家庭小説

の始なり。

ゲルレルトは世態人情に迂く、且つは文牘冗長なりしかば、人生の錯綜せる問題を解釋し、義理人情の衝突を描寫するに拙なりき。されば其作りし喜劇も、對話體の道德的論文に過ぎず、只だ觀客の感動を惹起するを以て目的としたり。ゲルレルト自からも公言して、余が喜劇は、觀客をして愉快の笑聲を發せしめんよりは、寧ろ同情の涙を垂れしめんと云へり。其作中(ロ)「デイ、ツェルトリヒエン、シュエステルン」(ハ)「デイ、ベートシエ、エステル」及び(ニ)「ロース、イン、デル、ロツテリ」等は名あり。

レッシングはゲルレルトの作を、獨逸劇中獨逸の日常生活を最も能く寫せるものとして、其功を賞せり。されど要するに、ゲルレルトは、小説家、劇詩家に非ずして、教訓的、道德的の詩文に長じたり。其道德に關する講話は、青年に偉大なる感化を及ぼせり。

ゲルレルトの宗教歌は、最も廣く人民に愛好されたり。その中にも「此日は、神の遣り玉ひし日なり」「主よ、我は爾を求めて來れり」「天のあら

第四編

新南國邊境時代の文學(宗教改革より現代迄)
オーベリヒツェリグ、ロツツ、シュトホッフ、(千六百二十四年より
千七百四十八年迄) 第九章 魯魯四亞詩社

ん限り、主の名は朽ちず、「全智全能の神の恵如何に大なるよ」等は有名なるものなり。

千七百四十六年寓意詩及び説話第一集出づ。此書は獨逸全國を通じて最も廣く誦讀されしものにして、老幼婦女兒童の別なく、非常なる歡喜を以て愛讀したり。ゲルレルトの寓意詩は、佛のラフンテーンを模範とせしこと、歴然たれども、能く獨逸小都會市民の生活の狀態を寫したるものなり。然かも行文平易、叙事簡明にして、最も通俗なるものなり。其名あるものを擧ぐれば、「帽子の話」「農夫と法官」「訴訟」「幽霊」「跛行者の國」等なり。

其他詩社中の人を擧ぐれば、フリードリヒ、ケルヘルム、ツァハリエ、ゴトリープ、ケルヘルム、ラーベチル、ヨハン、エリーアス、シュレーゲル、ヨハン、アイドルフ、シュレーゲル及びヨハン、アンドレアス、クラメル等あり。

二二七

クラシチスムス及びロマンティスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。

○クラシチスムス。

第一章 クロップシュトック。

略傳、クロップシュトックの生涯は三期に分かつ可し。

第一青年時代(千七百二十四年より千七百五十年まで) (I) フリードリヒ、ゴットリープ、クロップシュトックは、千七百二十四年七月二日クエドリンプルグに生まる。幼時家にありて、嚴正なる父と、溫柔なる母とに養育され、千七百三十九年ブフォルタの侯立學校に入り、希臘羅甸等の古語、並に宗教及び獨逸の文學を學びたり。千七百四十五年クロップシュトックは、此校を去るに臨み、文學に關する自家の意見を述べて、告別の辭となせり。これクロップシュトックの有名なる告別演説なり。其趣旨は英文豪ミルトンの崇拜にして、且つ英文學を模範として、獨逸文學を興す可きことを主張し

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラシチスムス及びロマンティスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クラシチスムス。第一章 クロップシュトック。

たるなり。クroppシュトックは、此頃既に古希文學の研鑽に熱心なりしが、神學を學ばんとして、イエーナに行けり。此地に在る時かの叙事詩『メツシアス』中の三歌は、散文にて書かれたり。千七百四十六年復活祭の時ライプチヒに赴きしが、時恰かもポードメルとゴットシュッドとの論争激甚にして、ゴットシュッドの聲望漸く地に墮ちんとする頃なりき。クroppシュトックのライプチヒに在るや、從兄弟なるシュミット及びライプチヒ詩社の人と交遊したり。千七百四十八年に至り、クroppシュトックは、『メツシアス』の始めの三章を、六脚句の韻文に改作したり。翌年家庭教師となり、ランゲンザルツァに赴きしが、シュミットの妹ソフイーを見て、深き思を寄せたり。其翌年平素尊崇したるポードメルに招かれて、瑞西國のチューリヒに旅行したり。

第二、成人時代(千七百五十年より千七百七十一年まで) 丁抹王フリードリヒ五世は、ベルンストルフ伯の奏請を容れて、クroppシュトックを王都コーペンハーゲンに招けり。クroppシュトックは招かれて王宮に至り、王の優遇を受け、公使館顧問官の名譽職に就き、閑散の生活を送ること

を得しかば、専心一意叙事詩『メツシアス』の完成に従事したり。旅程に上る時、故郷クエドリンプルグに立寄りて、老祖母の病を訪ひ、ハムブルグを過ぎて、メタ、モルレルと云へる一婦人に會合し、戀慕の情禁ずる能はず。千七百五十四年遂に結婚せり。ざるにメタは婚姻後四年を経て、一人の幼兒を残して、早く世を去れり。最愛の妻を失ひし壯年の詩人は、鬱々として樂まず。讀書に耽り、詩歌を弄び、且つ宗教に熱中して、僅かに心を慰めたり。悲劇『アダムの最後』は此頃に成りしものなり。かくクroppシュトックは、妻を失ひて後は、不愉快なる年月を送りしが、千七百六十六年寵遇を受けしフリードリヒ五世死し、クリステアーン七世位を継ぎたり。新王はストルトエンゼーを寵用して、ベルンストルフ伯を疎んぜしかば、千七百七十一年クroppシュトックは、ベルンストルフ伯に従ひて、ハムブルグに歸れり。

第三、老年時代(千七百七十一年より千八百三年) 傑作『メツシアス』は、千七百七十三年を以て完成したり。茲に於てクroppシュトックの名聲噴

第四編

新南國連綿時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クランツァスクス及學びのロマンツァイスマス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クランツァスマス、第一章 クroppシュトック

々たりき。ゲッティンゲンの少壯詩人は、盛にクロップシュトックを謳歌し、詩社を興し、之を森林詩社(ハインブンド)と名づけたり。さて此詩社の名の由来を尋ねるに、クロップシュトックは、是より先千七百六十七年「丘と森」(ヒューゲル、ウント、ハイン)と云ふ詩を作りたり。蓋し「丘」とは希の文學上有名なるバルナッス山を指すものにして、古希の精神を有する詩歌即ち非獨逸的の詩歌の標號なり。森は獨逸獨特なる樹樹の森林にして、且つ樹は、木質強堅能く獨逸人の剛健なる氣象を現はすものなり。されば「森林」は獨逸の國民的詩歌の標號なり。依つて考ふるに、森林詩社とは、獨逸固有の詩歌を樹立せんとの意に基けり。千七百七十四年クロップシュトックは、カール、フリードリヒ伯に召されて、カールスルーヘーに赴かんとして、途中フランクフルトを過ぎ、當年二十六才の青年詩人ゲーテに出會へり。カールスルーヘーにあること一年にして、ハムブルグに歸る。此時佛蘭西革命の氣運漸く盛ならんとする時なりき。クロップシュトックは、千七百九十一年メタの姪ヨハンナと婚せしが、千八百三年三月十四日七十九歳の高齡

を以てハムブルグに死す。全月二十二日オッテンゼンに於て、盛大なる葬儀を營み、詩人の遺骸を埋葬したり。

クロップシュトックは、新南獨逸文學全盛時代の劈頭に現はれたる詩人なり。癡さにギンテル、ハルレルの徒出て、ゴットシェットの理性偏重主義に反抗して、詩歌は感情を主とすべき事を唱へしと雖も、其作は詞藻の高韻を欠きたりき。然るにクロップシュトックは、優麗の辭を以て、富麗なる想像を述べ、燃ゆるが如き情致を歌へり。而して又クロップシュトックは、語學に非凡の天才を有し、ゴットシェットと正反對にして、語辭の明白、文辭の簡潔を主とせず、語句力あり、措辭雄健なりき。クロップシュトックは、オーピッツ一流の如く、無趣味なる縁巧を學ばず、又ゴットシェットの如く、無味乾燥なる句を連ねず、能く情内に動いて、忽ち之を外に現はすことを努めたり。而して句の構成及び語辭の排列に拘束すべき法則を設けず、アレキサンドリーチル及び單調なる韻律を廢して、ヘキサメター及び其他古代の句脚を用ゐたり。之れ詩歌に於ける韻律用法の一大進歩と云ふ可きなり。

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラウツスマス、スミス及びロマンツァイス、スミス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラウツスマス、第一序、クロップシュトック。



高麗の『メッシアス』詩事叙

メッシアス

クロップシュトックの文の短所は、情致を述ぶるに、餘まり極端に馳せて過激の情となり、詩句を練らんとして、巧を弄するに失し、用語の杜撰を避けんを以て却つて細緻なる考察の弊に陥り、單純なる感情をも故意に複雑となすの癖あるを免かれず、されどワルナルの後ゲーテの前抒情詩人の第一流として、先づ指を屈す可きは、クロップシュトックなり。クロップシュトックは元來抒情詩人なりと雖も、彼が一代の傑作は、ミルトンの作『失樂園』を祖述したる叙事詩(イ)『メッシアス』なり。

『メッシアス』は、全篇二十歌より成り、救世主メッシアスにより、罪ある人間が救はるゝ事を歌ひたるものなり。故に『メッシアス』は、宗教的の叙事詩なり。

其梗概を畧叙せんに、第一歌は、天の事を記するものにして、神の父と神の子との問答なり。神の子は、下界の人類を救ひ出さんとの希望を述べ、神の父は、人類の罪を赦す可きを誓へり。第二歌は、地獄にして、悪魔サトタンとアドラメレヒとが、メッシアスを苦めんとすとの約を結び、アバド

クロップシュトゥックの文の短所は、情致を述ぶるに、餘まり極端に馳せて過激の情となり、詩句を練らんとして、巧を弄するに失し、用語の杜撰を避けんとして、却つて細緻なる考察の弊に陥り、單純なる感情をも、故意に複雑となすの癖あるを免かれず。されどワルテルの後ゲーテの前、抒情詩人の第一流として、先づ指を屈す可きは、クロップシュトゥックなり。クロップシュトゥックは元來抒情詩人なりと雖も、彼が一代の傑作は、ミルトンの作『失樂園』を祖述したる叙事詩(イ)『メツシアス』なり。

『メツシアス』は、全篇二十歌より成り、救世主メツシアスにより、罪ある人間が救はるゝ事を歌ひたるものなり。故に『メツシアス』は、宗教的の叙事詩なり。

其梗概を畧叙せんに、第一歌は、天の事を記するものにして、神の父と神の子との問答なり。神の子は、下界の人類を救ひ出さんとの希望を述べ、神の父は、人類の罪を救す可きを誓へり。第二歌は、地獄にして、悪魔サタンとアドラメレヒとが、メツシアスを苦めんとの約を結び、アバド



高麗の『メツシアス』叙事詩の題

ンナが之に反對するなり、第三歌は、地上にして、耶穌生れ來て、人民を救はんとす、然るに反問者たるユーダス現はる、第四歌より第七歌迄は、耶穌の遭難の事にして、第八歌より第十歌迄は、救世主の臨終を記するものなり、後半即ち第十一歌より第二十歌迄は、耶穌の復活より、上天に至る迄の記事なり。

此雄大なる叙事詩に就いて、少しく批評を試みんに、クロツプシュトックは、單に一方面よりの觀察を以て、人類救助の大問題を解決せんとしたるなり、一方面とは即ち神の方面よりの觀察を以てして、人の方面よりの觀察を以てせざりき、語を換へて云へば、人間的にあらずして、神學的態度を取り、目に見るべからざる超世間的境界に事變を置きて、捕捉すべからざる事相を叙述せんと試みたり、本篇の主人公メツシアスは、常に神及び天使と交はり、其性格は實在を離れたり、其他詩中の人物多くは實在の人にあらずして、アダム、エバ等の如き過去の人物及び救世の望を抱ける尙未だ地上に現はれざる人の靈又は地獄に於けるサータン。

アドラメレヒ等の如き空想的人物なり。かくクロップシュトックは、此時に於て、感知す可き實在界の現象を記せずして、努めて空想的超世間的の事を歌へり。換言すれば、現存の事を云はずして、過去の事又は未來の事を言へり。されば詩中有形的箇人的の人格少なくて、無形的抽象的の人物多きが如し。シルレルが、此詩を評して、「クロップシュトックは、事物を抽象して、悉く精神化し、其實體を奪へり」と云へるは、蓋し適評と云ふ可し。實に本篇の人物は、實在の人として其存在を確認せしめず、無形にして飄然浮動せるものゝ如し。

クロップシュトックは、既に述べたる如く、元來敘事的の才能よりは、寧ろ抒情的の感情に秀てたり。されば「メツシアス」に於ても、動作大に欠乏せるが如し。而して動作に代ふるに、長き談話、敘述、歌謠等を以てし、一般に敘述の法客觀的ならずして主觀的なり。徐々に發展す可き事實にあらずして、感に打たれ、情に激して起る如き抒情的の性を帶べり。

「メツシアス」は、最初の三歌を以て秀絶となす、且つ一體に始めの十歌に比して、後の十歌は詩的價值劣れるが如し、殊に第十六歌以後は記事抽象的にして、詩人の意那邊にあるや、之を推讀するに苦むなり。要するに「メツシアス」一篇は、クロップシュトックが宗教に對する高遠の理想を述べたるものにして、クロップシュトックは、此詩を作るを以て、自家の天職なりと公言せしと云ふ。

此詩は人物の抽象的なること、動作の欠乏せること等數へ來れば、非難す可き點無きに非ずと雖も、爾來多くの詩人によつて試みられ然かも失敗に歸したる題目を捕へ來つて、詞章絢爛の美をなし、ミルトンの「失樂園」、ホメールの「イリアス」、「オディッセー」等と並稱せらるゝに至りしは、クロップシュトックが獨逸文學に貢獻したる功、偉大なりと云ふ可きなり。クロップシュトックは、頌歌に於て、最も能く抒情的詩才を發揮したり。頌歌にて詩材の種類を分かつてば、宗教、友誼、戀愛、愛國の歌等種々あれど、總ての歌に一貫せるは宗教的理想なり。宗教的の歌にて、「救世主」「救世主に」「神に」「讚美」及び「春の祭」等あり。中にも「春の祭」は思想、聲調共に優れたり。

第四編

新南國邊境時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラシチスムス及びロマンティスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クラシチスムス。第一章 クロップシュトック。

戀愛歌にては、從兄シュミットの妹マリア、ソフィーに與へたる「アン、ファンニイ」及び愛妻メタ、モルレルを歌ひたる「アン、チドリ」其他「未來の愛人」「薔薇の紐」等あり、友誼の情を歌ひしものにては、「カンゴルフ」「チルヒェルゼー」及び親しき友と別離せし悲の情を抒べたる「アン、ギーゼク」「アン、エーベルト」及び「デイ、フリーヘン、グレーベル」等有名なり、又愛國の精神を歌へるものにては、「我が國」「愛國の歌」等名あり。

以上列擧したる頌歌は、國民に愛國の思想を喚起し、自國を愛するの熱情を起さしめたり、フリードリヒ、リュッケルトは「オッテンゼン」に非むられたる三偉人の詩を作り、大にクロップシュトックの功を賞揚したり。

クロップシュトックの歌は、青年時代と晩年とに於て著るしき差別あり、初期の作に充滿せる熱情は、年を経るに従つて冷淡となり、文致快活ならず、且つ思想分明を欠くに至れり。

劇詩にては、クロップシュトックは、主として聖書の物語及び獨逸最古の歴史より材料を取れり、宗教劇にて(ロ)「アダムの最後」(ハ)「ザロモー」及び

n. Der Tod Adams.
ハ. Salomo.
ニ. David.
ホ. Hermannsschlacht.

ヘ. Hermann und die Fürsten.
ト. Hermanns Tod.
チ. Bardiet.

(ニ)「ダギッド」等は名あり、時代劇にては、ヨゼーフ二世の事蹟を作りし(ホ)「ヘルマンヌシュラハト」(ヘ)「ヘルマン、ウン、デイ、フルステン」及びト)「ヘルマンヌ、トート」の三戯曲あり、又チ)「バルディエト」と稱する一種の戯曲あり、此作の由來に就いては、第二編第一章獨逸最古の律語の條下に述べたり。

劇詩も、他の詩と同じく、抒情的にして、動作を欠き、箇人の性格の描寫頗る朦朧なり、クロップシュトックは戯曲「バルディエト」を書くに當り、蘇格蘭詩人オッシアンに感化を受けたること多し、オッシアンの作は、千七百六十二年にジェームス、マクファーンが英語に翻譯して出版せしが、始めて獨逸に傳はりしは、千七百六十四年なり。

第二章 非ーランド。

(1) クリストーフ、マルティン、非ーランドは、千七百三十三年九月五日シュッーベンのピベラハ附近のオーベルホルツハイムに生まる、父は、牧師なり、非ーランドは、青年の頃父の感化を受け、熱心なる耶蘇教信者な

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クワシナスマス、ス、及びロマンテイス、ス、千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クワシナスマス。第二章 非ーランド。

りさざれば其作も宗教的趣味を帯ぶるもの多し然るに後英佛の開明文學を研究するに及んで大に啓發する所あつて宗教趣味を脱し人間情致の赴く所を寫すに至れり後年エルフルトに至り哲學を學び思想再び一變したり依つてキーランドを論ずるには思想の變遷に従ひ其生涯を三期に分かつ可し。

第一、宗教的傾向時代、キーランドは幼時家にあり父が日夜怠らざる牧師の務を見て深く神を信ずるの心を起せしがマクデブルグに近き、クローステルベルグの學校に入りて、益神を敬愛すべきことを悟れり年漸く長ずるに及んで、クロプシュトックの傑作『メシヤス』を讀んで大に感動し、念宗教熱に耽るに至れり當時の作にて教訓詩萬物の自然性に就いて^(イ)（ラオンデル、ナツール、デル、デインゲ）は、耶穌教の立脚點より、汎神論及び唯物論を反駁したるものなり十七才の時ティュービンゲン大學に入り、法律を學びたり而して後文献學、哲學及び歴史を研究するに至れり『道德的書簡』^(ロ)（モラリッセル、ブリーフエー）及び^(ハ)『アンティ、オキ

ード』は、大學生時代の作なり、キーランドの宗教思想は、瑞西のチューリッヒに遊び、ポードメル^(イ)の許に寄寓せし頃益増進したり此地に滞在中の作にて名あるは、『デル、ゲブリーフテ、アブラハム』なり、『全情』^(シム、バタイエー)及び『耶穌教徒の感情』^(エム、プフィンツン、ゲン、デス、クリステン)の二作は、暗にグライム、ウーツ等を攻撃したるものなり。

第二、肉感的傾向時代、高遠なる理想、嚴格なる道義を主張したるキーランドは、英佛の開明文家を研鑽するに及んで、急ち文學に對する主義一變したり、キーランドが最も私淑せし英佛の文豪は、シャフツベリ^(イ)、十七世紀の末葉より十八世紀の始めに出でし有名なる英の哲學者にして、且つ道德家なりルソー、ボルテール、ディデロー、ダラムベール^(ルソ)、ボルテール等は云ふを要せざる可し、ディデローは、哲學者、批評家にして、且つ詩人なり、ダラムベールは、數學者を以て殊に名高し、二人共に佛の十八世紀の學者にして、百科全書^(イ)の著を以て殊に有名なり、此大著述にはボルテールも大に補助を與へたり等なり、キーランドが肉感的文

學を賞ぶに至るとは、英佛の開明文學に負ふ所大なりと雖も、又千七百六十年以後ピペラハの裁判所長たりし時、ポードメル及びスタディオ伯の感化を受けたること多し。スタディオ伯は、英佛の文學を嗜み、美術思想に富みたる人にして、居城ワルトハウゼンに於て、屢カールランドと會談したり。伯は佛蘭西風の教育を受けし人なれば、自然華美の趣味を有し、逸樂を好みたりき。カールランドは、伯と親交を重ねるに至り、伯の風を見倣ひ、眞理は本能の満足にあり、徳義は人生快樂の中に存すと考ふるに至れり。當時の作『ナデ、イチ』は、希臘思想を述べしものにて、道徳上より見る時は、淫猥の穢を免かれず。遂に此作は世の物議を醸し、クロップシュトックの遺風を追慕せる『森林詩社』（ハインプوند）の青年詩人は、クロップシュトック誕生の祝日に、カールランドの作を焼き棄てたりと云ふ。

カールランドは、小説を書けり、模範とせしは、英佛文人の作なり。英の文人にては、頓智滑稽の文牒を以て名あるヘンリー、フィールディング（十八世紀の小説家なり）、ジョセフ、アンドリュース、『トム・ジョーンズ』及び『アメリカ』の

三著は、セルバンテスの作を模倣したるものにて、殊に有名なり。ローレンス、スタイン（十八世紀の小説家なり）、トリストラム、シャンデイの著あり。ジ・ナザン、スファット（十七世紀の終より十八世紀の前半に在りし人にして、神學者にして、且つ、政治家なり）、トリリー黨の機關雜誌『エキザミナー』に筆を執れり、等なり。

カールランドは、其作に於て舞臺を獨逸國內に置かず、西班牙、希臘又は東洋に托して、我思想に外國の服裝を著せしめたりき。

小説(二) 『ドン・シルバオ、フォン、ロザルヴ』は、セルバンテスの作『ドン・キコッテ』を模倣したるものなり。主人公ドン・シルバオが、魔女の存在を信じ、人生及び自然は魔女の爲めに左右さるゝものなりと考ふるは、ドン・キコッテが、諸國を巡りて、武者修業をなし、武士制度の再興を夢想せると相全じ、兎に角双方が一種の空想に驅らるゝ點は、頗る相似たり。次いで(ホ) 『アガトン』は、作者自身が遭遇せし經歷談とも稱す可きものにして、作の主人公アガトンは、熱心なるブラントン崇拜家なり、然るに茲に一の

詭辨家ヒッピアスあり。ヒッピアスは、快樂實益のみを知つて道義の觀念更に無き人なり。而して實利主義を以て、アガトンを説服せんとす。アガトンは、ヒッピアスに説破さるゝことは無かりしも、固より木石ならぬ身なれば、容貌端麗の一婦人ダナエに誘惑さる。此小説は、アガトン、ヒッピアスの二人物に於て、至高善なる道德説と、最劣なる實利主義との衝突を描きたるものなり。

スタディオンの伯の死後、キーランドは、ワルトハウゼンを去り、マインツの選帝侯エムメリヒ、ヨーゼフの招聘に應じ、千七百六十九年エルフルト大學の哲學教授となれり。此年を以て、キーランドの第三期の生活始まる。

第三、哲學的傾向時代、キーランドは、エルフルト大學に於て、歴史哲學(フィロソフィー、アルゲシヒテリ)の講義をなせり。千七百七十二年には、侯爵夫人にて、此頃寡婦となれるアマーリエに招かれて、其次子コンスタンティン及び世子カール、アウグストの養育者となり、ライマールに赴けり。

カール、アウグスト成長して、自ら政を執るに至り、キーランドは、千七百七十五年師傳の職を辭したり。此後もキーランドは、ワイマールに留まり、宮中顧問官の名譽職に就き、閑散に日を送り、哲學の研究に従事し、詩を作り、ゲーテと親交を結び、後ヘルデル、シルレル等と互に來往したり。此頃「ドイツチル、メルクル」と稱する文學雜誌を創刊し、名作を連載して、廣く世間に文學趣味を傳へたり。此雜誌に載せられし作にて、小説(へ)

「アンデリーテン」及び「叙事詩ト」『オーペロン』等あり。中にも『オーペロン』は、キーランドの作中最も有名なるものにして、沙翁の「夏の夜の夢」及び佛の古代小説「ユオンド、ポルド」等を模範とせしものなり。作の主人公をヒュオンと云ひ、冒險を好み、回々教徒の長カリファの娘レチアに思をかけ、魔王オーペロンの助を借り、遂に其願を遂げたり。此詩は、詞章典麗、文辭流暢にして、詩形はシタングツとも伊太利の詩形なり。低高一五脚句八を以て一節となし、始めの六句は一つ置に押韻し、終の二句は全韻なり。なり。ゲーテは此叙事詩「オーペロン」を評して曰く、「詩が詩であり、金が金

へ、Abderiton.
ト、Oberon

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラウゼン、スミス及びロマン、クイスマス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラウゼン、スミス、第二章、キーランド。

であり、水晶が水晶である間は「オーペロン」は文藝作品中の傑作たるの
価値を失はずと「原文直譯」以て此詩の価値を推知するに足らん。小説に
ては、(チ)「ペレグリーヌス、プロトイニス」及び(リ)「アリストテッポ」等名あり。
ホーランドは、翻譯家としても名あり、沙翁の戯曲二十二を散文に翻譯
せり。獨り「夏の夜の夢」は、原詩の句脚を用ゐて、韻文に譯したり。其他ル
チアンの作、ホラーツの詩簡、諷刺詩及びキケロの手簡等をも獨文に譯
したり。ホーランドの翻譯は、忠實を欠く嫌あれども、能く原文の意を保
ち、然かも文辭圓熟なり。

ホーランドは、千八百十三年一月廿日ワイマールに死す。遺骸は亡妻
及び詩人クレメンヌス、ブレンターノの妹ゾフィー、ブレンターノの遺骸と
相并べて埋葬したり。生前愛と友誼とを以て、交情密なりし三人の遺骸
は、一墓標の下に永眠せり。

ホーランドを尊崇せし人にて著名なるは、當時ワイマール高等學校
の教授ムゼーウスなり。グルーベルは千八百二十七年ホーランドの傳
を出版したり。

第三章 ゲッティンゲン詩社

曩きに萊府詩社あり、ハルレ詩社あり、今又茲にゲッティンゲン詩社起る。
これ即ち森林詩社(ハイムブント)にして、クロップシュトックを崇拜せる青年
詩人が千七百七十二年九月十二日を以て、ゲッティンゲンに於て組織した
るものなり。此社の青年詩人は、クリスティアン、ボーイエ及びフリードリヒ、
ホルヘルム、ゴッテルの二人が千七百七十年に創刊したる「ゲッティンゲ
ル、ムーゼンアルマナハ」と云ふ雜誌に寄稿し、而してホーランドに反抗
したり。此詩社は、一たびグッティンゲンに集まりしも、社友は間もなく諸方
に散じたり。而して「ムーゼンアルマナハ」は、唯一の機關雜誌として、詩社
の消息を傳へ、社友の連絡を保持したり。左に詩社中著名なる人を擧げ、
其生涯及び作を略述せん。

(1) ゴットフリート、アウグスト、ビルゲルは、千七百四十七年十二月三
十一日モルメルシュエンデに生まる。ビルゲルは、ハルレを去つて、ゲッティン

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クワシテ、スミス及びロマンティスムス、千七百四十八年より千八百
四十八年迄。) ○クワシテ、スミス。 第三章 ゲッティンゲン詩社。

ゲンに赴きたる時、ポリーエに會せり。ポリーエは、ビュルゲルの詩才を愛し、己が黨與となせり。後ビュルゲルはポリーエの恩顧を受け、アルテングライヘンの裁判官となりしが、職を辭しゲッティンゲン大學の教授となれり。ビュルゲルは、情に動き易く、三人の女と結婚し、終に一生を不幸憂悶の裡に送り、千七百九十四年六月八日に歿す。

ビュルゲルの傑作と稱せらるゝは、千七百七十四年「ムーゼンアルマナハ」に載せられたるバラード(ロ)「レノーレ」なり。古昔より蘇格蘭瑞典諾威、丁抹及び北部中部獨逸には、相愛せる人の一人死する時は、死人の靈は、月夜墓を出て、疾風の如き速さにて、戀人の許に來り、之を奪ひ去ると云ふ傳説ありき。「レノーレ」は、此傳説に基きて書かれたるなり。ゲーテの有名なるバラード「コリントの花嫁」(ディブラウト、フォン、コリント)及びアイピングの「幽靈の花嫁」(スベクテーター、ブライドグルーム)等も此傳説によれるなり。ビュルゲルが、此詩を書きし時は、七年戦争の後にして、當時の人民の腦裡には、戦争の状況著るしく反映せし時なりしかば、ビュルゲ

ハ. Verlust.
ン. Liebe ohne Heimat.
ホ. An das Herz.

ルは、此戦争に陣歿せし人の幽靈を描き出し、讀む者をして一層深き感動を起さしめたり。此詩は二篇に分かれ、第一篇は戦没者のうら若き未亡人レノーレが空閨を嘆じつゝ、亡き人を思ひ出して悲める心情を問答體に書けり。第二篇は、亡夫の靈が夜に乗じて、墓を出て、戀しき妻の許へ赴く所を寫すものにして、夜の叙景は一讀凄然たらしむ。ビュルゲルのバラードは、動作を寫すに巧にして、且つ當時の人の嗜好に投じたるを以て著名なり。「レノーレ」の外バラードにて名あるは、「勇士の歌」、「暴き獵夫」、「帝王と僧都」等なり。ビュルゲルは、俗語をも作れり、されど最も長じたるは、ソネットなり。ソネットにて名あるは、(ハ)「フェルルスト」、(ニ)「リーベ、オート、ハイマート」及び(ホ)「アン、ダス、ヘルツ」等なり。シルレルは、概してビュルゲルの詩を非難せしと雖も、獨りソネットに至りては、大に之を賞揚したり。

(2) ヨハン、ハインリヒ、フォスは、千七百五十一年二月二十日メクレンブルグのゾムメルスドルフに生まる。父は小作人にして、家貧しかりし

第四編 新南國選時時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラシチスムス及びロマンチスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クラシチスムス。 第三章 ゲットアインゲン詩社。

かば、フォスは、同情深き友人の保護を得て、ノイブランデンブルグに小學教育を受けたり。ポリーエの盡力を以て、ゲッティンゲン大學に入りしが、千七百七十二年に、ゲッティンゲン詩社の創立員となれり。ポリーエは、大にフォスを信じ、機關雜誌「ムーゼンアルマナハ」の編輯を一任し、且つ又妹エルネステイチをフォスに娶はしたり。フォスは、千七百七十八年以來ハイデルンのオッテルンドルフ小學校の校長となりしも、其職を辭し友人ストルベルグの世話により、去つてオイティンに赴けり。されど留まること久しからずして、イエーナに行けり。然るにゲーテと隙を生ぜしかば、早く此地を去つて、ハイデルベルグに、職を求めたり。ハイデルベルグに至り、宮中顧問官たりし時、千八百二十六年三月二十九日を以て死す。

フォスは、全く頑固なる北方人の性質を有し、不屈の精神と理解力に富みたり。友人に對しては懇切至らざるなかりしと雖も、敵に向つては、一歩も假借せざりき。

フォスの詩にて有名なるは、牧歌(イディルレー)なり。フォスは、北獨逸日常生活

活の状態を寫さんことを努め、山家に於ける閑散の生活及び家庭の快樂を描きたり。されば詩中の人格は、想像的又は理想的のものなく、實在的の強健素朴なる人物なり。

牧歌にて最も名高きは、(へ)「ルイーゼー」なり。此牧歌は、三歌より成り、第一歌は、山間の僻村に於ける祝日の様を寫すものにして、詩の主人公たる一農家の娘にて、許嫁となれるルイーゼーは、誕生日に際し、父母及び花婿と共に、之を祝し、一家團樂の樂を盡して一日を過ごせり。第二歌は、花婿なる牧師ワルテルがルイーゼーの家に至りて、靜かなる庭園に蝶を追ひ、花を尋ねて、遊び暮すと云ふ互の交情濃かなる様を描けり。第三歌は、ルイーゼーと、ワルテルとが、鴛鴦の契を結ぶ日の事を叙するものなり。

フォスの「ルイーゼー」の名は、ゲーテの「ヘルマン、ウンド、ドロテア」の聲望に掩はれたるの觀ありと雖も、ゲーテは、詩中淡泊なる男女の戀愛及び閑雅なる田園生活を描くに當り、「ルイーゼー」に負ふ所甚だ大なるもの

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラフシテスマス及びロマンテイスムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラフシテスマス、第三章、ゲッティンゲン詩社。

Allied and advisory

なり、ケーテはシルレルと共に作れる「クセーニエン」に於て大に「ルイ
ゼー」を賞揚せり。

二五〇

牧歌「ルイゼー」が傑作たるの故を以て、單に「ルイゼー」の一作により
て、フォスの詩才を評價するは、大早計なり。フォスの名聲は「ルイゼー」の作
家としてよりも、翻譯家として、更に高きが如し。フォスは、翻譯の術に獨特
の技を有したり。翻譯にて名あるは、ホルギール、オホード、ティブル、ヘシオッ
ド、ホラーツ、テオクリート、プリストファチス等の如き、有名なる希臘羅馬
の詩人の作を始めとし、ホメールの二大叙事詩「イリアス」「オディッセル」
等なり。中にも「イリアス」「オディッセル」は、今日の如く言語學の研究盛な
る時代に於ても、學者の等しく、歎賞措く能はざる所にして、能く原文の
意を保ち、原詩の律に従ひ、然かも語辭流暢にして、遂も翻譯の痕跡を認
めざるなり。

詩社にて有名なる人は、其他ストベルク、伯兄弟、ルードホヒ、ヘルティ、マ
ルティン、ミルレル、ヨハン、アントン、ライゼキッツ、マッティアス、クラウディウス、ヨ



グ ヌ シ ッ レ(上)
ク ッ ト ヌ シ プ ッ ロ ク(下)

ル ア ル へ(上)
ド ヌ フ 1 # (下)

allread and odyssey?

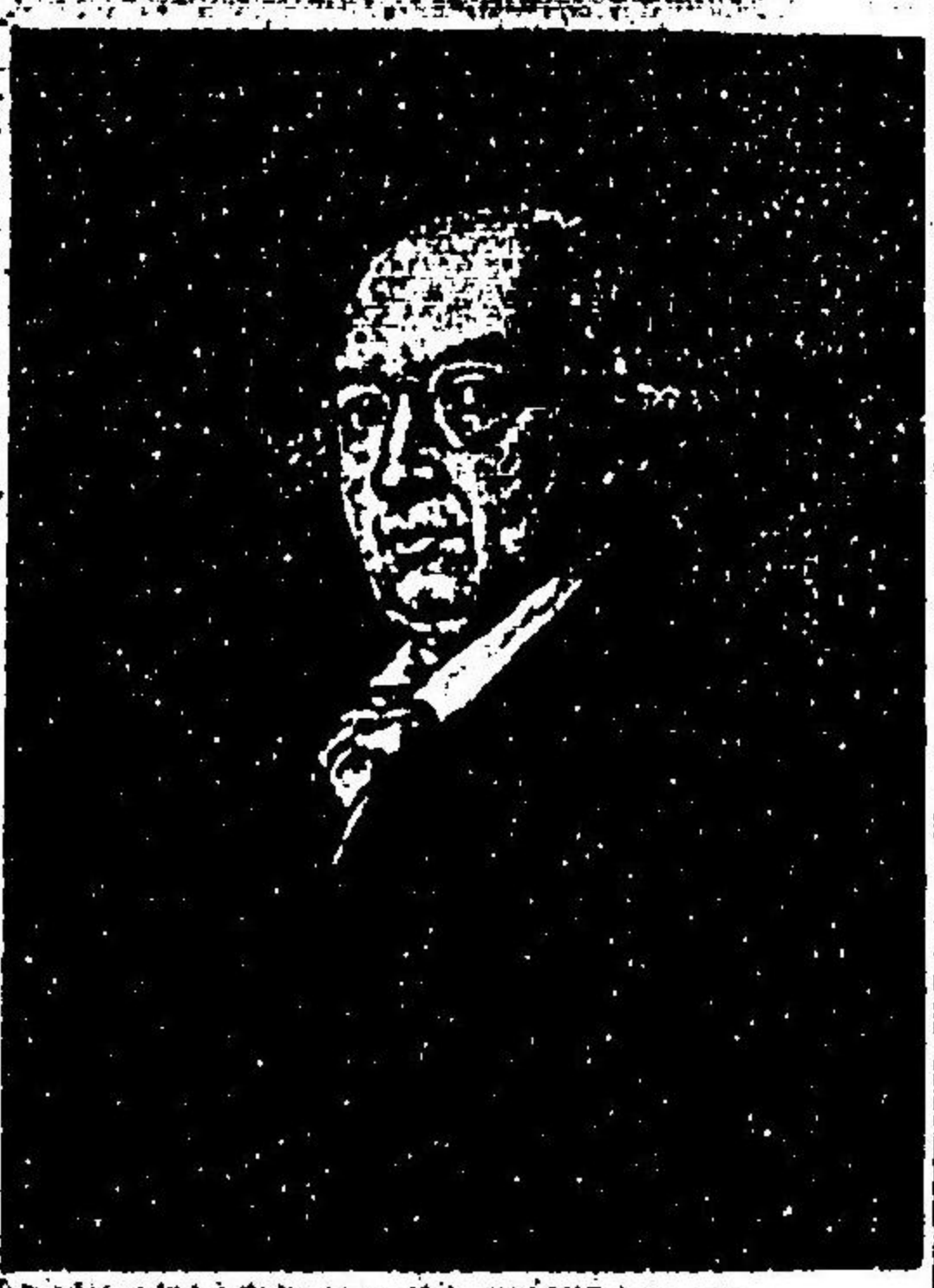
なり、ゲーテはシルレルと共に作れる『クセーニエン』に於て大に『ルイーゼー』を賞揚せり。

牧歌『ルイーゼー』が傑作たるの故を以て、單に『ルイーゼー』の一作によりて、フォスの詩才を評價するは、大早計なり。フォスの名聲は、『ルイーゼー』の作家としてよりも、翻譯家として、更に高きが如し。フォスは、翻譯の術に獨特の技を有したり、翻譯にて名あるは、ギルギール、オギード、ティブル、ヘシオッド、ホラーツ、テオクリート、アリストフ、テス等の如き、有名なる希臘羅馬の詩人の作を始めとし、ホメールの二大叙事詩、『イリアス』、『オディッセー』等なり。中にも、『イリアス』、『オディッセー』は、今日の如く言語學の研究盛なる時代に於ても、學者の等しく、歎賞措く能はざる所にして、能く原文の意を保ち、原詩の律に従ひ、然かも語辭流暢にして、毫も翻譯の痕跡を認めざるなり。

詩社にて有名なる人は、其他、ストベルク、伯兄弟、ルード、非ヒ、ヘルティ、マルティン、ミルレル、ヨハン、アントン、ライゼ、カッツ、マッティアス、クラウ、ディウス、ヨ



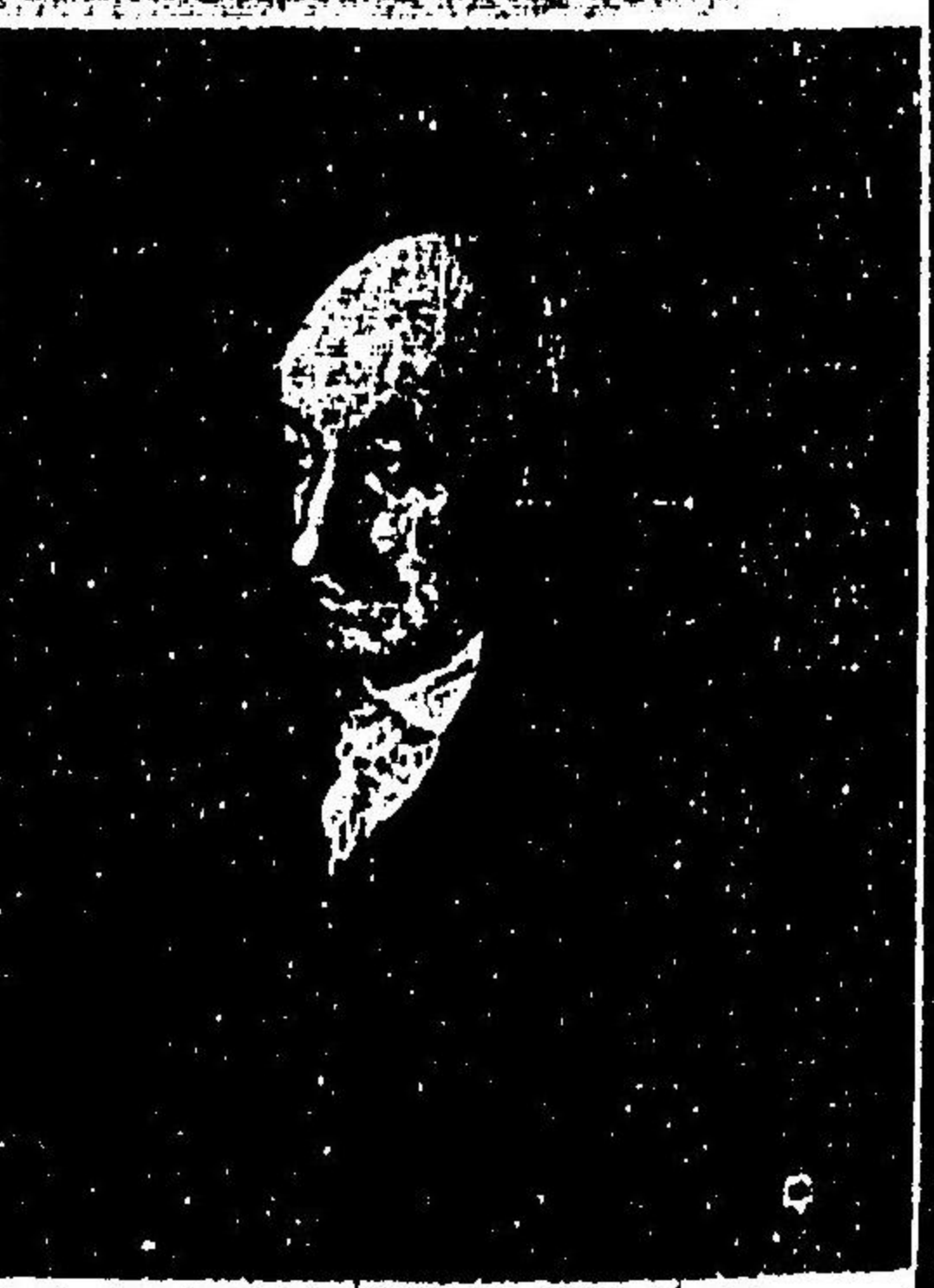
Goethe



Schiller



Herder



Schlegel

グ ヴ シ ッ レ(上)
ク ッ ト ユ シ プ ッ ロ ク(下)

ル テ ル へ(上)
ド ン リ 1 # (下)

ハン、ペーテル、ヘーベル等なり。

第四章 レッシング

上古以來獨逸の文豪は、指を屈するに遑あらずと雖も、文學史を掃き來つて、思はず快哉を呼ばしむるは、レッシングに到達したる時なり。之を譬へんに、レッシング以前は、森林の中を行くが如く、時に野花の香ばしきあり、幽禽の玉音を弄するありと雖も、未だ四邊の眺望を縦にする能はず。「ナークン」の詩人出づるに及んで、恰かも森林を過ぎて、廣漠たる原野に、洋々として、津涯を知らざる大江を望見するが如し。

ゴットシェットは、早くも獨逸演劇改良の必要を感じ、女優ノイベルと謀かり、著々歩を進めんとせしも、門下漸く、其命に負き、ホードメル一派の瑞西詩人に、一大打撃を受け、遂に其目的を達せず。シロップシュトックは、夙に格法の整然たる、聲調の佳麗なる佛詩の非なるを知り、ゴットシェットの徒が、沒意義の詩題として、極力排斥したる、「失樂園」を祖述して、叙事詩「メツシアス」の著あり、されどシロップシュトックは、性來多感多情の宗教的詩人に

第四編 新南獨逸諸時代の文學（宗教改革より現代迄）
（クワシテス、ムス及びリマン、テイスマス、千七百四十八年より千八百四十八年迄。）○クワシテスマス。第四章 レッシング。

して、叙事及び動作の描寫に拙なり。ボードメル、ブライティンゲルは、能く反抗の聲を大にせしも、自から代つて改革をなすの伎倆を有せざりき。要するにゴットシェツドは、見解淺薄にして、幼稚なる當時の文壇に、一時稱を稱したるに過ぎず。クロツプシュトックは、「メツシアス」の詩人を以て終り、ボードメルの徒又如何ともする能はざりき。此時に當つてレッシング出づ、レッシングは、創作の才と非凡なる批評眼とを有し、然かも其學該博にして、到底ゴットシェツド、ボードメル、クロツプシュトックの輩が企て及ぶ可きに非ざるなり。

マイセンの學校に在るや、駿馬と稱せられ、大學に進むや、梨園に出入し、俳優と交はり、負債の深淵に沈みてライプチヒを逃れ、カッテンベルグに赴き、留まること僅かに四ヶ月、又も債鬼に迫まられて、伯林に逃げ、父に乞ひて金を得し時、先づ購求せしは、新調の衣服なり。レッシングは、學者にして、同時に實際家たるを望めり。終生蠶魚となつて、圖書堆裏の人となるを欲せず、他日飛鳥となり、實世界の事に携はらんことを願ひたり。

レッシングは、「ハムブルギッシュ・ド라마ーツルギー」の結末に自遜して曰はく、余は批評家なり、詩人に非ずと、されど「ミンナ」の作、如何て非詩人の手に成る可き、レッシングは詩人なり。

レッシングは、熱心なる真理の討究者なり。一理を極めんとする時は、間斷なく之に向かひ、猶豫逡巡事を半途にして廢するを欲せず、萬事究極に到達せんことを願ひたり。而して彼が真理を討究せしは、真理を捕へて、満足せんが爲めに非ずして、真理を捕へんとする間に、大なる愉快を感じたるなり。故に一、真理を極むとも、決して安心せず、更に他の方面に向つて勇往邁進したり。かゝれば彼は、性來討究家の資格を備へ、希有の批評的天才を有したるなり。彼の明腦は、能く雜亂紛糾せる事情を裁決し、苟くも欠點あれば、之を暴露せずんば己まざりき。レッシングは、銳利なる觀察力と、綜合的の才とを有したり。世には往々判斷力に富める人、組織的の才に乏しく、組織的の才ある人、觀察力欠くるが如し。レッシングの

第四編

新南國總督時代の文學(宗教改革より現代迄)

(クラウシテスマス及びロマンテイスミス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クラウシテスマス。第四章 レッシング

如きは一人にして兩者を兼有するものと云うて可なり、されどレッシングは富贍なる想像と、筆端雲烟を生ずるが如き詩才を有せず、創作の際には、他の作家に比して長き日月を要したり、彼が抒情的詩才なきは、當然の事と云ふ可し。

レッシングは、批評により、劇界の改良を成し、遂げ、獨逸演劇の特色を發揮して、其根底を固め、創作により、劇詩の模範を示し、美學を應用して、創作と批評との關係を明かにし、獨逸詩歌の隆興を促がし、獨逸文學に絶大の影響を及ぼしたり。

レッシングは、二大詩人ゲーテ、シルレルの爲めに、進む可き道と、活動す可き舞台とを建設したり、ゲーテ、シルレルが、レッシングの鴻恩に浴せることは夥しと云ふ可し。

近世の哲學史家クノー、フィッシャーは、(イ)「獨逸文學の改革者レッシング」の書を著して、レッシングの文學上の功勳を賞揚せり、レッシングが十八世紀の三偉人として、フリードリッヒ大王、イムマヌエル、カントと并稱せら

るゝも故なきにあらざるなり。

(1) ゴットホルド、エフライム、レッシングは、千七百二十九年一月廿二日、ザクセン國オーベルラウジツ縣のカイメンツ市に生まる、父をヨハン、ゴットフリード、レッシングと云ふ、敬神の心深くして、學殖高き牧師なり、父ゴットフリード、レッシングに、十人の男子と二人の女子と合せて十二人の子あり、而してエフライム、レッシングは、其長男にてありき、レッシングは、幼時より言行舉動他の童子と異なり、就中彼が七才の時、父に乞ひて、書冊を積み、自から其傍に座し、書工をして之を寫さしめしと云ふ如きは、文豪の逸話として長く後人に記憶せらる。

千七百四十一年レッシングが十一歳の時、父は彼をマイセン市のサンクト、アフラ小學校に送れり、彼は才氣衆に優ぐれ、萬事人に後るゝを好まず、同級學生間に異彩を放ち、神童を以て目せられたり、校長グラーパーベチルは、其敏慧を愛し、彼を呼んで、駿馬と云ひ、鞭つをも、亦手綱にて導くをも要せず、只秣ふこと、常馬に倍す可しと云へり、かくの如くなれば、全窓

の友が刻苦して尙解する能はざることも、彼には極めて容易の事なりき。レッシングは此頃より希羅の古語を熱心に學びしも、言語は古人の著書を読むの手段と考へ、學者たるものは、數學、哲學、自然科學の智識を要すとなし、就中最も數學を好み、ユークリッドの數學書を翻譯したり。

レッシングは、數學、哲學等の乾燥なる玄理を極むると共に、義理人情の赴く所をも喜んで觀察したり、されば、ハーゲドルン、グライム及びハルレルの作は、彼の愛讀書なりき、殊にハルレルの作を讀みては、詩歌の趣味を感じたること多しと云ふ。

學校にあること六年餘、當時十七才の少年は、マイセンの閑靜なる學窓の下に、希臘詩人テオフラスト、羅馬喜劇詩人プラウツス、テレンツ等の作をも繕きたり、かくして劇詩の研鑽漸く積みしかば、彼は喜劇「青年學者」デル、ユンゲ、ゲレールテを試むるに至り、二年を経て成れり。

千七百四十六年レッシングは、マイセンを去り、全年ライプチヒ大學に入れり、始めは父の望に従ひ、神學を學びしも、性來好まざるものなれば、

忽ちにして轉じて醫學を學びたり、されど固より刀圭家を以て世に立たんと欲せしに非ず、言語學及び詩歌學を研究するに至れり、レッシングは、大學に在りし頃より、大に演劇を好み、三度の食事は、固き麴麩に甘んずるも、芝居見物は、嘗て疲する能はざりき、されば、レッシングは、大學專問の教授を訪問せずして、梨園社會に友を求め、日々劇場に赴きたり、一日彼は友人に語りて曰はく、余は大學の講義にて、幾度聞くと、解する能はざる事にして、然かも劇詩に最も重要な數百箇條を劇場に學べりと、レッシングは、又嘗てゴットシッドと謀つて、演劇改良を企てし、女優の長ノイベルと相識り、爲めに佛の劇詩を譯して、木戸御免を得んとし、友人ミリュスにより此願を達したり、ノイベル一座が、彼の處女作「デル、ユンゲ、ゲレールテ」を演じて、喝采を博せしかば、レッシングは、愈興に乗じ、自から俳優となり、自作を演ぜんと欲するに至れり、此女優の長ノイベルとは、演劇に關し二箇の定見を有し、所謂話せる女なりき。

かくと傳へ聞きしレッシングの父は、大に驚いて、千七百四十八年彼を

第四編

新南國連邦時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クワシナスマス及びロマンタイスマス。千七百四十八年より千七百四十八年迄。)○クワシナスマス。第四編、レッシング。

ライプチヒより呼び戻せり。されど父は子の品性の害はれざるを見且つ科學的才藝の熟達せるを知り、神學をやめて専ら醫學及び言語學を修むることを許可したり。

レッシングが當時ライプチヒにて交はりしは、哲學者ケストナル、詩人ヨハン、アドルフ、シュレーゲル、ツアハリエ及び劇通の仲間クリスティアン、フェリックス、ツイセ等なり。されど彼が最も信頼せし友は、ミリュスなり。ミリュスは學問に忠實にして、文學の趣味に富みたる人なりき。

レッシングは父の許可を得て、再びライプチヒに來るや、劇場に入ることは依然として變ぜざりき。さて此無邪氣なる青年は、知らず／＼狡猾なる二三の俳優に欺かれ、借金の保證人となり、債主に責められ、遂にライプチヒを去り、カッテンベルグに逃げたり。然るに著後間もなく大患に罹り、病床に苦吟せり。此頃母の許に送りし手紙に「人の生命は、重荷なり」と書したるを見れば、如何に彼が既往の事を考へ、人間處生の道に就き、煩悶せしかを察す可し。カッテンベルグに至るも、尙債鬼に責め立てられ、

長く留まる能はず、遂に學を廢するの已むを得ざるに至りたり。親友ミリュスは、當時伯林にありて、學術雜誌「ベルリニシニ、ブリギレギールテン、シタートツ、ウンド、ケレールテン、ツァイツング」の發行人となれり。

茲に於てレッシングは、友人の家に寄寓して麵麩を求め、傍ら負債償却の方法を講せんと欲し、千七百四十八年の十二月寒威凜烈の夕、胸中には、獨立自活の大希望を貯へしも、懷中は風の寒さよりも一層寒さを感じつゝ、飄然伯林に入れり。さて此廣き大都會の中知れるは、唯一人のミリュスのみなり。此時のレッシングは、如何に心細かりしならん。

レッシングは、伯林に達するや、細々の懇請書を認めて家に贈り、若干の金を得、之に翻譯にて得し僅かの金を加へ、先づ衣服を新調したり。此時父に與へし送金の謝狀に曰はく「兒今は貧づしと雖も、貧づしとして人前を憚かることはなす可からず、御惠送の金にて、早速衣服を買ひ求め、世に立ち人と交はり、人の務を盡す考に御座候」と。蓋し衣服を新調せしは、實際社會に立たんと考ありしを以てなり。レッシングは、此苦境に在り

ても決して父母を忘れず、孝養の志絶えざりき。

かくする中に、レッシングは、ミリュスと共に年四回發刊の雑誌にして、劇詩、劇場の消息を傳へたる『バイトレーゲ、ツール、ヒストリー、エ、ウ、ンド、アウフナー、メ、デス、テアーテルス』を創刊したり。かく文學雜誌に筆を執りし間に、レッシングの批評眼は、大に進歩したり。

暫くして萊府學派と瑞西學派との論戰始まり、レッシングは『最近文學に關する書簡』に於て、盛にゴットシェツドを痛罵せしかば、ゴットシェツドは、大に其論難攻撃に避易したりしと云ふ。此頃成りし作にて喜劇『デル、フライガイスト』、『ディ、ユー、デン』等あり。

レッシングは、多年衣食の爲めに筆を執り、學問の中絶したるを憂ひ、奮然ハッテンベルグに至り、留まること僅かに一年なりしも、非常なる勵精を以て、終に『マギステル、デル、フライエン、キムステ』の學位を得たり。千七百五十二年伯林に歸り、依然として雜誌に筆を執れり、論文を草する傍ら、英語、西班牙語を學び、英、西の文を翻譯し、節儉自ら持し、小弟を補助し、

たり。レッシングが佛の文豪ボルテールと會合せしは、此頃の事なり。かくして名望漸く高かりしが、彼は論文を集めて、小冊六卷となし父に贈る。父は之を得て大に喜びたり。

レッシングは、千七百五十三年の始め、ミリュス及び其他の友人と手を分かち、ボツダムの山莊に入週間引き籠れり。此閑靜なる地に於て、彼は嘗て試みんとして其時を得ざりし戯曲を作ることに従事したり。此時に成りしは、悲劇『ミス、サラ、サムブソン』なり。此悲劇は、千七百五十五年にフランクフルト、アン、デル、オーデルに於て演ぜられ、好評を博したり。此作の名世上に喧傳すると共に、レッシングは、芝居を見んとの念抑へ難し。されどフリードリヒ大王は、萬事佛國風を好みしかば、獨逸固有の劇は帝都の劇場に演ずることを禁じたり。依つてレッシングは、伯林に行くを好まずして萊府に赴けり。萊府には、彼が舊知の友コッホが私立の劇場を設けしかば、レッシングは、此劇場に至り、學生時代と全しく俳優と交はり、ワイセが簡約したる『ミス、サラ、サムブソン』を自から演じたりと云

第四編

新南獨逸語時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クウンテスマス及びロマンタイスマス。千七百四十八年より千七百四十八年迄。) ○クワラシテスマス。 第四章 レッシング

ふ。

此頃萊府に富豪の子あり、三年間歐洲漫遊を企て、レッシングに同行を求めしかば、レッシングは欣喜措く能はず、旅装未だ全からざるに、相伴うて、先づ和蘭の都アムステルダムに行き、古來有名なる國內の都市を巡覽したり。此時代は、交通機關開けず、萊府よりアムステルダムに行くに八十余日を要せしと云ふ。二人は海路將に英國に向はんとす。此時フリドドリヒ大王軍を發して、ザクセンに攻め入りたりとの飛報傳はり、二人は折角の旅行をやめて萊府に引き還へせり。彼等は再遊を約せしも、遂に果さざりしが、これレッシングが終生の遺憾とする所なり。

旅行を半途にして已め歸るや、レッシングは、再び麵包の爲めに筆を執れり。友人は彼が爲めに職を伯林に求めしも得られざりき。レッシングは、『春』(フワーリング)の詩にて名高きエーワルド、フォン、クライストと親交あり。クライストが筆を投じて、七年戦争に従軍し、名譽の戦死を遂げし時、レッシングは大に痛嘆したり。此頃悲劇『クレオニス』成れり。

千七百五十八年五月レッシングは伯林に歸り、友人の歓迎を受けたり。友人ニコライ及びメンデルスゾーンの助を借り、『最近文學に關する書簡』を出版し、ラムレルと共にローガウの詩の抜萃をなしたり。又悲劇『フィオタス』を書かんとせしが完成せざりき。

レッシングは、友人に告ぐるることなく、一日忽然として伯林を去れり。而してタウエンチェン將軍の許に至り、秘書官となれり。レッシングが將軍と相識りしは、嘗て屢親友クライストの家にて相會せしを以てなり。千七百六十年より六十四年に亘る五年間此職にありて、プレスラウに住居したり。此間レッシングは、無事書冊を友とせしかば、『ミンナ』『ラオコオン』等の名著に筆を執るの機會を得たり。『ラオコオン』は、レッシングが秘書官を辭せし翌々年即ち千七百六十六年に成り、『ミンナ』は、其翌年を以て世に公にせられたり。

レッシングは、プレスラウを去り伯林に歸るや、生計再び裕ならず、一日も文筆を投ずる能はざりき。當時伯林の帝國圖書館に空位ありしかば、

第四編

新南國邊野時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クワシチヌス、ムス及びロマンティスムス、千七百四十八年より千七百四十八年迄) ○クワシチヌス、ムス、第四章、レッシング。

諸人争うてレッシングを、フリードリヒ大王に奏請せしも、大王は其言を用ゐず、無識無名なる佛人を採用したり。之を聞きし當年四十歳の文豪は、大に落膽したり。

此時に當りハムブルグの國立劇場の監督者は、レッシングを、座附作者(テアーテルディヒテル)として、招聘せんとせしが、レッシングは之を辭し、更に演劇批評家(テアーテルクリティケル)として任に赴けり。時に千七百六十七年四月なり。此職にありし間に成りしもの、これ即ち「ハムブルギッシェ・ドラマ・ツルギー」なり。

ハムブルグに至り、始めの程は、レッシング大に得意なりしも、暫くして其望は絶えたり。觀客の思想は、幼稚にして、劇詩の眞意を解せず。俳優は、レッシングの意見を奉ずる丈の度量眼識を有せず、且つや座主はレッシングに給料を拂ふ能はざりき、かくして漸く順境に向ひしレッシングの運は、再び反對の方向を取れり。

既にしてハルレ大學の教授にて、言語學者を以て自負したるクロッツ

とレッシングとの論争始まれり。レッシングは「ブリーフ・ファン・タイクワ・ワ・リッピン・エン・イン・ハルツ」を書きて、大にクロッツの高慢なるを嘲けり。學識の淺狭なるを冷評したり。

レッシングは、精神療養の爲め、伊太利に旅行せん事を企てしも、資力なくして能はざりき、かくして落魄多年、快々として樂まざりしが、圖らずも、寡婦エワケーニヒに思をかけ、許嫁の後六年を経て遂に結婚したり。

此頃ブラウンシュワイヒ侯の太子は、レッシングを聘して、ラルフェンビュッテルの圖書館長たらしむ。俸給僅かに六百ターレルにして、ラルフェンビュッテルは、交通不便なる寂寞の小都會なりしかば、此職はレッシングに取りて、左程名譽の地位にあらざりき。

レッシングは、招かれてラルフェンビュッテルに至るや、世を離れ、人と晤らず、閑居讀書に日を送り、藏書萬卷を読み盡さんとせり。千七百七十二年三大傑作の一たる悲劇「エミリア・ガロツティ」を作り、翌年「ツール、ゲシヒテ、

第四編

新南獨逸語時代の文學(宗教改革より現代迄)

(クラウシテスマス及びロマンテイスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラウシテスマス。第四編、レッシング。

ウンド、リテラツール』を出せり。

千七百七十五年レッシングの宿志は遂げられたり。王子レオポルドは、図書館長を伴ひて伊太利に遊べり。レッシングは旅行の途次維也納に於て、久しく分かれしエツと會合し、互に安否を問ひ、伊太利より歸り、千七百七十六年遂に結婚したり。されど鴛鴦の契は、短か夜の夢にして、却て彼の爲めに仇となれり。結婚後間もなく、俸給は二百ターレルを増し、夫婦は交情濃かなる生活を送りしが、結婚の翌年耶蘇降誕祭の前夜エツは男子を分娩したり。然るに不幸にも此子は、翌朝に至りて死せり。エツは産後身軀大に衰弱し、翌年一月十日遂に産兒の跡を追うて、冥途の客となれり。

妻を失ひ、子に分かれ、レッシングは、益々鬱々として、樂まざりしも、學問は依然として怠らず、ハムブルグにて死せしライマールス教授の遺稿を出版することに盡力したり。これ『フラグメント、デス、ラルフェンビュットレル、ウンゲナントエン』と題する書なり。

不平、失望、落膽は、聊かも大批評家の勇氣を損せず、レッシングはハムブルグの牧師ゲーツェの説、意に滿たず、忽ちにして、盛なる論争を始め、『アン・テイ、ゲーツェ』を書きて、大に攻撃せり。

千七百七十九年レッシングの作として、最も著名なる且つ獨逸文學の大傑作の一たる劇詩『ナータン、デル、ワイゼ』出で、翌年論文(ロ)『エルチー・フング、デス、メンシエンゲシユレヒツ』出でたり。

かく老いて、益頭腦の健全を證したる詩人も、身軀漸く意の如くならざるに至れり。ハムブルグに行き、ブラウンシュワイヒに行き、保養怠なかりしも、視力さへ衰へて、千七百八十一年二月十五日ブラウンシュワイヒに於て些細の打傷を受け、遂に黄泉の客となりぬ。

清貧自から安んじたる文人の家は、赤貧洗ふが如し。ブラウンシュワイヒ侯は、其末路を憐み、國葬を以て、遺骸を埋葬したり。千八百五十三年彫刻家リーチエルの案に成りし立像は、詩人臨終の地ブラウンシュワイヒに建設さる。其碑文は、語簡なりと雖も、能く詩人の功勳を不朽ならしむ。

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クワシチスミス及びロマンチスミス。千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クワシチスミス。 第四章 レッシング。

(ハ)

デム、グロッセン、デンケル、ウン、ド、ディヒテル、ダス、ドイッ
チ、ファーテルランド。

二六八

○主要なる著作評論。

レッシングは、創作の才敢て人後に落ちずと雖も、其本領は批評に在り、レッシングを論ぜんには、先づ批評的作品より始む可きなり、批評的作品を論ぜんには、先づレッシングの批評に於ける態度を知るの要あり。

曰はく、レッシングの批評は、不偏不黨なり、世の所謂批評は、多くば、全黨異伐の弊を免がれず、ゴットシエツド對ポードメルの争の如きも、學術上の論争と云はんよりは、寧ろ學派の討論なりき、然るにレッシングは、大に其非なるを悟り、偏せず黨せず、美學の法則により、學理と實際との二方面より、當時の文藝を批評したり、ゴットシエツドを評する言稍奇矯にして、峻刻に失する所あり、且つ詩歌の本體及び價值に關する意見は、瑞西派に左袒する觀ありと雖も、批評には、毫も情實を交へず、情致雅趣に乏しきゴットシエツドを誹謗すると等しく、ポードメルの詩才の足らざるを罵り、

且つ其欠點を指隨したり、ポルテールを痛罵、熱嘲するは、伯林滯在中の私怨を報ずるなりと云ふ人あれども、恐らくば、これ邪推なり、此反證として見るべきは、親交ありしグライム、ワイセ及びクライストの作をも、忌憚なく批評したることなり、レッシングは、性來追従を好まず、善を善とし、惡を惡とするの人なり、理性を以て何處迄も推し通さんとするの人なりき。

曰はく、レッシングの批評は、消極的に非ずして、積極的なり、破壊的に非ずして、建設的なり、學派の争又は普通の批評に於ては、批評とは、短所を指隨するの異名なるが如し、レッシングの批評は大に然らず、作の短所を暴ばくと共に、能く其長所をも擧げたり、其批評の目的は、長短相補ありあり、されど其筆法時として、余り激烈なるを以て、レッシングと云へば、破壊的批評家の如く考ふるものあれど、これ誤解なり、レッシングの批評は、欠點のみを擧げて、其作を打破するに非ずして、長所短所共に之を列擧して、作者に反省を求めたるなり。

第四編

新南國通譯時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラウシテスマス及びロマンテイスムス、千七百四十八年より千
八百四十八年迄) ○クラウシテスマス、 第四章 レッシング。

二六九

曰はく、レッシングは平凡なる作家を相手とせず、中流の作家には、時として警戒を加へ、大文豪には畢生の力を振うて大打撃を加へたり。これレッシングが文藝批評の主義にして、幼稚なる新進作家を冷評する凡俗の批評家とは、全日の論にあちざるなり。

曰はく、レッシングは、文藝批評に就き、三大綱領を有したり。第一、著作は、其想果して、能く詩歌の真相に合へりや。第二、此想を取扱ふの法、能く獨逸國民の感情思想に適するや。第三、著作は其想、其形能く融化して、善美の一完體をなし、其中自から法則ありて、能く組織を構成するや。

レッシングが、文藝批評に於ける態度、夫れ斯くの如し、其用意の周到なる、著眼の高尙なる、優に一世の大批評家たるの資格を備ふるものと云ふ可し。

『最近文學に關する書簡』ブリーフェン、ディ、ノイエー、リテラトゥール、ベトレッフェンド、通稱ニ、リテラトゥールブリーフェン

これレッシングが、友人ニコライ、メンデルスゾーンと共に、伯林に於て

發刊したる當代文學の評論なり。文章書簡の體をなせるを以て、此名あり。書中載する所の書簡の總數百二十七、千七百五十九年一月四日を以て始まり、翌年十二月廿五日の書簡を最終となす。

書簡第八に於て、レッシングは、ホーランドが、其著『耶穌教徒の感情』に於て、詩歌と宗教とを混同せるの非を難じ、詩歌は、常に宗教的感情に依るものに非ずと云ひ、ホーランドが、宗教的感情を詩的に解釋せるを見て、横溢せる想像を以て、感情となすか、想像の働く所、眞の心は空且冷なりと喝破せり。ホーランドは嘗てウィットの人物を攻撃したる事あり。レッシングは、固よりウィットの徳性に感服せしかば、ホーランドの書は、高德の君子を中傷するものとなし、大打撃を加へたり。

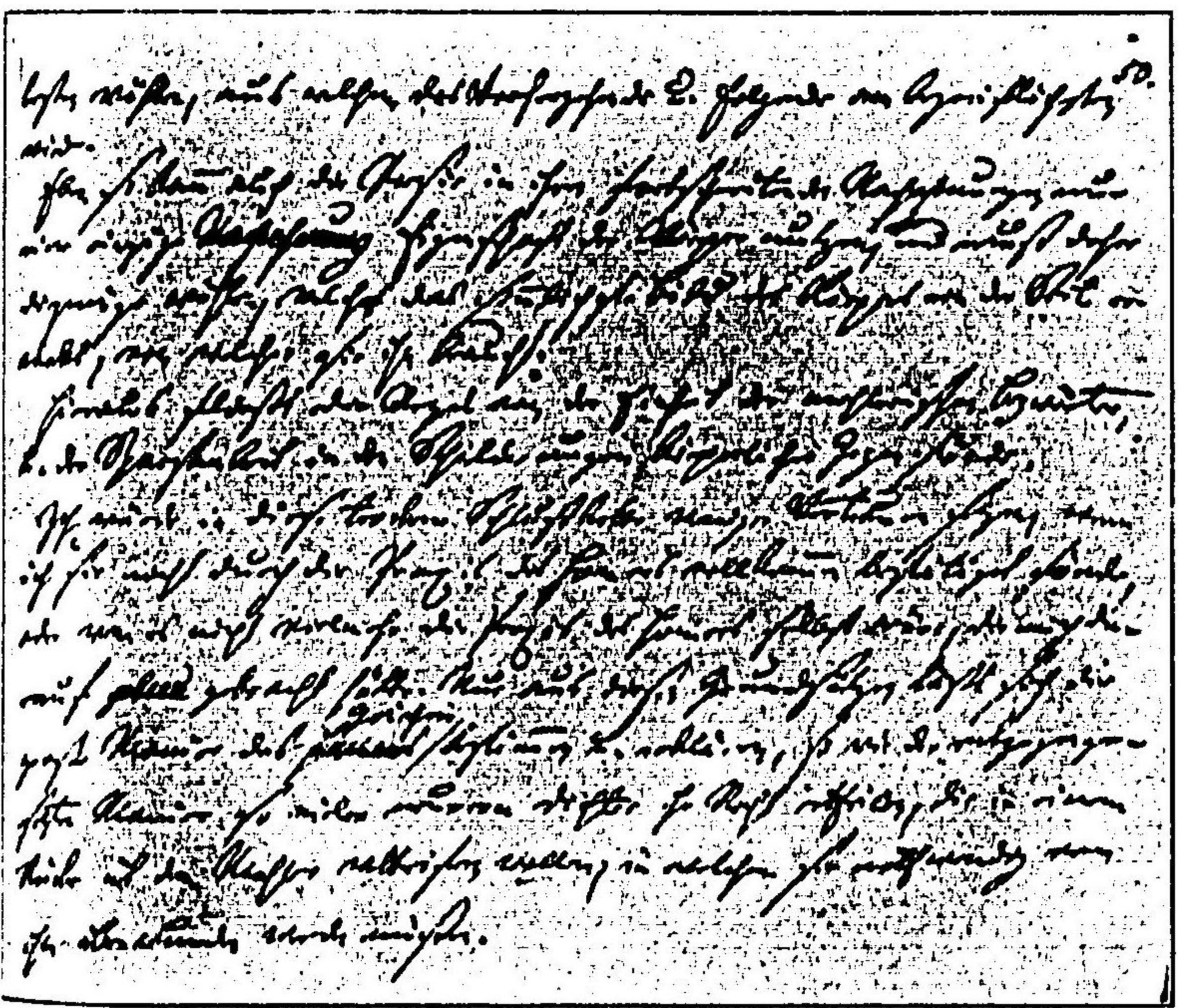
書簡第十七は、書簡中最も有名なるものにして、レッシングの文學書簡と云へば、直ちに此書簡を聯想せしむ。そは評論中語氣最も鋭くして、且つ最も奇抜なる語辭を用ゐると、ゴットシツドを半文の價値なきが如く罵倒せることが、後人の意向に投じたるによれり。レッシングは文學雜誌

文學書簡

(ホ) 『ビプリオテーク』の記者が、獨逸劇の改良は、ゴットシェットに謝する所多し、此事は何人も否定せざる可しと云へるに對して、余は其『何人』(ニーマンド)なりと絶叫せり。此『ニーマンド』の一語は頗るゴットシェットの膽を寒からしめたる語にして、局外者より考ふるも、或は峻刻に失するの譏を免かれずと雖も、痛快なる此一言は、一度文學書簡を讀む者をして、覺へず、書簡第十七の最初の數行を暗誦せしむるに至る。レッシングは、語を續けて云へり、獨逸從來の劇が、鄙猥にして、沒理なる事は、何人も容易に之を知れり、必ずしもゴットシェットを俟たざるなり、然るにゴットシェットは、獨逸劇の改良者を以て自任し、且つ新演劇の創立者たらんと欲したり、而して其所謂新演劇とは、佛蘭西劇の輸入なり、ゴットシェットの佛語の素養は、極めて淺薄なり、然るに大膽にも佛詩の翻譯を始め、のみならず苟も『ウイ、モッシュー』を知るものには翻譯を勸めたり、而して彼が自作と誇稱する『ステルベンデル、カトー』の一曲は、瑞西の批評家が云へる如く、『糊と鉄』とを以て綴り合せたるものに過ぎずと。

レッシングは、著作が、獨逸國民の性情に適へるや否やを以て、批判の綱領となし、獨人は佛人によりも、英人の嗜好に傾けることを看破したりしかば、佛詩は全然之を否定したり、これゴットシェットとレッシングとが、其説に於て氷炭相容れざる所以なり。

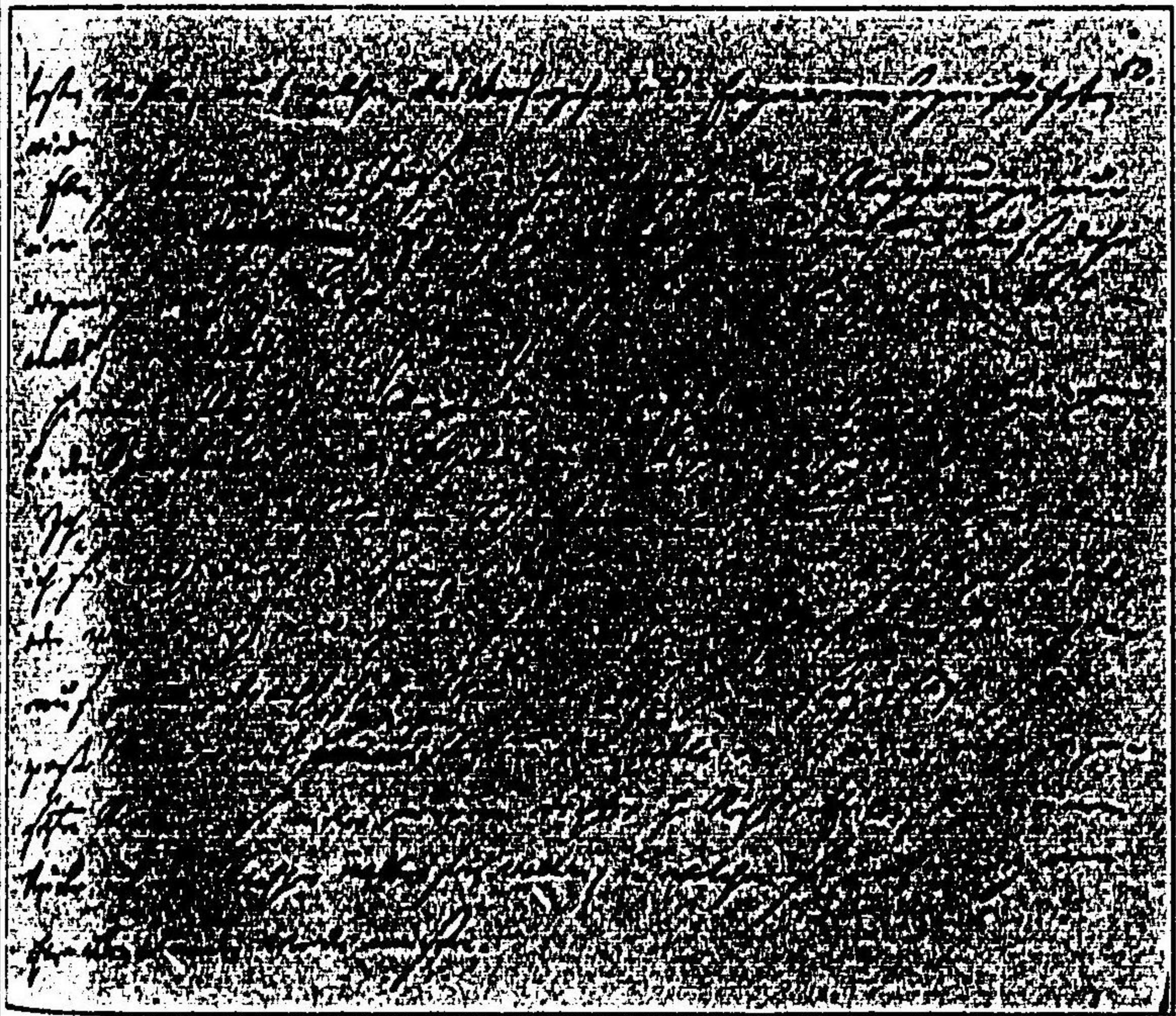
レッシングは、謂へらく、ゴットシェットがアディソンの『カトー』を英悲劇の上乗となせしは、其肉を食ふて、其骸を食はざるものなり、且つ佛人の見解を以て、劇詩を見たるものなり、シェイクスピア、ジョンソン、プレッチャー、ボームント等の作を知らずして、獨りアディソンを賞揚す、其迂も亦甚しと。レッシングは、更に論及して云へり、ゴットシェットは、佛のコルチイユ、ラシニス等を獨人に紹介し、其作を以て、古人の作に劣らずと賞賛せり、されど此等二人の作は、單に形式に於て、古希の作に倣ふのみ、ゴットシェットは、外形の美に垂涎して、未だ其内容の如何を察せざるなり、シェイクスピアは、大に然らず、其作の結構は、よし古人に遠ざかるとも、詩の眞髓は、古人に逼り、悲劇の眞相に達せり、ソフオクレスの作『ケーニヒ、エディプス』の後、吾



高雅にして、簡潔、沈静にして偉大なる所あるは、希臘彫刻の特質なり之を譬へんに、海面浩濤澎湃として、天に漲る時と雖も、千尋の海底は微動だも感ぜざるが如く、希臘彫刻は、肉躰苦痛の極度を現はさんとするに際しても、人物の顔面は、決して相貌を崩さず、容姿沈着なり、此精神の最も能く發揮せるは、ラオコオン彫刻なりと。

これ蓋し、フンケルマンの卓見にして、古代彫刻の鑑識に一新軌軸を出したるものなり。

さてかく論じたるフンケルマンは、二箇の誤謬をなせり、一方に於ては、彫刻と繪畫との限界を置かざること、他方に於ては、彫刻、繪畫と詩歌とは、其範圍に差別なしとなせること之なり、第一の誤謬は、本論に關係なきを以て姑く措かん、第二の誤謬は、則ちレッシングの反對論起る所なり、フンケルマンは、繪畫と詩歌とは、範圍に限界なしとし、詩人と畫家とは、全一範圍内に働けるものとせり、語を換へて云へば、詩歌の描がく所は、悉く繪畫の寫し能ふものとなせり。



高雅にして、簡潔、沈靜にして偉大なる所あるは、希臘彫刻の特質なり、之を譬へんに、海面浩濤澎湃として、天に漲る時と雖も、千尋の海底は微動だも感ぜざるが如く、希臘彫刻は、肉躰苦痛の極度を現はさんとするに際しても、人物の顔面は、決して相貌を崩さず、容姿沈着なり、此精神の最も能く發揮せるは、ラオコオン彫刻なりと。

これ蓋し、カンケルマンの卓見にして、古代彫刻の鑑識に一新軌軸を出したるものなり。

さてかく論じたるカンケルマンは、二箇の誤謬をなせり、一方に於ては、彫刻と繪畫との限界を置かざること、他方に於ては、彫刻、繪畫と詩歌とは、其範圍に差別なしとなせること之なり、第一の誤謬は、本論に關係なきを以て姑く措かん、第二の誤謬は、則ちレッシングの反對論起る所なり、カンケルマンは、繪畫と詩歌とは、範圍に限界なしとし、詩人と畫家とは、全一範圍内に働けるものとせり、語を換へて云へば、詩歌の描がく所は、悉く繪畫の寫し能ふものとなせり。

此説はフンケルマンが、瑞西派の人たることを證するものにして、ポドメル、プライティンゲル等も、全一説を主張したり。

當時又レッシングが、『希臘のポルテール』なる綽名を與へしシモニデスが唱へたる『詩歌は有聲の繪畫なり、繪畫は無聲の詩歌なり』との説、批評家間に動かす可からざる勢力を有し、皆此奇警なる古語を奉じて、繪畫詩歌兩者の差異を看過し、甚しきに至りては、詩を以て畫の狹隘なる範圍内に介在せしめんとせり。

古來金科玉際と尊まれしシモニデスの名説を破り、フンケルマンの謬見を指摘して、更に一頭地を拔きたる卓論をなせしは、レッシングなり。議論の端を、ラオコオン彫刻に發し、詩歌と繪畫との限界に論及せしを以て、ラオコオン論即ち『詩歌と繪畫との限界に就きて』の名起る。

ラオコオン論は、古來の説を打破したるに止まらず、當代の批評家が看過せし詩歌と繪畫との範圍を明かにし、詩歌が美術中の最高等なるものたることを立論したるものなり、美術を稱して、建築彫刻繪畫音樂

詩歌の五種とし、詩歌を美術の第一位に置くは、蓋し此論に起因せるならん。ラオコオン論の起源斯くの如し。

ラオコオンとは何ぞや、希軍は、トロヤ城を圍んで曠日彌久、將に十年ならんとす、然かも、容易に攻め落す能はざるなり、茲に於て詭計をめぐらし、圍を解きて本國に退軍せんとする狀を示して、トロヤ人を欺き、去るに臨んで、巨大なる木馬を殘し置けり、此馬の中に潜むは、勇敢なる兵士なり、城中の兵は、希軍の退却するを望見して、大に喜び、防禦に倦みし軍兵は、城を出て、城外の廣野に赴けり、一卒あり、木馬を原野に發見す、他の兵士等來りて此周圍に集まり、種々の臆説を下せり、時にアポロ神の僭ラオコオンは、急ぎ群衆を排して來り、鎗を以て、馬腹を突けり、鎗の尖頭甲冑に觸れて、鏘然の響をなせり、希軍の計器は將に發覺せんとす、然るにシノンと云へる希軍の間者あり、自から希軍に怨ありと稱して、トロヤ陣中に來れり、密計の暴露せんとするを見るや、忽ちトロヤ王の許に至り、かの木馬は、トロヤの守護神パラス、アテー子の供物なり、か

の馬は、トロヤ人に幸福を授く可しと告ぐ。此言未だ終らざるに、忽ち二つの大蛇海を渡つて來り、ラオコオンが、アポロ神の祭壇に供物を捧げんとせる時、其二人の男子と共に捲き殺るせり。

トロヤ人は之を以て、パラス、アテーネの怒にして、神罰なりと信じたり。されば城壁の一部を壊ちて、巨大なる木馬を城中に引き込み、即夜トロヤは落城したり。これラオコオン彫刻の山來にして、此傳説は又ギルギールの詩に依つて傳へらる。

ラオコオン彫刻は、久しく地中に埋もれしが、千五百六六年に至り發掘されたり。伊太利の大彫刻家ミケランジェロは、父ラオコオンの右腕の破損せしを修理せんと企てしも果さざりき。ミケランジェロの考によれば、ラオコオンは、苦痛に堪へず、且つは驚きて、右腕を頭に觸れ、力なげに天を睨めるものとせり。然るに此修理者モントルソリは、ミケランジェロの説を用ゐず、自分一箇の考にて、今日吾人が見る如く、右手蛇身を捕へて、高く之を頭上に捧ぐるものとせり。これ極めて背理なりとして、後人の

非難を受くる所なり。ラオコオンは、此瞬間に於て蛇身を捕ふるの勇なく、又之を頭上に捧ぐるに足る力を有せざるなり。若し此勇此力ありとせば、此彫刻は、統一を缺くものにして、美術品たるの價値を没し、瞬間の選擇宜しきを得ざることゝならん。

此彫刻は、千七百九十六年一時佛國に持ら來りしも、千八百十五年再び羅馬府のグライカン宮に還付さる。

ラオコオン彫刻の目的とする所は、同一瞬間に於ける苦痛の三階級を現はさんとするに在り。左側の弟は、將に苦まんとし、右側の兄は、苦の極に達して知覺を失ひ、父は其中間の態度を取り、今や苦の眞最中なり。一蛇は頭を振つて、父の左腹を襲へり、父は左側の苦痛に堪へずして、烈しく右方に傾き、神の祭壇に倒れかゝれり。筋肉膨くれ、血は漲り、氣息逼り、下腹は引きつり、思はず頭を上げ、凄じき目を以て天を睨み、顔容は深き苦悶の狀を浮べ、唇は稍々開きて、呻吟の微聲を洩らせり。

ギンケルマンが、ギルギールの詩と、ラオコオン彫刻との差別を發見

したるに就いては、レッシングも敢て不同意を唱へざるなり。さらば、**フンケルマン**と**レッシング**とは如何にして説を異にするや、直ちに本論に入りて之を論ぜん。

ラオコオン論の本論。 **フンケルマン**は、**ラオコオン**彫刻と**ギルギールの詩**とを比較して、其差異を指摘し、彫刻の**ラオコオン**は沈静にして、纒かに嘆息の聲を發するに、詩中の**ラオコオン**は大聲を發して悲鳴せり。とて、大に**ギルギール**を難じたり。茲に於て**レッシング**は反對せり。曰はく、これ**シモニデス**の古説を奉ずるもの、言なり。詩歌と彫刻とを全一視し、彫刻と詩歌との重要なる限界を看過したるものなり。詩歌と彫刻とは、各獨特の原則に依れることを察せざるなり。彫刻は「美」を目的とす。彫刻の**ラオコオン**が苦痛の叫を制して、纒かに其口を開くは、人格の高尙なることを示さんが爲めに非ず。彫刻の性質上然るなり。ギルギールの詩に於ける大聲の悲鳴大に宜し。彫刻に於ける呻吟の微息を發するも、亦大に宜し。 **フンケルマン**の説大に當らずと、更に彫刻と詩歌との限



フンケルマン

したるに就いては、レッシングも敢て不同意を唱へざるなり。さらば、非ンケルマンとレッシングとは、如何にして説を異にするや、直ちに本論に入りて之を論ぜん。

ラオコオン論の本論　非ンケルマンは、ラオコオン彫刻と非ルギールの詩とを比較して、其差異を指摘し、彫刻のラオコオンは、沈靜にして、縦かに嘆息の聲を發するに、詩中のラオコオンは、大聲を發して悲鳴せりとして、大に非ルギールを難じたり。茲に於てレッシングは反對せり。曰はく、これシモニデスの古説を奉ずるもの、言なり。詩歌と彫刻とを全一視し、彫刻と詩歌との重要な限界を看過したるものなり。詩歌と彫刻とは、各獨特の原則に依れることを察せざるなり。彫刻は、『美』を目的とす、彫刻のラオコオンが、苦痛の叫を制して、縦かに其口を開くは、人格の高尙なることを示さんが爲めに非ず、彫刻の性質上然るなり。非ルギールの詩に於ける大聲の悲鳴大に宜し、彫刻に於ける呻吟の微息を發するも、亦大に宜し。非ンケルマンの説大に當らずと更に彫刻と詩歌との限



ン マ ル ケ ン 井

界線を劃して曰はく、詩歌と彫刻とは、決して同一視すべきものに非ず、詩歌は時間的美術なり、彫刻は空間的美術なり、詩歌は相前後して、耳に傳はるものにして、彫刻は相並んで目に映ずるものなり、彫刻は、空間に束縛を受けずと雖も、時間に制限され、詩歌は時間に拘束さるゝなしと雖も、空間的に自由ならず、彫刻者は、連続せる動作中の一瞬間を選ばざる可からず、而して其瞬間の動作を一形態として實現す可きなり、詩人は、之に反して、連続せる動作を終始一貫して、寫さざる可からず、而して動作により、一形態を讀者の想像に浮ばしむ可し。

彫刻者の巧拙は、一に此瞬間の選び方に在り、而して瞬間を選ぶには、觀者に想像を運らす可き餘地を與へざる可からず、依つて動作中の極點に達したる瞬間を選ばずして、極點に到らんとする前一瞬間を選ぶ可きなり、何となれば、既に極點に達する時は、觀者は想像を運らすの餘地を有せざるなり、且つ彫刻は、詩歌と異なり、其表出する所一瞬時に限れるを以て、極點の瞬間を現はす時は、想像の餘地なきのみならず、之を

見ること屢なる時は、漸次之に對する感動を減殺す可し。殊にラオコエ
ンの如く、悲鳴痛哭せる顔貌を現はすに、其極度の瞬間を以てせば、口を
開くこと大なるが爲めに、觀者をして、其苦痛に全情を表せしめんより
は、却て不快の感を起さしむ可し。かくては彫刻の最高の目的たる「美」
を損ず可し。

詩歌は、之と趣を異にし、何人もギルギールの詩を読んで、其口の開き
方の大小等を想像するものなく、且つ時間に制限を受くることなきを
以て、假令忌むべき醜惡の状態を寫すとも、前後の話によりて融和し、讀
者の感害することなし。

かく詩歌は、繪畫彫刻の能はざる處を描くことを得るなり。詩歌の範
圍は、キンケルマン等の考ふる如く、しかく狹隘なるものに非ずして、其
範圍は、彫刻より遙かに廣大なり。かくして、レッシングは、カールス伯、アディ
ソン、スペンス等が、彫刻家をして、ホメール其他古代詩人の作を其儘に
刻み出さしめんとしたる迂を笑へり。彫刻は、到底詩歌の範圍内に侵入
する能はざるなり。

レッシングは、此議論を續けて、彫刻に比喩的標號(アレゴリシシエス、シム
ボル)を用ゐるは、技術の不足を證するものとし、彫刻は、詩歌と全等の働
をなす能はざるを以て、其不足を補はんが爲に、比喩を用ゐるなりと論
ぜり。

上述せる如く、繪畫は動作中の一瞬間を寫すものにして、詩歌は、連続
せる動作を終始一貫して、叙述するものなり。さらば詩歌の叙述法は如
何。

詩歌の叙述は、空間的並列を變じて、時間的連續の動作となさざる可
からず、之をホメールに徴せんに、ホメールは、叙事詩に於て、ヘーラの遊
車、オディッセイの船、バンダールの弓、アガメムノンの王衣等を既成の
ものとして記せずして、其成立の様を寫せり。

レッシングが、最も賞賛するは、勇者アキレスの楯の記述なり。ホメール
は、アキレスの楯を成立の順序に従ひて、動作によりて記述し、讀者の想

像を以て、之を組み立てしむ。ゾラ、バルザックは、エチアスの楯を既成のものとして、記述し失敗せり。此一事は、ゾラ、バルザックの叙事の才、遠くホメールに及ばざる事を證するものなり。

さて斯くの如くんば、詩歌は、箇牒を其儘に寫す事は、遙かに彫刻に及ばず、さらば詩歌は、此點に於て彫刻に一步を輸せざるか。レッシングは、此間に對して直ちに反問せり。詩歌は、他の美術が入る能はざる。然かも廣大なる活動場を有せり。何の爲めに彫刻の淺狹なる領域を僣すの要あらんと。レッシングの「ラオコオン論」は、後世の美學者より見る時は、不完全なる所ありと雖も、天才時代以後の文學者に影響を及ぼせしこと甚だ大なるものにして、今日に於ても、此書は批評家の珍什たるを失はざるなり。

ゲーテ大にレッシングの功を稱し、自傳中に記して曰く、「實にレッシングが云へる如く、彫刻は一に『美』の範圍中に踞せり。詩歌は、翱翔して、其領域盡くる所を知らず。彫刻の認識は、只に外戚によるのみ。詩歌は、然らずして、無限の想像を運らすことを得るなり。レッシングの批評は、電光一閃、物象の明暗を分かつが如し。茲に於て舊來の辭説は、弊履を棄つるが如くなれり云々。」

レッシングは、始めラオコオン論三卷を著さんと欲したり。第一卷は、詩歌と繪畫との關係を論じ、第二卷は、詩歌と音樂との關係を述べ、第三卷は、詩歌の種類を論ぜんとしてたり。されど第一卷のみにて止みしは、惜む可し。第二卷は、歌劇に於て、詩が音樂の附屬物たるに過ぎざるを見て、其非なるを悟り、之を改良して、音樂を副とし、詩を主とす可きを論ぜんとしたるなり。近代に於て、詩人作曲家の名を以て有名なるリヒャード、ワグネルは、此考を實行し、歌劇を改革して、大に成功したり。ワグネルに就いては、後章に述ぶ可し。

ラオコオン論は、第一卷を以て終を告げしも、其第三卷とも稱す可きは、「ハムブルギッシェ、ド라마ーツルギー」なり。此書は劇詩に就いて評論せるのなり。

第四編

(新南國通譯時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラウシチス、ムス及びロマンテイス、ムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラウシチス、ムス。 第四章 レッシング。

ラオコオン論に就いては、諸家の批評あれど茲に之を略す。
『ハムブルグ演劇評論』(ト) (ハムブルグギンゼー、ドラマールツルギー)
緒言

最も親愛なる弟カールよ、

小生の近況は、トント御話にならず候。目下興行中の物一向に小生の氣に入らずと申上ぐるの外なき次第に御座候。一座不和にて各勝手く、に事を致し、皆職責を重んずることを知らず候。されど小生は此等を更に意とせず、既に週刊(評論)を始め候。初刊貴賢に供し度、御送附申上候。印刷は小生自家用の印刷所にて致し候。敬具。

これレッシングが、赴任後間もなく小弟に與へたる書簡なり。當時の獨逸演劇は頗る幼稚にして、苟も評判記に筆を執らんとせば、観客俳優及び作者の意に逆ふ可きことは豫め期せざる可からざるなり。評判記者の任は、最も有望なりと雖も、然かも至難の事なりしなり。同一時に萬事を改善せんとするも行はれざるは、レッシングも能く之を知れり。されど、

二八六

4.7.1718.

或目的を以て孜孜怠なく進まば、効果は自から得らる可しと考へ、根本的改革を行はんとして、斷行の勇を振ひ、而してかくは失敗に歸したるなり。

評判記一たび出づるや、忽ち觀衆の不平を招き、且つ俳優の自負心を害したり。一座の主役者たる女優の一人は、評判記によりて、己の聲價を落さん事を恐れ、其名を評判記に記することを、前以て拒絶したり。又一女優あり、レッシングは、其技に感じ、更に熟達せん事を願ひて、忠告を與へたり。然るに此女優は痛く慙ぢ、忽ち興行主の許に至りて訴ふる所あり。伶俐なる興行主は、女優の氣を損ずるの不利なるを知りて、其名を評判記に載することを禁じたり。かくして他の俳優も、之を傳へ聞き、續々記名取消の申込をなし來れり。されば評判記を出すこと數回にして、レッシングは、俳優の技藝を批評する能はず、専ら戯曲につき、批評を試むるに至れり。

レッシングは、俳優等が批評を忌むを見て喜ばずして曰はく、彼等は平

第四編

新南國邊語時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラシチスムス及ビロマンチスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クラシチスムス。 第四編 レッシング

素御世辭に慣れ、普通の賞賛を以て満足する能はず、然かも欠點を擧ぐ
ることは、蛇蝎の如く厭へりと。

レッシングは、ハムブルグに來り、俳優、觀衆の人望を失ひしと雖も、決して批評家として越權の所置に出でたるに非ずして、積弊餘習依然として去らざる時に當りて、斷乎たる裁決を試みんとして、かくは失敗したるなり。

レッシングの考にては、批評家は立法家に非ずして、只に善惡を指摘し、邪正を判斷するの任を負ふものとなせり、されば法則を作らんとせずして古人の説を述べ、之が實行を督勵したるに過ぎず。

レッシングは、演劇にも『ラオコオン論』と全一の原則を應用したり、レッシングは、俳優に向つて、起居動作に於て、寫實を過重するの非なるを告げたり、されど又觀衆の想像に依頼すること多きに失するの害をも戒めたり、起居動作餘りに、實際に類す可からざるは、ラオコオン彫刻に於て、口を開くこと大ならざるが如し、要は其美を損ずるを恐るればなり、さ

れど俳優は活物なり、彫刻は死塊なり、俳優は彫刻と全じがらず、若し俳優が藝を演ずるに際し、美を主とし、觀客の想像に偏倚する時は、活氣を滅殺するの弊に陥る可し、茲に於てか云ふ、演劇の技は、詩歌と成形的美術彫刻繪畫等との中間に存す可しと。

レッシングは、熱心と堅忍とを以て、評判記を書きしも、日を経るに従つて、演劇は衰頹の兆候を呈し、觀衆は漸く去り、無學の作者は、レッシングの學才を妬みて、興行を妨害せんとしたり。

此頃佛蘭西の劇場にて、デュイ、ベルアーの作『カレイの包圍攻撃』を演ぜしが、觀衆は歡呼を以て、之を迎へたり、これ英國に對する敵愾心と、自國を思ふ愛國心との熱心なる喜なりしなり。

かくと傳へ聞きしレッシングは、獨逸演劇の衰頹を遺憾とせる折柄なれば、進んで自己の新作喜劇『ミンナ、フオン、バルンヘルム』を演じ、以て觀衆をして七年戦争時代に於ける獨逸國民の生活を想起せしめ、且つは演劇の頹勢を挽回せんとしたり、然るに興行主は無謀にも、之を拒絶した

り。
 此時レッシングは、不平に堪へずして云へり、「カレイの包圍攻撃」の一曲は、佛國民の滿腔の赤誠を迎へられ、デュー、ベルアーの名聲は、隣國にまで蕪けり、然るに余が作「ミンナ」は如何に、劇場は獨逸國內到處にありと雖も、デュー、ベルアーが「カレイ包圍」によりて得たる尊敬の千分の一だにも、獨逸詩人に敬意を表す可き市は、之を何處にか求めん。人或は云はん、「カレイ包圍」の曲名高きは、佛人の虚誇心によれりと、されど此虚誇心だになき獨人は如何にと。

本論（佛國悲劇及び喜劇。ポルテール、ジークスピア、コルチエユ三大劇詩人の批評。アリストーテレスの詩學。所謂三單一に關するレッシングの卓見）

演劇評論に載する所の戯曲は、總數五十二曲にして、十八曲の獨逸劇を除いて、他は皆佛蘭西劇なり、排佛主義の本尊たるレッシングが、然かも獨逸演劇の改良を企てたる評論にして、佛劇の數獨逸劇に二倍するは、

一見奇異の感をなす可しと雖も、ゴットシェッドが、獨逸に新演劇を興さんとして、盛に佛劇を入れてより、獨逸劇場に於ける佛劇の勢力強大にして、ハムブルグ劇場に演ぜられしものも、大部は佛劇なりしことを知らば、決して怪むに足らざるなり、又一方より見る時は、佛劇を排するには、佛劇の短所を暴露することが、最も有効なりしなり。

さて演劇評論にて、評する所は悲劇のみにして、言一たびも、喜劇に及ばざるは、一端を擧げて、他端を顧みざるが如し、されどこれ大に故あるなり、アリストーテレス云へり、悲劇は劇詩の最高なるものなりと、レッシング謂へらく、佛人は悲劇の眞髓を洞察せず、佛人は、國民の性情上決して人の情感を動かす可き悲劇を作る能はずと、且又ハムブルグ劇場に演ぜられしは、悲劇にして喜劇なかりしを以て、之を批評せざりしなり、理由は茲に止まらず、レッシングは、佛の悲劇を非難せしも、喜劇に至りては、大に趣味ありとなし、喜劇詩人モリエールには大に私淑したり、且つレッシングは、悲劇が絶對的に佛人の性情に適せざると相反して、喜劇は、

頓智機敏なる佛國民の特有物なりと考へ、獨逸喜劇も英喜劇も無味平板にして、到底佛喜劇に遠く及ばずとせり。或人は、レッシングが佛喜劇を賞揚するは、悲劇を難ずるの酷烈なると均衡を保てるなりとの説をなせど、局外者として考ふるも、快活機敏なる佛國民は、悲劇よりは喜劇に適合せる性情を有するが如し、適法合式を以て成れる佛悲劇は、其精神に於て、古人の作と相距る遠し、詩形優麗ならずと雖も、人の情を動かし、感を起すことに於て、能く古人に逼るは沙翁の曲なり、これレッシングの持論にして、『文學書簡』以來度々繰り返へされたる語なり。

演劇評論の梗概を述ぶるには、先づ痛快の文字を以て成り、世評に噴々たるボルテール攻撃より始め、次いでコルチャイユに及ばんとす。此二文豪は、創作家にして、且つ學理にも通じたり、其演劇に關する議論は、佛人が無二の寶典として尊敬せし所なり。

ボルテールは、其傑作『セミラミス』の序文に、臆面もなく記して曰はく、希人と雖も、吾等佛人の作を見れば、劇詩の序説及び各齣の排列の秩序整

然たるを賞す可し、理由なくして登場、退場することなく、従つて空場を生ずることなし、台詞の機智に富めること、作者の用意周到なることを見ては、古人も將に眩惑す可しと、レッシングは、此自重不遜なる語を聞き、大に不平なり、曰はく、ボルテールが臆々しく自畫自賛して、佛詩の特色を述べしものに就いては、少しく古文を繕きしものは、必ず異説を唱ふ可し。佛人の適法合式の文辭には、古人の簡潔にして偉大なる想は、更に見出す能はざるなり。ボルテールは、陽にシークスピアの劇詩を非難すと雖も、陰に其作を摸倣する所あるなり、『セミラミス』曲は、『ハムレット』に出でたるなり。

ボルテールは、『セミラミス』曲を出したる時に公言して曰はく、劇詩に幽霊を出すは、頗る大膽なり、諸人皆云へり、幽霊を信ずるは未開の民なり、開明の國民は、之を信ぜずと、されど考ふるに、古人は之を信じたり、之を劇場に演じたり、今に於て古人に擬すとも、之を非難するの理あらんやと。

レッシングは、此巧言に欺かれずして云へり、劇詩中幽霊を出すこと、何すれど、然かく大膽なることあらんや、されど只「セミラミス」に於けるニエスの霊が、白晝群衆の中に現はるゝは、噴飯に絶へざるなり。悲劇にてかゝる幽霊出づる時は、悲劇の真意を害し、観客の注意を惹かず、却て滑稽に終らん。之に反して「ハムレット」曲中の幽霊は如何に、三更人静かなる時に現はる。之を觀るものゝ眼は、悉く此靈と小公子とに集注して、深き感動を起す可し。ニエスの霊は、眞の幽霊に非ずして、機械に過ぎず、單に動作を複雑にするのみ、吾人の感を動かすこと更になし。ハムレットの亡父の幽霊は、之に反して、實際の人の如く動き、吾人をして恐懼と全情とを起さしむ。ポルテールは、幽霊が日光を避け、公衆の面前を憚かることを知らざりしか、三尺の童子に問ふも、直ちに之を教示せん。理屈より云へば、白晝幽霊の出づることもあらん、されど劇詩は理論を以て推す可からず、幽霊に關する沙翁の考は、ポルテールより遙かに詩的なることは争ふ可からざるなり。

ポルテールは、幽霊を歴史上の事實なりとして辯護せり、レッシングは、アリストテレスの説に従ひ、劇詩に於て、歴史上の事實は、其目的に在らずして、手段となせり。劇詩により、歴史上の事實を探らんとするは、迂の極なり。悲劇が通常歴史上に其題目を求むるは、史上の事實が、悲劇として都合よき場合あるを以てなり。劇詩は事實を其儘に述ぶるものに非ずして、事實を土臺として更に究理するなり。悲劇に於ては、この人かの人か何を爲せしやと云ふよりは、寧ろかゝる性質の人にして、斯くの如き境遇に在らしめば、如何に爲す可きかを知らんとするなり。テリストーテレス詩學第六章第九節、前略悲劇は人物の描寫にあらずして、行爲を叙するものなり、後略劇詩と歴史上の事實との關係に就いては、更に論及して云へり、歴史はかく有りしと告ぐるものにして、劇詩はかく有る可しと描き出すものなり。歴史は事實を離るゝ能はず、劇詩は事實に基くと雖も、之を超絶することを得るなり。歴史は、事實の拘束を受くと雖も、劇詩は其取捨選擇自由なり。劇詩は對話體の歴史なりと速断す

第四編

新南國遠征時代の文學(宗教改革より現代迄)
 (クラウチナスムス及びロマンテイスムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラウチナスムス、第四卷、レッシング。

る能はず、劇詩は、歴史より人物の名を借り来るも、此人物の性格は、必ずしも歴史人と一致せず、多くば、詩人の想像により、之に性格を附與するなり。

ホルテールの作にして、レッスングの冷評を蒙りたる第二曲は、『ザイル』なり。ホルテールは、此作に於て頗る虚誇なる公言をなして曰はく、夥多の貴婦人は、余が劇詩には戀愛を寫すこと足らずと云へり、余は之に答へて、悲劇は、戀愛に至適なるものに非ずと云へり、されど余は其懇望を無にするを欲せず、僅かに十八日間を以て、一曲を作れり、これこの『ザイル』なりと、或批評家は、ホルテールに媚びて、『戀愛の情は、ホルテールをして、『ザイル』曲を作らしめたり』と云へり、これ蓋し、『ザイル』は、戀愛悲劇の上乗なりとの意なり、過賞も亦甚だし、此贅辭は、レッスングの筆法を益銳からしめたり、即ち勵聲一喝して、『ザイル』は、戀愛の悲劇に非ずして、痴情的戀慕の悲劇なり、戀愛の悲劇としては、沙翁の『ロメオ、アンド、ジュリエット』を第一位に推す事に躊躇せずと云へり。

次いでホルテールの作『メローブ』の評論を擧ぐるを順序となすと雖も、此作の評論は、演劇評論の本論とも稱す可き、最も主要なるものにして、アリストーテレスの詩學を引用し、所謂三單一に就き、レッスング獨創の名案を下したるものなれば、之を最後に述べ、之に先つて、コルチイユに就き、評論を試みんと欲す。

コルチイユは、十七世紀に於ける佛蘭西劇詩の大家なり、兼ねて、學理に通ず、得意の作『ロドギューチ』を始めとし、三單一の法則を嚴守したる、『シナ』等の作あり、晩年に悲劇に關する論文『トレ、ディスクール、ディユ、ラ、トラ、マデュー』を書けり、此論文はアリストーテレスの詩學の説を敷衍したるものに過ぎずと雖も、創作に倦みて、餘生を送りし時著はしたるものなれば、往年の自作を反讀して、其欠を補ひ、其非を蔽はんとして、アリストーテレスの説を任意に曲解したる所多し、其著るしきものを擧ぐれば、アリストーテレスの詩學中『全情』及び『恐懼』の二語あり、コルチイユは、之を『恐懼』と解せずして、『驚愕』と解したり、これコルチイユのみならず、此

第四編

新南國邊語時代の文學(宗教改革より現代迄)

(クラウシテスマス及びロマンティスムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クラウシテスマス。 第四章 レッセング。

詩學を佛譯せしゲンシェーも、獨譯したるクルチウスも、共に誤譯したり。此誤を正して「恐懼」となせしは、レツシングを以て始めとす。悲劇は、觀客の恐懼と全情とを惹き起す可しとは、ア氏の詩學に於て、悲劇の根本法則なり、之を破る時は、悲劇にあらざるなり。然るにコイチイユは、自作を庇護せんとして、説をなして曰はく、此二條件は、必ずしも、全一時に備ふるを要せず、其一を備ふれば可なり、余が作「ロドギューチ」「メシーヌ」の二曲は、恐懼を惹き起す可しと雖も、全情は更に起らずと、又全情と恐懼とは、全一人物により起す可きものなることは、ア氏の言を俟たずしても明かなり。然るにコルチイユは、兩感情を喚起するは、全一人物に限らずとなし、自作中に種々の人物を用ゐたるの欠點を排ぜり。

ア氏は云へり、吾人は悲劇により起す同情と恐懼とを以て、自己の全情、恐懼及び之に伴ふものを、悉く洗淨す可しと。これ悲劇の「カタルシス」の解なり。「カタルシス」とは、元來醫學上の用語にして、体内の汚毒を排除するの謂なり。人感冒に罹かる時は、醫は病人に與ふるに、發汗劑を以て

す、一たび熱度を昂進せしむるは、体内に鬱積せる熱を悉く流出せしめて、後平癒を求むるに在り。故に此語を恐懼、全情の場合に用ゐる時は、悲劇の主人公に對して、心中に充塞せる熱情を悉く吐露して、後心情爽快を感ずるに至らしむるなり。コルチイユは、此意を誤解し、更に奇説を立て、曰く、例へば吾人と境遇を企ふするものあり、不幸死に瀕するの苦痛を受けんとする時は、之を觀る吾人は、之に全情を寄すると共に、其不幸の吾人にも及ばんかとの恐懼を起し、従つて此恐懼は、此不幸を避けんとの欲望を起し、此欲望は、此不幸によりて招きたる全情、恐懼を淨化す可しと云へり。

ア氏が毫も罪なき至善の人は、悲劇の主人公たらしむ可からずと云へるは、悲惨見るに忍びざるを以てなり。然るにコルチイユは之を曲解して曰く、これ一に詩人の技倆にあり、苦痛を受くる無罪の人に對する全情が、無罪の人を苦むる悪人に對する嫌惡より更に強大なる時は、善人を危運に遭遇せしむるも不可なしと。

ア氏曰はく、大悪人は全情をも恐懼をも惹起せざるを以て、悲劇の主人公となす可からずと。コルチイユは、全情を起さずとも、恐懼を起すを以て、差支なしと云へり。

ア氏は、悲劇の主人公の行爲は、善良ならざる可からずと云へり。善良とは、道徳上より云ふなり。然るにコルチイユは、善良を道徳上の意に解せざりき。

以上コルチイユが曲解の説として、列挙したるものは、ア氏の『悲劇は、観客の全情と恐懼とを惹起すべし、故に至善の人と至悪の人とは、此目的に合せず』と云へる一讀簡單明亮なる法則の解釋に對するレッシングの論駁なり。吾人はコルチイユの説と、レッシングの批評とを合して、ア氏の眞意を窺ふことを得るなり。

コルチイユを論じ去りたれば、再びボルテールに歸りて説かん。ボルテールの作として『セミラミス』、『ザイール』の二曲は既に擧げたり。第三曲として『メロップ』を擧げん。『メロップ』の曲は、もと希詩人オイリビデスの

原作を、伊太利詩人マツフェイが改作し、ボルテールが更に改削を加へたるものなり。然るにボルテールは、あらゆる手段を盡して、マツフェイを非難し、直に希人の淵源に溯りて、其真相を穿ち、然かもオイリビデスと相譲らざるの功名を博せんとして、卑劣の手段を取れり。此作に於ては、ボルテールは、自畫自贊を以て、満足する能はず。ランデルと云ふ假の人を設けて、マツフェイを攻撃せしめたり。茲に於てレッシングは、マツフェイの曲よりは、ボルテールの曲が、却て場所の單一を欠き、時間の單一を守らざるものとし、又登場、退場に一々理由あり、齣と齣との連絡を保たしめたりと云ふ如きは、法則に拘泥し、形式に依頼するの甚しきものとなし、更に佛人は時間及び場所の單一を重要な法則としながら、自作の都合に任かせて之を變更せり。此法則を嚴守せざるはよし、されど此法則を劇詩の重要な法則とし、動作の單一の法則と全一重視するは、事の輕重大小を察せざるものなりと論駁せり。

ア氏は、詩學第五章に叙事詩と劇詩との別を論じて曰はく、劇詩は出

第四編

新南國逸時時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クワシテスミス及びロマンチイスマス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クワシテスミス。第四編、レッシング。

來得可くんば、太陽の一廻轉する間に、其局を結ばしむ可し、要は時間を引き延ばすを忌むなり、されど叙事詩は、時間に制限を置かずと、然るにゴットシェットは、夜は寝ぬ可き時と定まれり、故にア氏の言は、晝間を意味するものとなせり、コルチイユは、自作に都合よき様に之を三十時間となせり。

レッシングは、茲に於てア氏詩學三單一の法則を解決して、左の如く云へり。

劇詩の三要件として、動作、場所及び時間の三單一を擧ぐるは、動作を主要の大要件とし、他の二は此大要件に附加せるものなりと、之を證するに、レッシングは、ソフオクレス、エシロス等の希詩人及びシェークスピア、カルデロン等の作を引用し、大にコルチイユ、ボルテール等の妄論を打ち破り、之に代ふるに自家の創見を以てしたり、これ「ハムブルグ演劇評論」の概略なりとす。

三大評論に續いて、散文にて著名なる作少なしとせず、「フアーベル

チ. Abhandlungen über die Fabel.
y. Anmerkungen über das Epigramm.

に關する論文」(チ) (アプ、ハンドルゲン、ユーベル、デイフ、アール)は、千七百五十九年の出版なり、此論文は、千七百七十一年出版の「エビグランム註解」(リ) (アンメルクンゲン、ユーベル、ダス、エビグランム)と相俟つて、レッシングの卓論なり、レッシングの所謂フアーベルは、餘りに廣義にして、道徳上の説話の意に解せり、之に反して、エビグランムは、狭意に失するが如し、レッシングは、エビグランムに於ては、マルテアルを祖とし、フアーベルに於ては、エゾーブを師と仰ぎたり、レッシングの考にては、佛のラフォンテーンのフアーベルは、語辭巧なりと雖も、徒らに外形の美を飾りて、寓意、淺薄なりとし、エゾーブは、語簡潔なれども、其根底に含蓄せる意味は、深遠なりとせり、レッシングは、屢云ひし如く、空論家にあらず、其議論を實行したり、此點に於ては、一般の批評家及び美學論者と趣を異にせり、レッシングは、抒情的詩才を欠きたりと雖も、フアーベル、エビグランム、俗語に至りては、警句讀者をして驚嘆せしむ、其一例を擧ぐれば、短句の詩「確實」に於て、「不確實なるものは、明日の我が命、確實なるものは、命あらば、酒を飲む事」

第四編

新南國邊詩時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クワシチ、スミス、及びロマンチイ、スミス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クワシチ、スミス、第四章、レッシング。

と云へるが如し。

『古實的書簡』(マ) (フリーフェアンテイクワリッシェンインハルツ)は、千七百六十九年の出版なり。傳中に述べたる如く、ハルレ大學教授クロツツは、レッシングが『最近文學に關する書簡』に於て、打撃を加へたる詩人を辯護し、且つ『ラオコオン論』に容喙したり。茲に於てレッシングは、此書簡を書けり。此書簡は、文學書簡と等しく筆戰の好文範たるのみならず、古代の文藝美術に關する該博の議論なり。此書簡出で、クロツツの聲望頓に地に墮ち、大學教授の地位をも失ふに至りしを見れば、其議論の鋭きこと察知するを得可し。

『神學上の論文』(ル) (テオロギッシェー、シトライトシユリフテン)は、千七百七十八年の出版なり。これかの不徳なる牧師ゲーツェとの論戰の文なり。レッシングは、大にゲーツェの人格の陋劣なるを譏り、形式を重んじ、實行を後にするは、宗教の本旨意に戻るなりと痛論し、耶蘇教は聖書なしと雖も、依然として神の教たるを失はず、聖書が文章となつて現はれし以前に、

福音は既に有りしなり。福音者及び使徒等が書きしものは、じぶとも、耶蘇教は宗教として永久不滅なりと迄極論したり。

此外『人類の教育』(エルチーフング、デス、メンシユングシユレヒツ)は、千七百八十年の出版にして、宗教及び哲學の兩方面より、人生問題を解釋したるものなり。

(オ) 『非、デア、アルテン、デン、トート、ゲビルデット』は、千七百六十九年の出版にして、深遠の學理的研究を遂げたるものなり。

散文家としてのレッシングは、以上列擧せるものによりて知るを得可し。これより、レッシングが批評眼を以て創作せし劇詩に就き、少しく述べんとす。劇詩にては、人皆先づ指を『ミンナ』、『エミリア』及び『ナータン』の三作に届す可し。

(フ) 『ミンナ、フォン、パルンヘルム』一名『軍人の幸福』(喜劇、五齣) 千七百六十七年出版)

梗概、七年戰爭の時、普魯西の一士官マヨール、フォン、テルハイムは、軍

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラシカスムス及びロマンタイスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クラシカスムス。 第四章 レッシング

用金募集の命令を受けて、索遜國の一小村に來れり。さるに貧づしき村民は、財産を傾くるに非ずんば、募集に應ずる能はざるなり。人情厚きテルハイムは、之をなすに忍びず、自己の所持金を以て之に代へたり。此事は圖らずも、或富家の一少女ミンナ、フォン、バルンヘルムの心を動かし、終に二人は行末久しき誓の約束を結ぶに至れり。兵馬倥傯の際なれば、テルハイムは、ミンナの許に戀々たる暇なく、別離を惜みつゝも遂に袖を分てり。テルハイムは數度の激戦に負傷して、右の腕は、不隨となれり。かく勇敢なる振舞せしテルハイムは、平和克復後忽ち職を免ぜられたり。そは索遜國の村民より賄賂を受けしとの嫌疑を以てなり。戰爭にて不具となり、義侠の爲めに却つて名譽を損ず、テルハイムは、深く自から慙ぢ、伯林の一小客舎に憊々として閉居したり。性來廉潔なるテルハイムは、長く逗留する間に、蓄財漸く盡き、生計日に窮す。無情なる客舎の主人の督促に絶え兼ねて、遂に唯一の寶物をも抵當として差出せり。このテルハイムに取りて無二の寶物とも云ふ可きは、ミンナが別離の際に紀念

として與へし指輪なり。

ミンナは、家に在りて、かゝる事の起りしとは、露知らず、年久しく打絶えしテルハイムの音信を待ち詫びしが、心猛くも決心して、フランチスカと云へる一人の侍女を伴ひ、何處の果になりとも、なつかしき人を探がし出さんとて、故郷を立ち出てたり。先づ首都伯林に出て、宿を一小旅館「ケーニッヒ、フォン、ジューパーニエン」に求む。此旅館は、テルハイムが過ぐる年より、寄寓せる家なりとは、赤繩の神の知らせなる可し。ミンナは誓の指輪を示されて打ち驚き、主人に事の仔細を問ひ糺して、テルハイムの窮狀を知れり。ミンナは婢僕となりても、一度誓ひし人に仕へんと懇願せり。されどテルハイムは、男の意氣地容易に承諾を與へず。茲に於てミンナは、一計を案じて、テルハイムを欺きて曰はく、妾は御身を愛せし故を以て叔父の怒を招き、家に居ることも叶はで逃げ來れり。不憫と思ひて妾の願を聞き玉へと。時に偶々叔父來り、テルハイムの疑を解き、ミンナは、其宿志を遂げたり。此時裁判の結果テルハイムは、無罪の宣告を受け、

且つ王の手書を以て、青天白日の身となれり。茲に於て喜劇は芽出度終局を結ぶ。戀愛と名譽との衝突叙し得て妙なり。

劇中の人物にて、テルハイムの従者ユストは、飼主に慣れし犬の如く、片時も主人の側を離れず、武骨謹直の兵士にして、七年戦争時代の忠實なる武士の好模型なり。ユストと正反對にして、慾ありて人情を解せぬは、旅舎の主人なり。序幕にて、ユストは曉の夢に、思はず主人の無禮を怒り、叫び出し、身をもがきて目を覺し、驚き寢床を馳せ出でんとする時、主人來り「御早ふ」の挨拶をなす。ユストが夢の續を實現して、散々に主人を叱り飛ばす所は、ユストの誠實現はれて、主人の人物一層下落するの心地して面白し。最も滑稽なる人物は、伴てテルハイムの隊に屬せしと云ふ兵士リッコーなり。佛語と獨語とを混合して、ミンナ及びフランスカに、自己の經歷を語るあたりは、觀客をして、抱腹絶倒せしむ。リッコーは、かく外面無邪氣なるが如きも、内心狡猾にして、遂には金の無心を云ひ出すと云ふ破廉恥漢なり。テルハイム、エルナルが、武士の名譽を重んずる

と相對して、好箇の對照をなすなり。ミンナは少しく頑固なる所却つて處女の愛嬌を添へ、氣分快活にして、毫も内氣なる所なく、終始嚴格なるテルハイムと氣象に於ても好き配合と云ふ可し。一篇中ミンナは常に誘導者の地位に立ち、テルハイムは、受働的なり。フランスカは、侍女と云へど、實はミンナの友達の如く、相談相手となり、常にミンナを補佐す。一種の才女なり。劇詩の三單一の法則より考ふるに、此曲は、獨逸劇の模範と仰ぐ可きものなり。先づ時間の單一の法則の如きは、重要な條件ならずと雖も、強いて時間を延ばすは、劇詩の本意にあらざれば、レッスングは、アリストトーテレスの法則に従へり。即ち此曲の興行時間は、太陽の一回轉に終れり。千七百六十三年八月廿三日の曉方、テルハイムの従者ユストが曉夢に驚き起床する段より、全日の黄昏に至る間の出來事となれり。次いで場所の單一に至りては、驚く程法則に叶へるものにして、伯林市の「ケーニッヒ、フォン、シュバートニエン」と云ふ旅館を舞臺とし、大廣間と之に接する部屋とにて演ぜらる。之を實際に徴するに左の如し。

第一齣 大廣間 第二齣 部屋 第三齣 大廣間 第四齣 部屋 第五齣 大廣間

重要視されざる場所時間の單一にして、然かり、動作の單一に至りては云ふを要せざるなり。さて梗概を述ぶるに際しては、之を略せしを以て、今茲に其補遺を爲さん。此劇詩は、テルハイム及びミンナを主なる兩主人公とし、主たる動作は、此兩人の芽出度結婚に至る迄の事柄なり。『昔原天神記』が三種三様の兒別ありとて特に其名高し。之に倣いて『ミンナ』を評さば、此詩は二種二様の結婚を巧に描きたるものと云ふを得可し。テルハイム及びミンナの結婚の副動作として、ミンナの侍女フランチスカとテルハイムの親衛兵エルテルとの結婚を寫せり。此二種二様の主従の結婚は喜劇として、最も能く其目的を達するものと云ふ可し。

此曲の趣向にて、最も賞揚せらるゝ所は、恐らく序説(エキスポジション)なる可し。ゲーテは、夙に此點を賞賛し、佛の喜劇詩家モリエールの『タルチュフ』曲のエキスポジションは、古今比類なく、天下無二と稱す可きも、之

に次ぐは、レッシングの『ミンナ』曲を描いて、他に及ぶものなしと迄公言して憚らざりき。前に起りし事柄『フォルファーベル』を、對話中に挿入して、能くテルハイムとミンナとの關係を明かならしむるは、レッシングの創作の才非凡なるを證して餘りあるものなり。

此作が、レッシングの苦心經營になりしものたるは、ラムレルに與へし手書中に『此作にして、余が他の作と擇ぶ所なくんば、余は劇界を退かんと云へるによりても、知ること難からず。伯林に遊ぶものは、ケーニヒスグラベン市街の一番地に『レッシングの家』(レッシングハウス)を見舞ふ可く、『レッシング』は此家に、『ミンナ、フォン、バルンヘンム』を作れり。時に千七百六十五年の標札を見て、詩人を追憶すと云ふ。

(カ) 『エミリア、ガロッチ』悲劇 五齣 千七百七十二年出版

梗概、伊太利のグアスタラ國の領主に、ヘッタルラ、ゴンツァガと云へる公爵の君あり。一身の榮華に耽りて、此世をば我が世と思ふ振舞をなし、情慾は管て制することを知らざりき。君は繪畫の嗜ありて、或時畫家コ

ンティに命じて、愛人オルソナの肖像を畫かしめたり。然るに此時コンティは、オルジナ夫人の肖像に添へて、妙齡なる一女子の肖像畫を持來せり。公爵の君は、此像を一目見玉ふや、側目も觸れず、凝視して、オルジナの像には、一瞥をも與へざりき。畫家コンティは、君の戀情抑へ難き様を見て、語りて曰はく、此少女は如何に君が思を焦がし玉ふとも、手に入れ玉ふこと叶はず。知り玉はずや、此少女名はエミリアと云ひ、大佐オドアルド、ガロッティの愛娘にて、芳紀將に二八、明日年若きアピアニ伯と結婚の式を擧ぐることに定まれりと。

專制なる當時の貴族の好模型とも云ふ可き公爵の君は、暴力に訴へても、此少女を自家の慰物にせんと決心せり。君は獨り思案に暮れしが、侍従マリチリを召ひ、竊かに其意を漏らせり。悪計に富めるマリチリは、直に君の依頼を承諾し、即日アピアニ伯を遠國に使せしめ、以て婚姻を妨げんとしたり。されど婚姻の前日何人か、かゝる使命に應ず可き、茲に於てマリチリは、一度策に窮せしが、君の望を遂げしめん爲め、遂に最も

無慘なる企をなせり。マリチリは、覆面の武士をして、エミリアとアピアニとが車を同ふして、婚姻の式に赴く途中を襲はしめて、伯を暗殺し、兼て森の中に潜め置きし武士をして、此強盜等を追ひ、拂ひ、危急を救ふ様に擬して、花嫁エミリアを公爵の君の別荘ドサローに連れ行かしめたり。エミリアの母クラウジア及び父オドアルドは、かゝる變事ありしと聞き、エミリアを尋ねて、共にドサローへ來れり。クラウジアは、驚き周章て、公爵の君を見るや、忽ち詰問せり。公爵の君は、痛く打ち驚ける様を裝ひ、エミリアを勞はり、兇犯人を直に逮捕す可しと云ひて、クラウジア、オドアルドを欺き去らしめんとす。

されど公爵の君に棄てられ、寵衰へしを憂いて、狂女となれるオルジナは、事の起りを遂一物語り、盡せぬ怨言を繰り返へし、懷中より匕首を取り出し、オドアルドに與へて、復讐をなさん事を乞へり。此邊より大詰に至る間は、悲劇中の最も悲壯なる所なり。愛婚は、非命の最後を遂げ、愛娘は暴戻の君に弄ばる。オドアルドの怨は、骨髓に徹し、怒の眉は逆か立

てり、公爵の君に怨を報ぜんか、臣下の身として爲す可きに非ざるなり、されど最愛の子の名譽は如何にして全ふす可き、オドアルドは、遂に意を決したり、エミリアの胸は、オルジナの嫉妬の一念籠りたる復讐の刃に貫かれたり。

春の山風を待たずして、散るを急ぐ、薔薇の花、エミリアの最後こそ哀れなれ、かくて天はマリネリの悪計を成就せしめず、公爵の君は、深く悔悟して、其志を改め、マリネリを刑するに重罪を以てしたりと云ふ。

これ一篇の梗概なり。此曲は、善良の民は、屢上の暴威に壓せらる、されど最後の勝利者は、道義の人にして、如何に權威を振ふとも、人道に違背するものは、遂に敗るゝの理想を脱けるなり。此詩の翻譯は「折薔薇」の名を以て、鷗外氏の著「みなは抄」に載せらる。獨逸劇詩として、我が文壇に知らるゝこと久し、故に敢て評論せざる可し。次いで、レッシングの一世の傑作「ナータン、デル、ワイゼ」につき論ずる所あらんとす。

3. Nathan der Weise.

(ヨ) 「ナータン、デル、ワイゼ」(戯曲的詩、五齣、千七百七十九年出版)

緒論、劇詩の三傑作の一にして、最後に出てしは「ナータン、デル、ワイゼ」なり。賢者ナータンを主人公とするを以て此名あり。本論に入るに先ち、此詩の起源、性質及び詩形を述べんとす。

レッシングは、牧師ゲーツェと耶蘇教に就き、宗教上の議論を闘はしたり。此論文は、千七百七十八年に出版されたり。「ナータン」は、此年の十一月より翌七十九年の四月に至る六ヶ月を以て成れり。即ち知る「ナータン」は、レッシングがゲーツェとの論争を打して一團となし、對宗教の理想を名を劇詩に借りて、發表したるものなることを、依つて「ナータン」は「ミンナ」「エミリア」とは、其趣向全じからず、「ミンナ」「エミリア」三曲が、アリストテレスの法則を遵奉せるに相反して、「ナータン」は、三單一の法則を嚴守せず、動作に於て大に欠くる所あるが如し、世の批評するものは、「ナータン」を「善詩なり、されど悪戯曲なり」と云へり。

「ナータン」を評するには、二様の標準あり、一は宗教上の立脚點よりし、他は文藝上の立脚點よりす、而して兩者大に其趣を異にせり。前に述べ

たる『善詩なり』との評は、宗教思想を述べたる詩としての『ナータン』を云へるものにして、『悪戯曲』の名は、蓋し文藝上の立脚点より劇詩として見たるなり、『悪戯曲』の名を負へるに係はらず、ゲーテ、シルレルは、先人の遺著を貴び、『ナータン』を舞臺に上げせ、其名聲を發揚したり、マッシュー、アーノルドは云へり、レッシングの想像は、理性の力強くして、感情を以て融和されずと、アーノルドの評は、少なくとも、『ナータン』に關しては、當らずと雖も、遠からざるなり、されど、『ナータン』を『ミンナ』、『エミリア』と企一の觀察点より判断するは、其當を得たるものにあらざるなり、『ミンナ』、『エミリア』は、實世間の人情風俗を寫したるものなり、即ち、一は名譽を重んずる獨逸軍人の俠氣と、之に配するに富家の少女の戀愛とを以てし、他の一は、專權放恣なる君と、そが情慾の犠牲となりし可憐の娘とを描がけり、獨り、『ナータン』に至りては、大に然らず、『ナータン』は、レッシングの世界觀なり、三一神教合一の大理想なり、三單一の法則に合せず、情趣雅致に乏しきの故を以て、一概に此詩を難するは、誤れり、之を難するものは、『ナ

ータン』の眞價何處にあるかを知らざるものなり、レッシング自身も、『ナータン』を眞正の戯曲とせず、特に名づくるに、戯曲的詩の名を以てせり、吾人は、寧ろレッシングが、自家の人生觀を全く抽象することなくして、之を舞臺に上げせたるの大英斷を賞せざる可からざるなり。

『ナータン』は、其起源、性質に於て、『エミリア』、『ミンナ』二曲と異なるが如く、又詩形も相全じからず、『ミンナ』、『エミリア』は散文なり、當時佛の劇詩家は、アレキサンドロリーナルを、劇詩唯一の詩形となせり、然るにレッシングは、『ナータン』を書くに散文を用ゐず、又佛人に倣はず、獨特の詩形『低高五脚句』を用ゐたり、これ一度本文を繕かば、一目瞭然たる可しと雖も、此詩形が、天才時代以後の詩人によりて、襲用され、爲めに劇詩形の一革新をなせしことは、輕々に看過す可からざるなり。

十字軍起りて、耶蘇教徒は、先を争うて、聖墓の地に遠征したり、茲に於て、パレスティナの地は、耶蘇、猶太、回々、三宗教徒が最も相接觸したる所なり、三大宗教の代表者を舞臺に上げせんには、パレスティナの地最も其目

第四編

新南國邊野時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラシチスムス及びロマンチスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラシチスムス。 第四章 レッシング。

的に適へり。依つてレッシングは、『ナータン』の舞臺を東方に運び、時代を第三十字軍千九百年頃の時としたるなり。

本論、『古昔東方に人あり、寶石の指輪を有せり。此寶石は、百種の光輝を放ち、且つ一種の魔力を有し、恭しく之を持つるものは、神にも人にも愛せらるゝと云へり。されば此人は、未だ嘗て一度も、此指輪を指より放さず、永久家の寶物となさんとせり。而して此指輪は、其最愛の子に譲づることゝし、死に臨んでは、嚴重に命じて、之れを又最愛の子に傳へよと告げたり。かくの如くなれば、父の愛子は、生得の權なくも、指輪の力を以て家長となることを得たり。かくして此指輪は、子々孫々に傳へられしが、偶三人の子を持てる父に傳はれり。然るに此三人は、等しく皆従順にして、父の命を奉ぜしかば、父も三人の子に等しき愛情を有したり。さて此父將に世を去らんとするに際し、三人の子供に偏頗なること能はず。大に指輪の所置に窮せしが、遂に意を決し、竊に寶石師を召び、二個の指輪を新に模造せしめたるに、細工精巧にして、父さへ其孰れが眞物なる

やを判別する能はざりき。依つて父は大に喜び、三人の子を一人づゝ召び出して之を興へたり。父の死後三人の子は、各其權利を主張して相争ひしも、指輪の眞偽は遂に判別する能はざりき。眞正なる信仰も、亦實に此指輪の如くなる可し』とは、これ賢者ナータンが、サラディンの難問に答へたる語なり。

三指輪の比喩は、十四世紀の伊太利文豪ボツカチオの『十日物語』(デカメロン)中に出づるものにして、もと智慧は、身の難を避くるに大切なりと云ふ意の比喩なり。レッシングは、此物語を借り來つて宗教問題を解釋せんとしたるなり。

『ナータン』の題辭に『入り來れよ、茲にも亦神は集ひ玉へり』と云へるは、此時に現はるゝ理想を、最も能く表白するものなり。耶蘇、猶太、回々の三宗教は、各異なる神を信奉すと雖も、孰れを眞正なる教とす可きか判別し難きなり。

三指輪の比喩に基き、篇中の主たる人物は、宗教的性格を有せり。主人

第四編

新南國説話時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラウチヌス、ムス及びロマンケイス、ムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クラウチヌス、ムス、 第四章 レッシング

公ナータンは、猶太教の代表者にして、パトリアルヒ、ダヤ、テムヘルヘル、クローステルブル、デル等は、耶蘇教を代表し、サラディン、其妹シタ、併アル、ハフィは、回々教を代表せるものなり、ナータンの養女レツヒヤは、生れより云へば、耶蘇教徒なれど、育ちより云へば、猶太教徒なり、以て孰れに屬す可きか。

レツシングの考にては、前述せる如く、三宗教は、孰れを是とし、孰れを非とす可からず、要は宗教の如何に關せず、真正の信仰を是とし、虚偽の信仰を非とするにあり、真正の信仰とは、心を清むるにあり、名利の念を離れて、解脱するにあり、虚偽の信仰とは、之に反して、心の迷解けざるものなり、「ナータン」中に描かれし人物は、ナータンを最上とし、パトリアルヒを最下とし、他の人物は、其中間に彷徨し、解脱の程度に依つて人物の高下あるが如し。

篇中の人物は、レツシングが交遊せし人の性格を備ふるものにして、先づナータンは、「デカメロン」中の猶太人メルヒゼックとは、黑白相反し、賢

明にして、徳高き人物なり、レツシングは、實に親友にて猶太人なる哲學者メンデルスゾーンの人格を、ナータンに描がき出せるなりと云ふ、依つて單にナータンと云はずして、賢者デル、ワイゼ」として貴べり、序幕に於て、ナータン長き旅行より歸るや、家は全焼し、妻及び七人の愛兒は、耶蘇教徒の爲めに虐殺さる、茲に於て賢者も、己を忘れ、三日三夜泣き明かし泣き暮らし、天に叫び、地に哭し、神を呪ひ、人を惡みしが、遂に一旦悔悟して、怨に報ゆるに、徳を以てし、耶蘇教徒の少女レツヒヤを拾ひ上げて、神に謝して曰はく、「七人の代りに此一人を下し玉ふか」と、此子を撫育すること、尙も我が子に異ならず、满腔の愛をレツヒヤに向けて、更に僻惡を思はず、過去の災難を一朝翻然打ち忘るゝ如きは、己を制し、此世の利害を意とせずして、解脱を求むるものにして、最も高潔の人物と云ふ可きなり、非倫不徳なるパトリアルヒは、レツシングが、極力攻撃したる牧師ゲーツェの性格を有するものなり、大恩人たるサラディンを危害せんと企つる如きは、最も其不徳を現はすものなり、パトリアルヒは、利己心の奴隸なり、

第四編

新南國選語時代の文學、宗教改革より現代迄
(クラウシチヌス、スミス及びロマンタイヌス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラウシチヌス、スミス、第四卷、レツシング。

利己心の爲めに、真正の信仰を求むる能はず、己を知るの明なくして、其心迷へるなり。パトリアルヒは、宗教の假面をかぶる大悪漢なり。サラディンは、歴史上の人物より云へば、回々教のムルタンとして、暴威を振ひし人なれども、此詩に於ては、實際と異なり、大に徳高くして、貧民を救助し、又亡弟に似たるの故を以て、耶蘇教徒の捕虜テムベルヘルの命を助くるが如き寛大の君主なり。

此外此世の人を忌んで、自ら持する尊大、渴しても盗泉の水を飲まざる底の高慢心を有せるテムベルヘルの如き、好んで寂寥無人の郷に閑暇自適せんとし、世人の中に在りては、努めて自遜して人に下るクローステルブルーデルの如き、自由を友とし、憂苦を知らず、脰を曲げて枕とするも、樂其中にありとし、慾望少なきこと、乞丐兒の如く、然かも自重獨立、泰然たること、帝王も及ばざる僧アル、ハフ、の如き、女性にて、レツヒャダヤ等の如き、研究し來れば、宗教上の好問題にして、最も興味あることなりと雖も、深く論究するは、本書の目的にあらず、今は暫らく茲に止めん。

只「ナータン」に就き最後に一言す可きことあり、即ち此詩は、レッシングが、人道主義の理想を説けるものなり。

レッシングの劇詩にて、三傑作の外著名なるもの多し、今は之を詳述するの逸なきを以て、其名を擧ぐるにて止まらん。

(タ) 『ミス、サラ、サムブソン』悲劇、五齣、千七百五十五年作

梗概、放蕩無頼漢メレフントは、昔て愛せしモルウードを棄て、サラ、サムブソンと云へる或家の處女を誘惑したり、然るにモルウードは嫉妬心を起して、サラ、サムブソンを毒害したり、然るにメレフントも遂に自害したり。

當時佛人及び萊府學派に依つて、眞の劇詩は、勇者又は帝王を主人公とせざる可からずとの説唱へられたり、此曲は此迷夢を打破したるものにして、平民を以て主人公となし、下等社會の狀態を寫せり、又此曲は佛人が悲劇に慣用せし『アレキサンドロ・チル』を用ゐることなくして、散文を以て書けり。

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラシチスムス及びロマンチスムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラシチスムス。

第四節 レッシング。

レ. Philotas

ウ. Der junge Gelehrte.
ヰ. Die Juden.
子. Der Freigeist.
ナ. Doktor Faust.

ウ. Glangir.

(レ) 「フィロタス」悲劇 一齣 千七百五十九年作
梗概 「捕虜となりしマケドンの王子フィロタスは、父が子の情にひかされ、自國に不利なる平和條約を結ばんことを恐れて、自殺せり。此曲は此昔物語に胚胎せり。普魯西に於ける當時の愛國心を最も能く現はすものなり。」

(ヨ) 「デル、ユングゲレールテ」喜劇 三齣 處女作 千七百四十七年作

(ツ) 「ディユーデン」喜劇 一齣 千七百四十九年作

(チ) 「デル、フライガイスト」喜劇 五齣 千七百四十九年作

(ナ) 「ドクトル、ファウスト」断片 年代未詳

(ラ) 「ギアングル一名デル、フェルシュメーテ、トローン」断片 千七百四十八年作

以上十種の劇詩と前に述べし批評的論文とを對照せば、其内容に於ても、其數に於ても、レッシングが批評家にして併せて作家たること論を

俟たざるなり、獨逸文學の革命者たるレッシングの事業大略斯くの如し。

第五章 ヘルデル

(1) ヨハン、ゴットフリード、ヘルデルは、千七百四十四年八月廿五日東普魯西のモールンゲンに生まる。父は小學校の教師にして、家計裕ならざりしかば、ヘルデルは、一時牧師カラモウの許に養はれしが、露西亞軍の外科醫シワルツェルローに従ひて、ケーニヒスベルグに至り、醫學を學ばんとせり。されど性來物に感じ易くして、初回の手術に立ち合ひて氣絶したり。よりてヘルデルは、醫學の修業を斷念し、神學を學び幸に他より補助する者ありて、兩親を煩はすことなくして、學問するを得たり。ヘルデルがケーニヒスベルグにて講義を聞きし最も著名なる學者は、云ふ迄もなく、イムマヌエル、カントなりき。

ヘルデルは、千七百六十四年より六十九年迄リガに於て寺院學校の教師となりしが、外國の教育制度を取調べんとて教師の職を辭し、リガよりナントに至り、更に佛京巴里に向へり。此頃ホルスタインの王子愛

1. Johann Gottfried Herder.

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラウシテスマス及ビリマンテスマス、千七百四十八年より千七百四十八年迄) ○クラウシテスマス、第五章 ヘルデル。

爵病に罹かり、保養の爲めに伊太利に遊ばんとす。ヘルデルは、隨行の命に應じて、當時王子の住せしキールに赴けり、途中ハムブルグを過ぎて、
レッシングと會したり。

千七百七十年の夏王子は、侍従及びヘルデルを従へて旅程に上れり。一行はハムブルグ、ハノーエル、ゲッティンゲンを過ぎ、ダルムシュタットに立寄り、茲にヘルデルは、カロリィテ、フラックスランドと云へる一婦人と相知れり。王子の一行は、ダルムシュタットよりシトラーヌブルグに行きしが、ヘルデルは、此地に來り、不幸にも眼病に罹かり、隨行員を辭するの已むを得ざるに至れり。留まること七月餘、千七百七十三年ヘルデルは、嘗てダルムシュタットにて許嫁せしフラックスランドと結婚し、千七百八十八年より翌年迄伊太利に旅行せり。かくて後ヘルデルは、バイエルンの選帝侯より貴族に列せられしが、千八百三年十二月十八日、遂に長き病の床より、再び起つ能はざりき。

ヘルデルは、ハーマンの教訓を受け、而してシトラーヌブルグ滯留中

之をゲーテに傳へたり。ハーマンは文辭に巧ならず、文辭晦澁にして作家として、名聲高からずと雖も、文學の鼓吹者、誘導者としての功蹟は蔽ふべからざるなり。ヘルデルは、ハーマンに教へられて、舊約聖書の詩的價值を知れり。又オッシアン、ホメール、シヨークスピアの研究等、一にハーマンの教示に依れり。ハーマンの詩歌に關する説は、次章天才時代の思潮を論ずるによつて明かならん。

ヘルデルの學は、頗る多方面にして、宗教、神學、言語學、哲學、歴史、審美學、詩學等の諸書を涉獵したり。ヘルデルは、文學に於てレッシングの態度を學び、批評を試みたり。『獨逸文學に關する論文』(イ) (フラグメンテ、ツール、ドイッチェン、リテラトゥール)は、千七百六十七年に出づ。其赫裁レッシングの『文學書簡』と相似たるものにして、當時の著作を評論したるものなり。(ロ) 『クリティシシエー、エルデル』は、千七百六十九年に出づ。三篇より成る。第一篇はレッシングの『ラオコオン論』を批評したるものにして、主としてレッシングが詩歌は、成形的美術と異なり、動作を叙するものにして、物體を

其儘に描く能はずと云へるを非難したり。次の二篇は、クロツの作を評したるなり。

ヘルデルの態度は、レッシングと相似たりと雖も、これ形式の類似にして、批評の内容に至りては、大に相反する所あるなり。レッシングの文筆は明亮なり、然るにヘルデルは、ハーマンの遺風を受け、虚大の文字を列ねたり。レッシングは、議論の明確を貴び、ヘルデルは、修辭を重ねずるの風ありき。一言以て之を掩へば、レッシングの批評は、客觀的にして、ヘルデルの批判は、多く主觀的範圍を脱せざりき。

ヘルデルは、ホメール、オシアン、シエクスピア及び古代の俗語を愛讀したり。千七百七十三年ゲーデと『獨逸文藝論集』ハ、(ブレッテル、フォン、ドイツェル、アルト、ウント、グンスト)を出版したり。此論集中にヘルデルの二論文あり、一はオシアン及び古代の俗語を論ずるものにして、他の一は、シエクスピアを論じたるものなり。

ヘルデルは、舊約聖書中の語を、眞の詩歌として貴び且つ研究せしが、

其結果として、(ニ)『エルテステ、ウルクンデ、デス、メンシエンゲシヨレヒツ』及び(ホ)『フォーム、ガイステ、デル、ヘブレイシエン、ボエジ』等の著出でたり。千七百八十八年に出でし『歌謠に現はれたる國民の聲』(ヘ) (ステイムメン、デル、フェルケル、イン、リーダレン)は、各國民及び各時代の著名なる俗語を集録したるものにして、上は希臘より、伊太利、佛蘭西、英吉利、西班牙等を始めとし、其他各國の俗語を或は翻譯し、或は摸擬したるなり。外國民の思想及び觀念を、獨逸文學に輸入したるヘルデルの功は、大に賞す可きなり。

ヘルデルが外國文學を獨逸文壇に紹介したるは、俗語の外、西班牙のロマンツェン集を翻譯したるト、『デル、チャド』なり。最後の作にて殊に名あり。此翻譯の成りしは、其臨終の年即ち千八百三年なり。此詩は、もと西班牙の十一世紀頃の物語にして、カワールの伯爵ロドリゴ、ディアーツと云ふ勇者の事蹟を歌ひたるものなり。全篇四章に分かたる。詩中ロドリゴは、當時の殺伐亂闘の世の中に在りても、武士の徳義を重ね、勇敢に

して、眞實且つ自由を愛する勇者として寫さる。ヘルデルは、此詩を譯するに西班牙の原文によらずして、大部は佛文譯によれり。

詩歌に關する著作は、上述の如し、哲學的の論文にては、(チ)『イデー、ツール、フロゾフ、イデル、ゲシヒチ、デル、メンシ、ハイト』の著最も名あり。此書は、自然と人生との關係を述べて、歴史哲學に論及したるものなり。次いで人類教育の事を論じたる論文(リ)『フリー、フミッ、ル、ベ、フル、デル、ング、デル、フ、マニ、テ、ト』あり、博愛主義を鼓吹したるものなり。ヘルデルは翻譯の外自から詩を作りしも、創作の天才にはあらざりき。されど能く詩歌の美を味ひ、審美眼を有し、他人の作を模擬して其意を傳ふるに長じたり。最後に注意す可きは、ヘルデルの事業の大目的は、創作にあらず、批評にあらずして、人道を説き、耶蘇教の博愛主義を實行するにありき。

第六章 天才時代。

何れの世、何れの國、政治に經濟に、文學に、美術に、刷新と云ひ、革新と呼

ぶの聲を聞かざる時あらんや、今茲に天才時代と云ふも、文藝上の革新に外ならざるなり。眞正なる詩歌は法則に拘泥せず、形式の束縛を受けずと主張したる活潑なる運動なり。詩歌に法則なし、形式なし、若し法則あり、形式ありとせば、詩人は、其天才を發揮する能はず、天地の聲、自然の響何を以て傳ふるを得んとは、蓋し此時代に於ける青年文士の抱負なりき。

十八世紀の中葉に至り、獨逸文學は、大に光彩を放てり。ミルトン崇拜を唱へたるクロップシュトックあり、情的文學を推奨したるキーランドあり、炯眼なる批評家レッシングあり、然るに此時に當り、隣邦佛蘭西に、無爲自然なる理想社會を説きたるルソー出てたり。千七百七十年代に當り、突如として革新文學の思潮、青年文士の間に起り、獨逸文學史上未曾有の偉觀を呈したる、蓋し偶然にあらざるなり。

此革新思潮は、後ること僅かに二十余年にして、佛國の社會及び國體を轉覆したる佛蘭西革命と、其精神に於て異なることなし。然りと雖

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)
(クラウシテス、ムス、及びロマンタイスムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラウシテス、ムス、第六章 天才時代。